

原田西遺跡（大阪府域）

——猪名川流域原田下水処理場拡張工事に伴なう調査報告——

1981年3月

猪名川流域原田下水処理場遺跡調査団

原田西遺跡

—猪名川流域原田下水処理場拡張工事に伴なう調査報告—

1981年3月

猪名川流域原田処理場遺跡調査団



序 文

西摂平野には猪名川と武庫川の二大河川のほか、それに付随するいくつかの小河川が流れている。そのうちでも猪名川水系には、史跡・田能遺跡をはじめ、勝部遺跡・利倉西遺跡など著名な多くの遺跡が散在している。他に比して猪名川水系に沿って遺跡が多いのには理由があった。例えば『佐吉神社司解』に、「為奈川に大石なく芦草生い、武庫川に大石ありて芦草なし」と記されているように、古く猪名川の流れはゆるく、武庫川は荒れ狂う川であった。そうした異なる川の性質は、川沿いの自然環境をまた変えていたであろう。そのため水稻農耕地として、弥生時代の人びとは、この猪名川水系の沃野を求めて定住したのであろう。

しかも猪名川下流域に点在する各遺跡は、それぞれの地域において拠点となつた集落であった。そして北九州から河内・大和へ向けて最初に東遷した物部一族の中で、猪名川流域に定住したのは木下を業とした為奈部たちであった。弥生文化を知るためにには、その点においても重要な地域にある遺跡だといえる。

今回の調査地は有名な田能遺跡と勝部遺跡とに挟まれた中間の地域である。そのため遺構として考古学的に顕著なものをみるとできなかつたが、両集落の生活領域を確認できたことに価値があつたと思う。つまり大阪府側では勝部遺跡の西限を確保し、また兵庫県の調査でも田能遺跡の生活領域を知ることができるものと思う。したがつて当時における集落のあり方や、遺跡の位置づけを果たした点で、今回の調査も意義あるものであった。

今回の調査にあたつては、殊のほかお世話をなつた大阪府北部流域下水道部事務所・猪名川流域原田処理場事務所をはじめ関係各位、また発掘主任の柳本照男君を中心にして終始努力していただいた発掘担当の諸君に対し、深く感謝の意を表し、刊行の言葉とする。

昭和56年春

猪名川流域原田処理場遺跡調査団

調査団長 烏越憲三郎

例　　言

1. 本書は、猪名川流域下水道原田処理場拡張工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は、鳥越憲三郎が豊中市教育委員会より依頼を受け、猪名川流域下水道原田処理場遺跡調査団を組織し、大阪府北部流域下水道事務所と委託契約を結んで、1978年7月より、1980年3月まで実施した。
3. 遺跡名は、兵庫県教育委員会文化財課と打ち合わせを行ない、原田西遺跡と命名した。
4. 整理作業は、1980年7月より1981年3月まで豊中市郷土資料室にて行なった。
5. 本書の執筆は下記の者が分担し、また文末に明記した。

第Ⅰ章…………島田義明

第Ⅱ章…………橋本正幸

第Ⅲ章…………島田義明

第Ⅳ章…………1・2　　柳本照男

3・4・5・6　橋本正幸

第Ⅴ章…………厚美正子、橋本正幸、柳本照男

第Ⅵ章…………柳本照男

6. 本書の作成にあたって、鈴木重治、下村晴文、岡田章一諸氏に御教示を得た。記して感謝いたします。

7. 本書の作成について、遺構、遺物の整図は各担当者が行ない、遺物実測、復原作業は厚美正子の指導のもとに、沢京子、大石登茂子、倉中さち代、福井真由美、兼田伊子が行なった。写真撮影は田中晋作が行ない、編集は柳本照男が担当し、田中晋作の援助を受けた。

8. 調査にあたっては、補助員として、黒飛誠己、福田薫、前田和徳、徳田彦次、坂本正幸、森口調男、田中孝典、高橋正則、北岡雅臣、小嶋久夫、金沢哲人、（大阪経済法科大学） 横村寅行、入山恵一、遠水信也、森原修二、石坂圭介、（国学院大学） 宇田川正宏、（明治大学）

西川修…、（早稲田大学） 等の協力を受けた。

また、調査期間中兵庫県教育委員会小川良太氏をはじめ、榎本誠一、岡田章一、加古千恵子の諸氏にはひとかたならぬお世話をになった。記して感謝いたします。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機.....	1
第Ⅱ章 位置と環境.....	3
第Ⅲ章 調査の経過	
(1) 目的と方法.....	6
(2) 調査日誌抄.....	8
第Ⅳ章 調査結果	
(1) 第1調査区.....	10
(2) 第2調査区.....	15
(3) 第3調査区.....	19
(4) 第4調査区.....	25
(5) 第5調査区.....	26
(6) 第6調査区.....	28
第Ⅴ章 出土遺物.....	31
第Ⅵ章 まとめ.....	66

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図.....	2
第2図 航空写真.....	5
第3図 調査地域全体図.....	7
第4図 第1調査区 基本土層図.....	10
第5図 第1調査区 全体図.....	11
第6図 条里遺構交点 平面図.....	12
第7図 溝1 平面図・断面図.....	13
第8図 溝2 断面図.....	14
第9図 溝3 断面図.....	15
第10図 南東部 平面図.....	15
第11図 第2調査区 全体図.....	16
第12図 第2調査区 基本土層図.....	17
第13図 条里遺構 断面図.....	17

第14図	溝1 断面図	18
第15図	河川状造構 断面図	18
第16図	第3 調査区 基本土層図	19
第17図	条里遺構 断面図	20
第18図	近世土坑 断面図	20
第19図	中世土坑 断面図	20
第20図	第3 調査区 全体図	21
第21図	河川1-3 断面図	22, 23
第22図	河川1-5 断面図	22, 23
第23図	河川1-6 溝5 平面図 断面図	22, 23
第24図	溝2 断面図	22
第25図	溝3・4 断面図	23
第26図	溝6 平面図	23
第27図	第4 調査区 基本土層図	25
第28図	縄文土器 出土状態図	26
第29図	第5 調査区 基本土層図	26
第30図	弥生時代溝・条里遺構 断面図	27
第31図	河川 断面図	28, 29
第32図	第6 調査区 基本土層図	29
第33図	排水溝 平面図	30
第34図	縄文土器 拓影図	31
第35図	弥生土器 実測図	42
第36図	弥生土器 実測図	43
第37図	弥生土器 実測図	44
第38図	弥生土器・須恵器 実測図	45
第39図	須恵器・須恵質土器 実測図	46
第40図	土師器・上師質土器・瓦器 実測図	47
第41図	陶器1 実測図	48
第42図	陶器2 実測図	49
第43図	磁器・染付磁器 実測図	50
第44図	染付磁器 実測図	51
第45図	石器 実測図	52

第46図	ナスピ形着柄鉤 実測図	53
第47図	尖頭状木製品 実測図	54
第48図	火箸・釘 実測図	54
第49図	杭 実測図	55
第50図	古錢 拓影図	56
第51図	埴輪 拓影図	57
第52図	滑石製品	57
第53図	伏見人形	57
第54図	遺構検出全体図	67

表 目 次

第1表	須恵器・須恵質土器 観察表	58
第2表	土師器・土師質土器 観察表	60
第3表	瓦器 観察表	61
第4表	陶器 観察表	62
第5表	磁器・染付磁器 観察表	64
第6表	染付磁器 観察表	65

図 版 目 次

図版1 第1調査区

- (1) 全景
- (2) 条單遺構交点

図版2 第1調査区

- (1) 南東部 弥生時代
- (2) 南東部 弥生時代

図版3 第1調査区

- (1) ナスピ形着柄鉤
- (2) 弥生土器(表)

図版4 第2調査区

- (1) 全景
- (2) 条里遺構

図版5 第2調査区・第3調査区

- (1) 第2調査区 条里遺構断面
- (2) 第3調査区 西側部分

図版6 第3調査区・第4調査区

- (1) 第3調査区 石包丁
- (2) 第4調査区 繩文土器

図版7 第5調査区

- (1) 全景
- (2) 河川

図版8 第5調査区

- (1) 弥生時代 溝
- (2) 古墳時代 溝断面

図版9 第5調査区・第6調査区

- (1) 弥生時代溝・条里遺構 断面
- (2) 第6調査区 全景

図版10 第6調査区

- (1) 排水施設（上から）
- (2) 排水施設（横から）

図版11 繩文土器・弥生土器

図版12 弥生土器

図版13 須恵器・土師器・瓦器・陶器

図版14 陶器・磁器

図版15 染付磁器

図版16 石器

図版17 木製品

図版18 古錢・火箸・釘

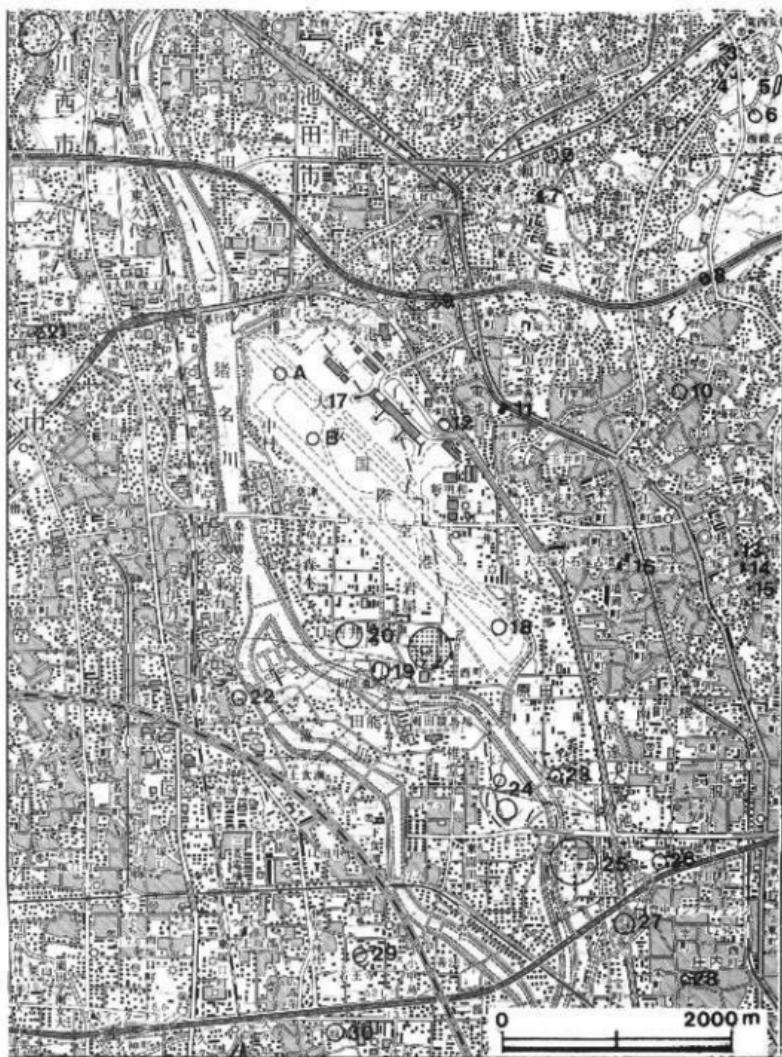
第Ⅰ章 調査の契機

大阪府豊中市原田西町、兵庫県伊丹市岩屋、尼崎市田能の2府県3市にまたがる約15万m²の範囲に猪名川流域下水道原田処理場拡張工事が計画された。この計画地は、東側に勝部遺跡、西側に田能遺跡が位置し、その中間地帯にある。このようなことから遺跡確認のために、兵庫県側と大阪府側、それぞれに予備調査が実施された。大阪府側では先に予備調査を行なった兵庫県側の調査結果を参考にしながら、1976年12月より翌年の3月まで(財)大阪文化財センターによって実施された。その結果、弥生時代以降の遺構が散在的に検出され、遺物も各時代のものがそれぞれ出土した。

このような調査結果に基づいて、1978年7月より本調査に入り、1980年3月まで2年間にわたって実施した。

調査団組織

団長	鳥越憲三郎	文学博士・大阪府文化財保護審議会委員・豊中市文化財保護委員会委員長
調査委員	藤井直正	大手前女子大学助教授・日本考古学協会会員
"	瀬川芳則	大阪府立寝屋川高校教諭 "
"	萩田昭次	東大阪市立中学校教諭 "
"	三星恵有	豊中市教育委員会社会教育部長
"	吉岡 等	豊中市役所下水道部長
事務局長	富田 博	豊中市教育委員会社会教育担当次長
次長	佐々木修治	豊中市教育委員会元社会教育課課長補佐(第1、第2年次担当)
	桑原善孝	豊中市教育委員会社会教育課文化係長(第3年次担当)
参事	山下博義	豊中市猪名川流域下水道事務所長
	都出比呂志	豊中市猪名川流域下水道建設課長
調査員	島田義明	第1年次現場主任
	柳本照男	第2年次現場主任
	厚美正子	
	橋木正幸	
	木下 喜	



- | | | | | |
|-----------------|------------|---------------|------------|--------------|
| 1. 加茂遺跡 | 7. 持兼山古墳 | 13. 大塚古墳 | 19. 田能遺跡 | 25. 上津島遺跡 |
| 2. 渕川遺跡 | 8. 下村町近窓跡 | 14. 鶴舞子冢古墳 | 20. 口酒井遺跡 | 26. 德積ボンブ場遺跡 |
| 3. 衣葉丘窓跡2-23 | 9. 宮ノ前遺跡 | 15. 南天平塚古墳 | 21. 伊丹庵寺跡 | 27. 島田遺跡 |
| 4. 太鼓塚古墳 | 10. 金寺山廃寺跡 | 16. 大石冢・小石塚古墳 | 22. 菩名寺廃寺跡 | 28. 庄内遺跡 |
| 5. 桜井窓跡2-24, 19 | 11. 駒神山古墳 | 17. 大阪空港A・B遺跡 | 23. 利倉遺跡 | 29. 若王寺遺跡 |
| 6. 野面遺跡 | 12. 竹瀬西遺跡 | 18. 緑都遺跡 | 24. 利倉西遺跡 | 30. 下坂部遺跡 |

第1図 周辺遺跡分布図

第II章 位置と環境

原田西遺跡は、大阪府豊中市原田西町・兵庫県伊丹市岩屋の両市にわたり所在する遺跡である。大阪国際空港内にある豊中市の勝部遺跡と、猪名川の中流域左岸に立地する尼崎市の史跡田能遺跡とのほぼ中間地点に位置しており、標高4.5m前後で、遺跡の範囲は東西400m、南北350mに及ぶ。

武庫川や猪名川の扇状地の複合によってつくられた伊丹砾層の隆起により、両河川の間に、典型的な低位段丘である伊丹台地が形成されている。この台地の南端部は、繩文海進によって海蝕を受け、海岸段丘として発達し、現在台地から尼崎平野へ接続するあたりに、地形的不連続線を残している。西浜平野は、この繩文海進の海と伊丹段丘の線辺部が、武庫川・猪名川・淀川などの堆積作用を受けて形成された沖積層の一部である。原田西遺跡は、この西浜平野の東部に位置し、西に六甲山系、北に長尾山系・箕面山系、東北に千里丘陵を望む猪名川の中流域左岸に立地している。

周辺には、旧石器時代後期から歴史時代にかけての著名な遺跡、古墳、窯跡、庵寺跡などが多数分布する。

猪名川流域には、旧石器時代の石器分布地が点在しており、ナイフ形石器・三棱尖頭器など
^{註1}が出土した川西市の加茂遺跡、ナイフ形石器を出土した池田市の宮ノ前遺跡・豊中市の賓池西遺跡などがある。

千里丘陵の北側には、繩文時代前期と後期の土器・石器を出土している瀬川遺跡があり、中期の土器包含地として大阪空港A遺跡、後期の遺跡に豊中市の野畠遺跡がある。また繩文時代晚期から弥生時代へと継続して行く遺跡に伊丹市の口酒井遺跡がある。
^{註2}

弥生時代の遺跡には、打製石棺を腹部に受けた人骨が検出された勝部遺跡、旧石器も出土している加茂遺跡・宮ノ前遺跡、原田西遺跡の東南方向に立地する上津島遺跡、穂積遺跡などが報じられている。また弥生時代から古墳時代にかけて継続して行く遺跡には、木棺・銅鏡・玉類などが多数出土している田能遺跡、その南東方向に利倉西遺跡・庄内遺跡があり、大型の土鍤などの漁撈関係の遺物が多量に出土した鳥田遺跡、尼崎市の若干寺遺跡・下坂部遺跡などがあげられる。

古墳時代になると、長尾山地に立地する宝塚市の万葉山古墳、五月山丘陵に立地する池田市の茶臼山古墳・娛三堂古墳、千里丘陵の待兼山古墳、刀根山丘陵の御神山古墳などの前期古墳が出現している。中期には、豊中台地に北摂地域最大の桜塚古墳群が形成され、その東方には猪名野古墳群がつくられている。^{註3} 桜塚古墳群は、明治の記録では円墳・方墳・前方後円墳など

の各形式を有する36基の古墳が確認されていたが、現在は大石塚・小石塚古墳・大塚古墳・御獅子塚古墳・南大平塚の5基しか現存していない。本町の宮山古墳群や桜井谷の太鼓塚古墳群は後期のもので、これらの古墳は横穴式石室に4基ぐらいの陶棺を納めており、桜井谷を中心とする独特な古墳群として知られている。長尾山地には、終末期古墳の長尾山古墳群があり、また遺跡には銅鐸の耳を出した利倉遺跡や黄池西遺跡などがある。

千里丘陵の桜井谷には、古墳時代から奈良時代にかけての窯が80基以上確認されていたが、近年の宅地開発によりほとんどの古窯跡は消滅している。桜井谷古窯跡群は、吹田古窯跡群とともに千里古窯跡群とよばれている。^{註10} 大阪府南部に所在する陶邑古窯跡群よりも一時期遅れて須恵器生産が開始され、6世紀に最盛期をむかえ、7世紀後半には衰退する。

歴史時代になると寺院が創建されるようになる。調査によって法隆寺式伽藍配置が確認された飛鳥時代建立の伊丹庵寺跡・尼崎市の猪名守庵寺跡、白鳳時代建立の金守山庵寺跡などが知られている。また猪名川流域の村落や寺院周囲には、条里制が施行されてゆく。^{註11} (橋本)

註1 武藤誠「考古学からみた伊丹地方 文化的あけぼの」(川西市史第1卷 1974年)

註2 沢城「大阪府池田市宮ノ前遺跡採集のナイフ形石器について」(ブリーフード20号 1977年)

註3 斎藤直正「原跡・古代の箕面 墓場文化とその遺跡」(箕面市史第1卷 1971年)

註4 佐原真「考古学からみた伊丹地方 白鳳時代」(伊丹市史第1卷 1971年)

註5 犀中市野柳造跡は、編文時代後期前葉から中葉にかけて位置づけられる遺跡である。
近日中に刊行する報告書を参照されたい。

註6 伊丹市教育委員会の最近の発掘調査において、編文時代後期の絆塔式、沼背單式土器などが多数出土している。

註7 鳥越憲二郎、岸井源次、沢谷亮、江口亮、神田芳則「陣部遺跡」(犀中市教育委員会1972年)

註8 須坂元一・村川行弘・朝倉昌太その他の「丹波遺跡便観」(尼崎市文化財調査報告第5集 尼崎市教育委員会 1967年)

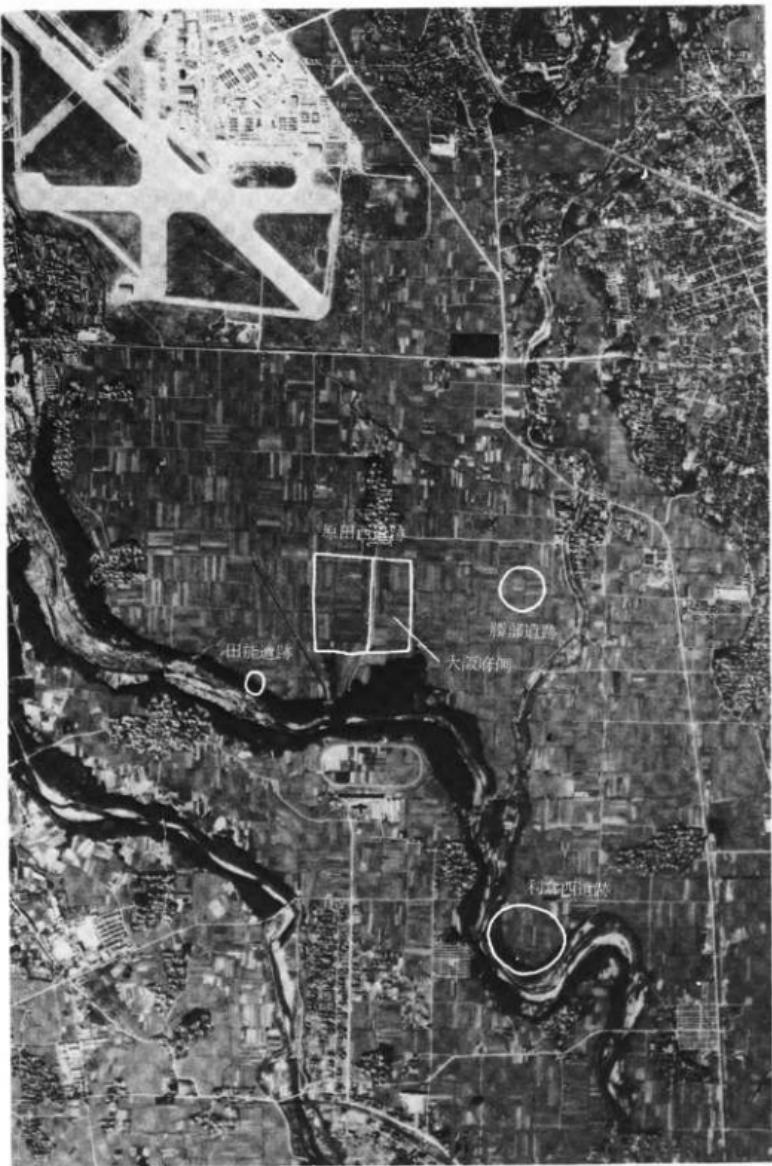
註9 斎沢一夫「古代の豊中」(豊中市史第1卷 1961年)

註10 田辺昭三「海苔古窯跡群1」(平安学院考古学クラブ 1966年)

註11 「相作伊丹庵寺跡」(伊丹市教育委員会 1966年)

註12 「猪名守庵寺跡調査報告第1期」(尼崎市文化財調査報告第1集 尼崎市教育委員会 1952年)

註13 昭和54年に犀中市教育委員会が、発掘調査を実施した。各種の遺構にともなう遺物が出土し、瓦當は山川寺・圓光寺と同形の軒丸瓦を使用している。



第2図 航空写真

第III章 調査の経過

(1) 目的と方法

今回の調査における目的については、隣接している兵庫県側の発掘調査結果や、大阪府側の(財)大阪文化財センターによる試掘調査結果に述べられている通り、弥生時代に関する遺構等の検出という点に最大のウエイトがある。この点については、兵庫県尼崎市田能に所在する史跡・田能遺跡と大阪府豐中市の大阪国際空港内に所在する勝部遺跡というこの地域における弥生時代の大集落に、今回の調査地が挟まれているということによるものである。今回の調査においてもこれらの集落と集落が併存する空間地域が、どのように利用され、またどのような生活の痕跡が残されているかという点に問題点を絞って調査を実施した。さらに、その他の問題点として(財)大阪文化財センターの試掘調査で検出した掘立柱建物の性格、この付近一帯にみられる条里遺構の解明などにも留意し、調査を実施したものである。

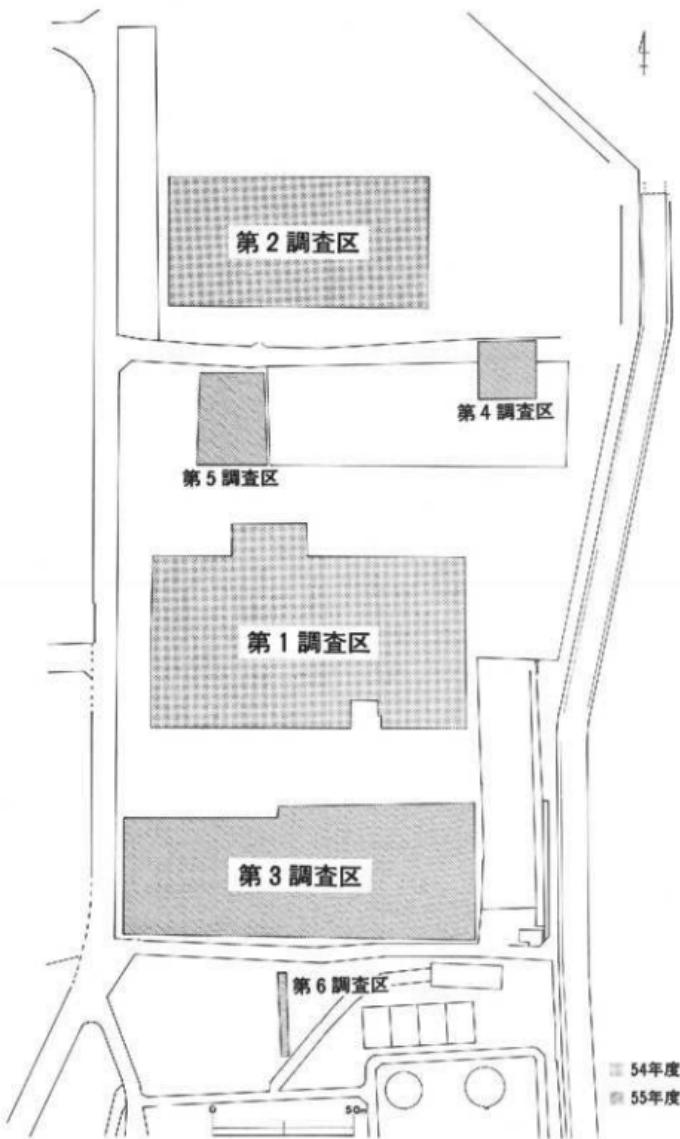
方法については、工事計画に合わせて発掘調査対象地域を6区域に分け、それぞれ順を追って実施した。以下、調査面積と期間を示すと次の通りである。

年度	調査区	面 積	期 間
53	1	6200m ²	昭和53年7月13日～9月29日
"	2	4050m ²	昭和53年10月21日～12月25日
"	1区北拡張部	200m ²	昭和54年1月5日～1月26日
"	5(一部)	288m ²	昭和54年1月29日～2月18日
"	1区東南端足部	370m ²	昭和54年2月21日～3月25日
54	3	6500m ²	昭和54年7月23日～12月27日
"	4	400m ²	昭和55年1月29日～2月15日
"	5	875m ²	昭和55年2月18日～3月27日
"	6	180m ²	昭和54年11月16日～12月17日

上記調査区のうち、53年度の第5調査区は掘立柱建物遺構との関係などから、兵庫県教育委員会と共同調査を実施した地区である。第6調査区は、土層の状態を把握するために53年度にポーリング調査を実施した。

各調査区の表示については、処理場建設予定地全域に5mの方眼網を設け、番号を付した。番号は各調査区ごとに独立しており、北西角を基点として南方向にA、B、C……東方向に1、2、3……とし、これらを組み合わせて1-A-1、2-D-8などと表示した。

発掘にあたっては、各調査区が広いため、南北、あるいは東西に幅2mの上層観察用の壁を



第3図 調査地域全体図

残した。調査の手順については、(財)大阪文化財センターの試掘調査により、上層部(耕土および床土)は無遺物層であることが確認されているため機械を使用し、削除した。手掘の際には遺構確認のため、まずレンチ調査を実施し、遺構の検出状況に応じてグリッド調査に切り替えるように心がけた。したがって記述の場合にレンチ番号と地区表示名が併用して用いられている調査区もある。

(島田)

(2) 調査日誌抄

昭和53年度

- 7月13日 第1調査区開始。器材搬入。
14日 緑草刈り。
21日 G-1～I-1 トレンチ設定
8月1日 条田溝検出中。L-12第5層(暗灰色粘土)上面で溝検出。
4日 C-14 溝底よりナスビ形埴輪出土。
10日 先里溝写真撮影。溝内埋土削除。
20日 A-10より東南方向にトレンチ設定。
溝検出中。
23日 A-10付近 グリッド調査。
30日 B-1 溝写真撮影。平面実測。
9月2日 A-10～J-22 壁埋土削除。溝中より弥生土器片出土。
5日 J-19～J-22 第3層、第4層削除。
第1層より須恵器片出土。
11日 J-19～J-22 第5層(暗灰色粘土)上面で溝検出。弥生土器、壺、台付鉢出土。
15日 A-22～F-22 トレンチ設定。J-19～22 遺構掘出。
20日 J-19～22 写真撮影、実測に入る。
21日 第1調査区内の断面図作成に入る。
25日 平板測量始める。
29日 実測すべて完了し第1調査区の調査を完了する。
10月2日 第2調査区の調査に入る。
5日 A-3～A-10 第2層までの機械掘定。並行して基準杭打設める。
13日 I-3～I-10 トレンチ設定。H-6～7にかけて南北方向に走る溝検出、周辺を拡張する。
18日 条田溝内より、陶磁器片出土。切り合って南北方向にのびる。
23日 条田溝 平面実測完了。
11月1日 A-3～A-6 第7層上面まで削除 遺構なし。D-6～10 第7層上面で幅5m前後の溝検出。
8日 H-4～H-10 トレンチ設定。第5層上面まで削除始める。
14日 A-8～D-8 方向に走る大溝の堆積
- 17日 H-6～I-7 方向に走る溝掘り完了。
18日 H-6～I-7 の溝 写真撮影。
26日 A-8～D-8にかけての遺構は自然河川である。
30日 F-11～D-20のトレンチ、第5層上面まで削除中。
12月3日 I-11～I-20 トレンチ設定。
7日 I-15で大溝検出。
13日 F-11、I-15の河川の堆積土削除始める。A-20～I-20 トレンチ設定。
16日 A-11～A-20 トレンチ完了。
18日 F-12～F-20 完了。
23日 A-11～I-11 第7層上面まで削除 遺構認められず完了。平板測量、断面図作成に入る。
25日 平板測量完了。断面類の点検をして調査を完了する。
1月6日 第1調査区の北拡張部分調査に入る。
7日 機械掘削の後、基準杭設定。
14日 第4層削除始める。
16日 第5層上面の一部で溝の検出。
19日 第5層上面まで削除完了。A-10の溝が北側では、二叉に分かれている。
23日 溝内掘り上げ完了。写真撮影。
24日 平面実測に入る。
26日 平面実測完了。平板測量し、調査を完了する。
29日 第5調査区道路部分、兵庫県と合同調査開始する。
2月18日 合同調査を完了する。
21日 第1調査区の南東部袖足部分調査に入る。基準杭設定。
3月2日 第5層上面で小溝と大溝検出。
3日 清掃し写真撮影。遺構内掘り始める。
7日 大溝内より石包丁片出土。
11日 小溝内より弥生中期の土器片出土。
14日 自然泥地内より木片、板片出土。
22日 清掃し写真撮影。実測準備始める。
24日 平面、断面実測完了。
25日 平板測量をし調査を完了する。

昭和54年度

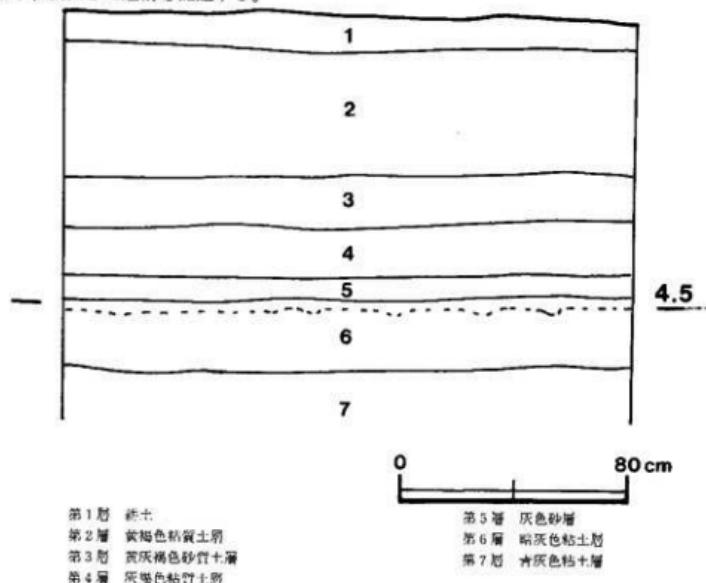
- 7月23日 第3調査区の打ち合せを行なう。
本日より調査を開始する。表土より第2層まで機械掘削。第3層より削除する。A-I-01地区まで、基準杭設定。A-I-8地区で南北方向の条溝検出。溝内からは、陶器破片出土。A-I-01~2地区にかけて、近世土坑、小溝を検出。第3層の精査完了。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 8月15日 A-I-01~24地区第4層まで削除。
遺構は、ほとんど認められず不整形なピットを検出。第4層内に土器、瓦器、須恵器等を含んでいる。
- 9月10日 A-I-23~24地区第5層まで削除。
第5層上面で、4条の溝を検出。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 15日 B-I-10~11地区第5層まで削除。
第5層上面で、河川、1条の枝状溝を検出。河川の北岸斜面には、杭列と人为的に切り込んだ小溝が認められた。河川内からは、弥生中期の土器、石包丁出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 10月1日 A-I-8地区第5層まで削除。第5層上面より、河川、1条の溝を検出。河川には、杭が打ち込まれていた。弥生中期の土器出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 13日 A-I-6地区第5層まで削除。第5層上面より、河川、1条の溝を検出。河川の北岸には、人为的な掘り込みが認められた。河川から弥生中期の土器出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 26日 A-I-4地区第5層まで削除。第5層上面より、東から継続してくる河川、3条の溝を検出。河川内から弥生中期の土器出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 11月12日 D-II-3地区第5層まで削除。第5層上面より、D-II-3地区から継続してくる河川、3条の溝を検出。溝内から弥生中期の土器出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 30日 A-I-1~2地区第5層まで削除。第5層上面より、各地区で、河川、溝を検出。河川、溝内から弥生中期の土器出土。
- 12月26日 A-I-01地区的河川、溝の写真撮影後、遺構、断面、平板測量図作成。
- 27日 本日で、第3調査区調査完了。
- 1月29日 本日より、第4調査区調査開始。表土層より第2層まで機械掘削。A-E-24~27地区まで、基準杭設定。
- 1月31日 A-E-24~27地区第3層上面まで精査する。遺構は認められなかった。
- 2月4日 A-E-24~27地区にかけて、第4層より、東西方向の条溝検出。条溝内から陶器類出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 9日 A-E-24~27地区にかけて、第5、6層まで削除したが、弥生中期の遺構は検出されなかった。A-27地区的第6層から縄文中期の土器出土。
- 14日 本調査の写真撮影後、断面図、平板測量図作成。
- 15日 本日で、第4調査区調査完了。
- 18日 本日より、第5調査区調査開始。表土層より第2層まで機械掘削。A-G-4~8地区まで基準杭設定。
- 20日 A-G-4~8地区第3層上面まで精査する。A-G-8地区で、南北方向の条溝を検出。条溝内から陶器類多数出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。A-G-4~6地区第4層上面まで削除する。
- 3月2日 A-G-4~8地区第4層を精査する。中世の包含層で、多数の遺物を含んでいる。遺構は存在しなかった。
- 12日 A-G-4~8地区第5・6層まで削除。A-C-6~8地区で、第5層より、弥生、古墳期の河川検出。河川は、人为的に改修した形跡が見られる。河川内から若干の土器出土。写真撮影後、遺構、断面図作成。
- 20日 F-G-8地区第5層上面より、1条の溝を検出。溝内から弥生中期の土器出土。写真撮影後、遺構、断面、平板測量図作成。
- 27日 本日で、第5調査区の調査完了。
- 11月16日 本日より、第3調査区と並行して、第6調査区の調査開始。南北に33×3mトレンチ設定。表土より第3層まで機械掘削。
- 18日 第3、4層上面まで削除したが、遺構は、存在しなかった。
- 22日 第5層上面まで削除。
- 30日 調査区内の南端部で、弥生中期の排水溝検出。溝の两岸には、多量の杭が打ち込まれていた。写真撮影後、遺構、断面、平板測量図作成。
- 12月17日 本日で、第6調査区の調査完了。

第Ⅳ章 調査結果

(1) 第1調査区

まず調査区全域にトレーニチを設定した。トレーニチの幅、また長さは一定していなく、進行状況に応じて対応させた。そのうち北部の拡張部分と南東の補足部分は全面調査を行なった。

以下、検出した遺構を記述する。

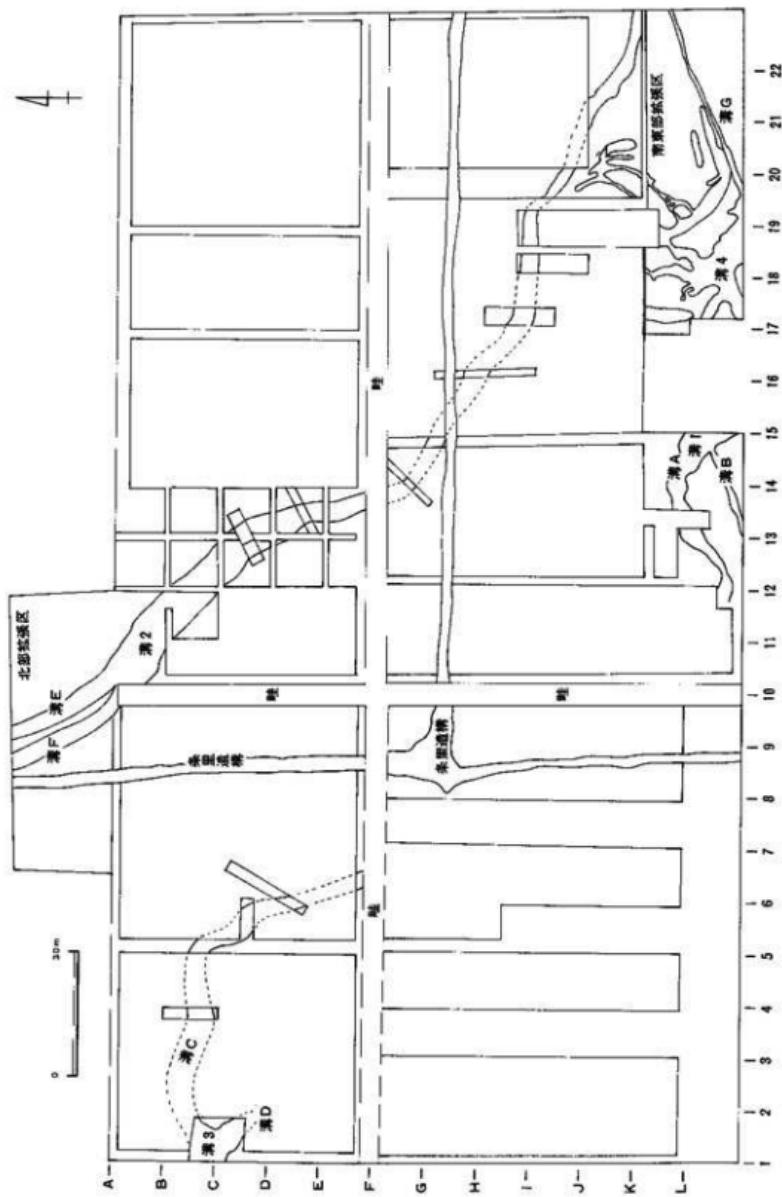


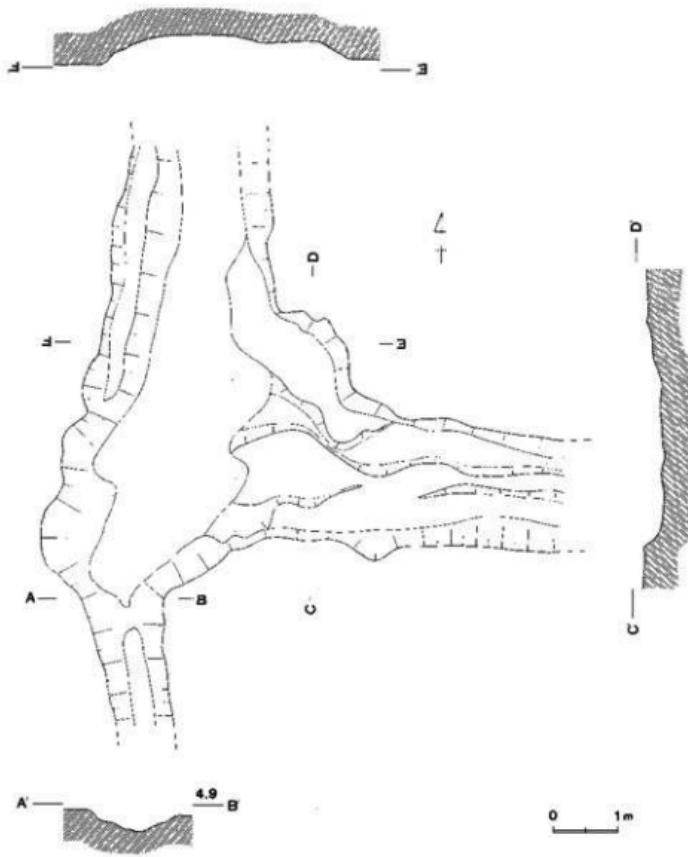
第4図 第1調査区基本土層図

基本土層 この調査地の基本的な層序は第1層耕土、第2層は5cm間隔ぐらいで互層され、堆積も厚く約40cmである。第3層は約20cmの堆積で、中世遺物を多く含む。第4層も同じく約20cmの堆積で、中世遺物も包含しているが須恵器も含む。第5層の砂層は調査区の北半分に堆積しており、南側ではない。この層より古墳時代の遺物を多く含む。第6層の上部は鉄分が沈着したような黄褐色粘土層で、下部は暗灰色粘土層である。この層は調査地域全面にわたっており、泥炭地であったことが窺われる。検出した多くの遺構はこの面より切り込んでいる。

条里遺構 第3層上面より切り込んでいる溝を検出した。G-9地区に交点を置き、南北と東西方向には検出したが、西方には検出できない。断面を観察すると、表土にも同じように溝が

第5圖 第1調查區全體圖





第6図 条里造構交点 平面図

あり、何回か改溝しながら現在に至っている。また現地表の溝が条里制の坪境の溝として考えられていることより、検出した溝も条里制の溝であることが見える。

溝幅約1m、深さ約0.5mで、交点部分で若干広くなっている。溝中より近世陶磁器類が出土し、また第3層が中世遺物を包含していることより、近世に初まる溝であることがわかる。交点部分には特に多くの杭が打ち込まれていた。

溝1 L-12~L-15地区で検出した。東西に走るもので、2本の溝が東側で合流し、南東方向に流れをもつ。溝Aは西方上流で自然消滅する。合流地点の溝幅4.5m、深さ0.5m、溝A

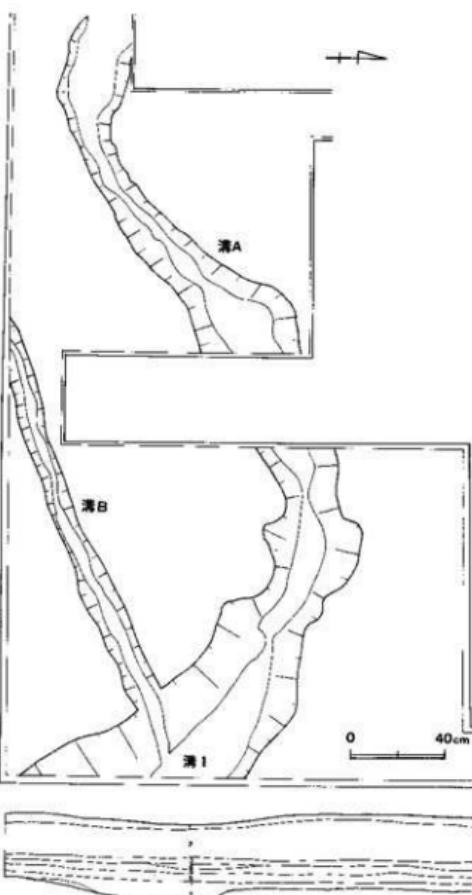
幅1.5m、深さ0.3m、溝B幅0.7m、深さ0.2mである。合流地点の溝底で、ナスビ形着柄鉗が出土した。溝A内より、弥生土器片、石錐が出土した。土器片は風化が激しく時期判定は極めて困難であるが、おそらく中期のものと思われる。合流地点では遺物は1点も出土していないが、時期は決めるのであるが、溝A内出土遺物、また他の検出した溝も同じく暗灰色粘土層を切り込んで、溝中に弥生時代中期の上器を含んでいることより、弥生時代中期には存在していた溝であると考えられる。

溝2 A-10地区よりJ-22
地区にかけて検出した溝である。第6層（暗灰色粘土）より切り込んだ溝で、北西部は幅3m、深さ1.5m、南東部は幅1.5m、深さ0.5m、高低差は約40cm程度、北西部が低く溝幅も広い。したがって、南東方向から北西方向に流れをもつものと思われる。

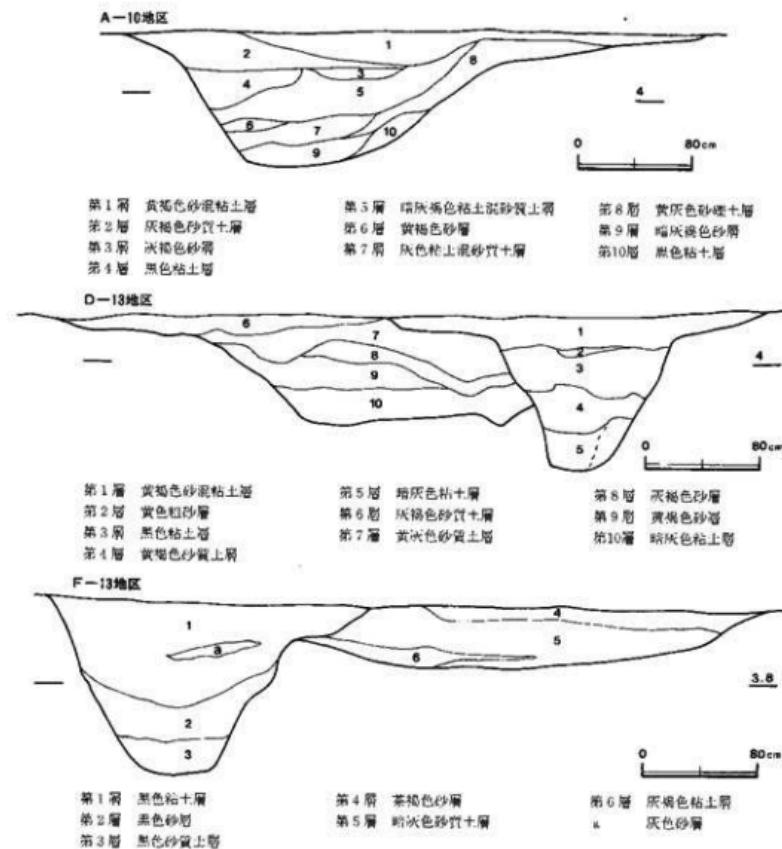
断面を観察するとこの溝は、自然流路を改修して断面U字状に深く掘ったことが窺える。自然

流路の方は、幅は広いが浅いものである。溝内より弥生時代中期の上器が出土する。

溝3 北西部で第6層（暗灰色粘土）より切り込まれた二叉に分かれる溝を検出した。溝CはE-6付近より北西に延び、幅、深さとも増しながらB-5付近で西方に曲がり、B-1地点で溝Dと合流する。溝DはC-2付近で自然消滅する。合流地点の溝幅5m、深さ1.5mで、



第7図 溝1 平面図・断面図

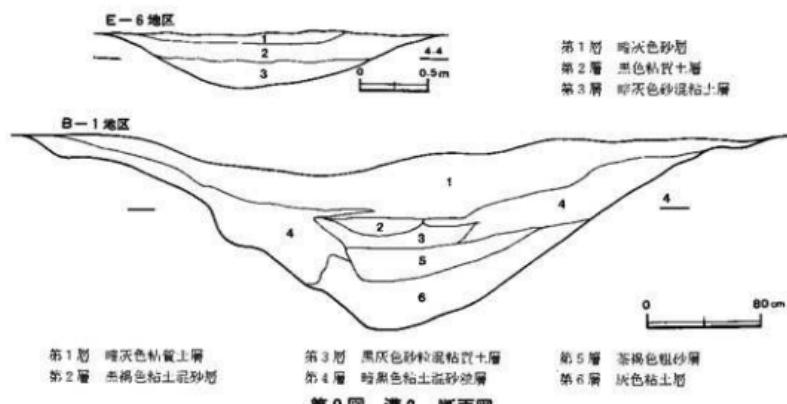


第8図 溝2 断面図

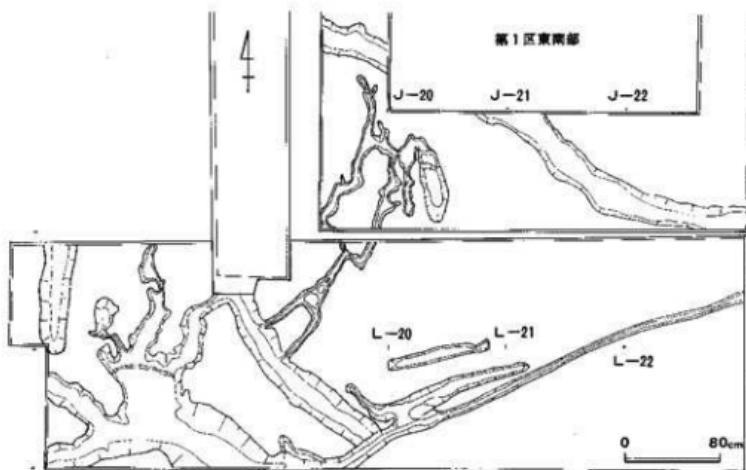
南東方向より西方に流れをもつ流路である。時期は、出土遺物もなく決めかねるが、弥生時代の自然流路と考えられる。

北側拡張部 溝2の北側（A-10）延長部と条里遺構の北溝の延長調査である。北西方向に延びる2本の溝を検出した。溝Eは幅約1.5m、深さ約0.7mで、溝Dは幅約1.5m、深さ約0.5mである。これらの溝は、溝2がA-10で分岐するものである。

南東部調査区（J-19~22, K・L-16~22） 第6層（墓灰褐色粘土）より切り込んだ、大小の溝と土坑を検出した。暗灰色粘土層の上面および遺構内に弥生時代中期の土器が出土する



第9図 溝3 断面図



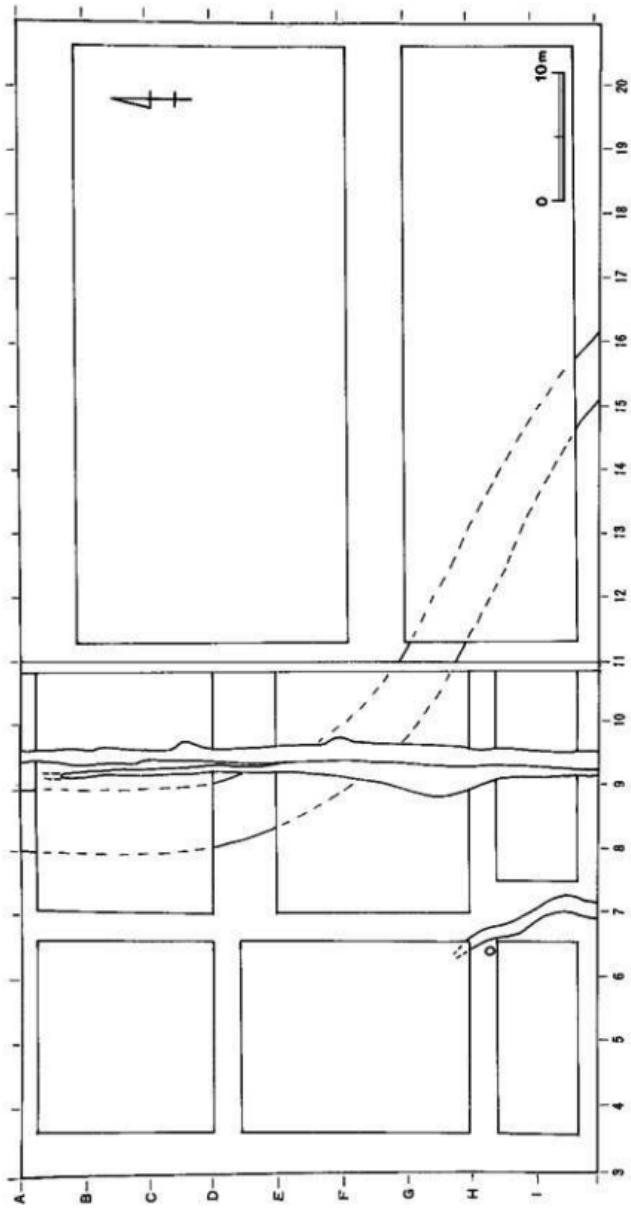
第10図 南東部 平面図

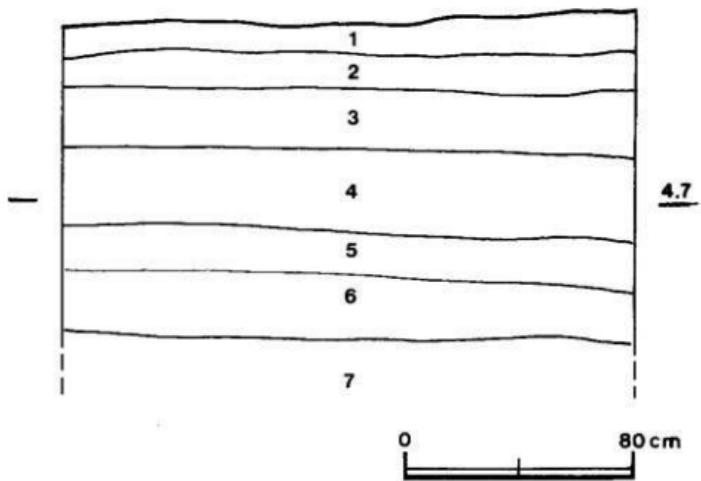
ことより、弥生時代中期の遺構と考えられる。大溝は幅、深さとも一定していなく、方向も規則性がないことなどから自然流路であると考えられる。これらの大溝に直交するように小溝が何本か掘られ、壁面の掘り方も垂直に近く、明らかに人工のものである。

(2) 第2調査区

第1調査区と同じように、まずトレーナーを設定し、遺構確認に努めた。その結果、第6層上面の溝、土坑、第3層上面の条理構造、第7層上面の自然流水路を検出した。

第11図 第2調査区 全体図



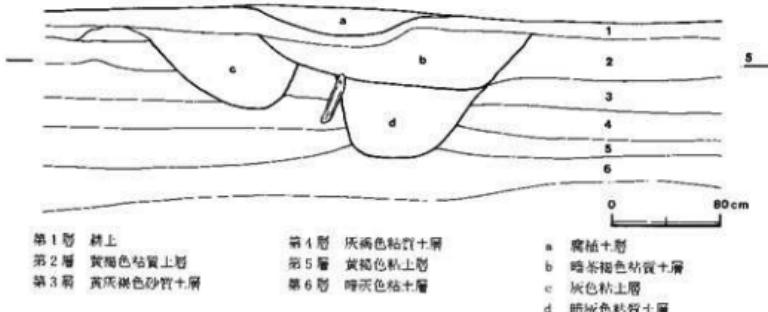


第1層 耕土
第2層 黄褐色粘質土層
第3層 黄灰褐色砂質土層
第4層 灰褐色粘質土層

第5層 黄色或灰色砂層
第6層 灰褐色粘土層
第7層 青灰色粘質土層

第12図 第2調査区基本土層図

基本土層 第2調査区の基本的層序は第1調査区とほとんど同じであるが、ただ北西部では第6層(暗灰色粘土)の上層に砂の堆積が多く、層位が乱れ、かなり氾濫を受けていたことが窺える。第1層耕土、第2層黄褐色粘質土、第3層黄灰褐色砂質土、第4層灰褐色粘質土、第5層黄色および灰色砂層で東部には及ばない。第6層暗灰色粘土、第7層青灰色粘土で、第1層より第7層までの堆積土は、第1調査区ほど厚くはない。

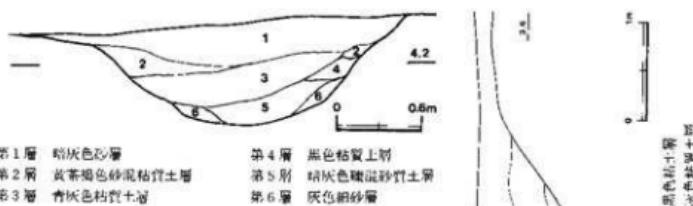


第1層 耕土
第2層 黄褐色粘質土層
第3層 黄灰褐色砂質土層

第4層 灰褐色粘質土層
第5層 黄褐色粘土層
第6層 單灰色粘土層

a. 黑褐色土層
b. 暗茶褐色粘質土層
c. 灰色粘土層
d. 単灰色粘質土層

第13図 条理構造 断面図



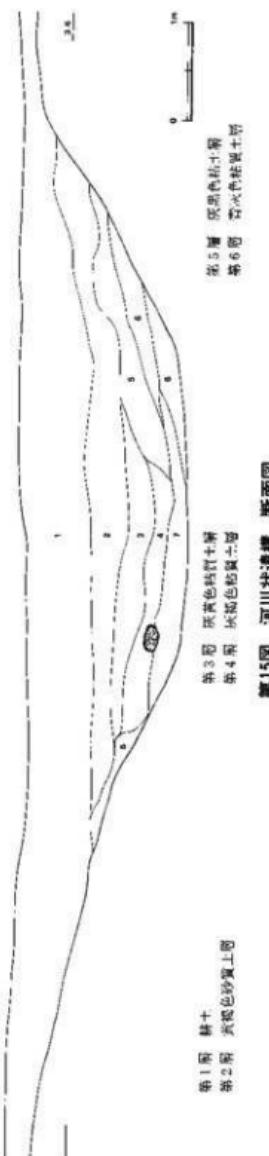
第14図 溝1断面図

条里遺構 第1調査区G-9地区に交点を置き、北に延びる溝の延長部分である。溝は現在のものを含め、四時期にわたって改修されている。最も古い時期は第3層（黄灰褐色砂質土）上面から切り込まれ、第1調査区と同じように、溝中から近世陶器類が出土する。溝幅約1.5m、深さ0.6mである。

溝1 調査地の西南部（H-6-I-7）、第6層（暗灰色粘土）上面で検出した溝である。北西より南東方向に走るもので、北側で設定したトレンチでは検出されなかつたため、自然消滅しているものと考えられる。溝幅約0.8m、深さ約0.25~0.3m、溝内堆積土は砂層で遺物は含んでいない。したがって時期は決めかねるのであるが、上層の砂礫層より6世紀以降の須恵器、土師器が出土することから、その時期にはすでに埋没している自然流路であると考えられる。

土坑 流水路に接して、西側（H-6）で検出した。径0.6m、深さ0.3m前後で、他には検出できず、どのようなもののかは不明である。溝と同時期のものと考えられる。

河川状遺構 第7層（青灰色粘土）上面で検出した流水路で、北西（A-8）付近より南東（I-15）付近にかけて、調査地を斜め横断する。断面を観察すると、第7層以下でも層位が乱れ、流木をかなり含むことより、自然河川であったことが窺える。その後、徐々に上砂の堆積により狭くなり、検出した状態で幅5m、深さ1.5mである。最上層で第6層（暗灰色粘土）が堆積しており、弥生時代中期



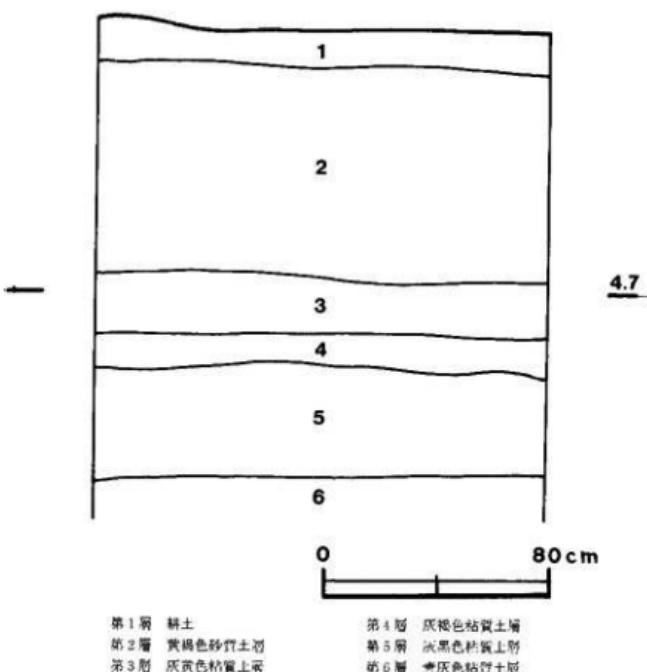
第15図 河川状遺構 断面図

には消滅してしまった河川であると考えられる。

(柳本)

(3) 第3調査区

第3調査区は、第1調査区の南部に位置している。本調査区で検出した遺構は、第1調査区で検出された弥生時代中期から近世までの各遺構が、延長してきたものと同一であると思われる。

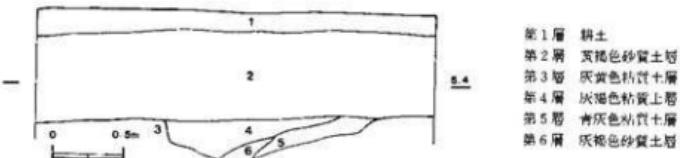


第16図 第3調査区 基本土層図

基本土層 第3調査区の基本的な層序は、6層に大別できる。近世の堆積層は安定した堆積を見るが、A-0～5地区からI-0～5地区にかけて、弥生時代中期上面までは一定した堆積を示さず、猪名川の氾濫によって、土砂が断続的な堆積状況を示している。

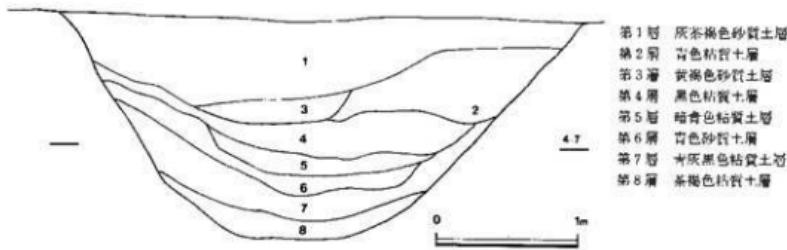
第3調査区で検出した遺構は、弥生時代中期から近世にかけての遺構である。検出した遺構を概観すると弥生時代中期の河川、溝、杭列、中世の所蔵時期不明の土坑、近世条里遺構、土坑などである。

条里遺構 A-8～I-8地区で検出した溝である。第1調査区のA-8～L-8地区から



第17図 条里遺構 断面図

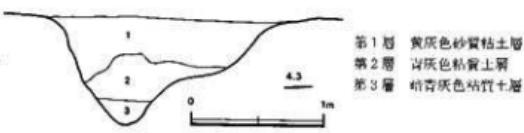
南北方向に延びてくる条里遺構で、第3層（灰黄色粘質土）上面から第4層（灰褐色粘質土）を切り込んでいる。溝幅1.5m、深さ0.3mを計る。溝の両岸は緩傾斜を呈しており、底面は平扣である。堆積土は、3層に区分されて灰褐色粘質土、青灰色粘土、灰褐色砂質土層による互層である。遺物は、陶磁器類などが含まれていた。



第18図 近世土坑 断面図

近世土坑 G-01~02地区で検出した江戸時代の土坑である。第3層（灰黄色粘質土）から第6層（青灰色粘質土）を切り込んだU字状の土坑である。土坑径3.7m、深さ1.5mを計る。埋土は、自然による堆積状況を示すものではなく人為的な埋め戻しが認められ、砂質土、粘質土層による擾乱層である。

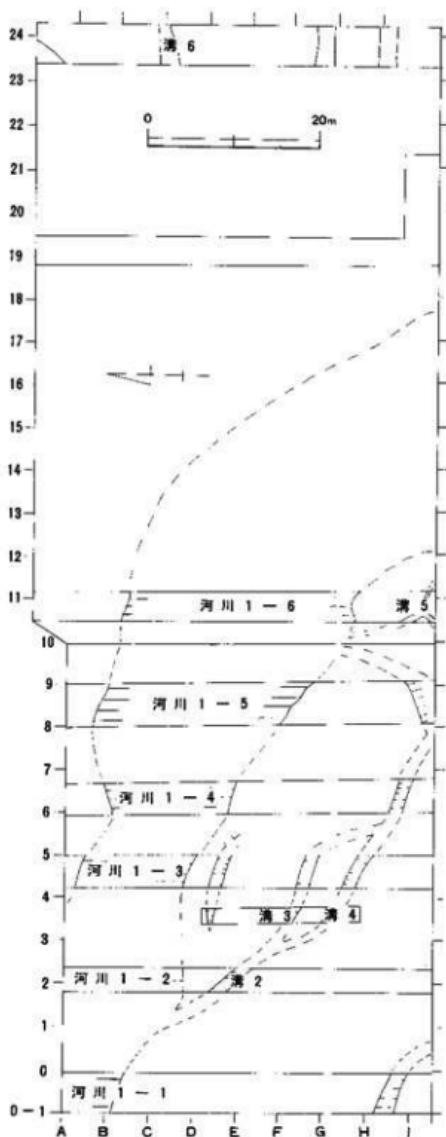
中世土坑 E-01地区の西壁断面で検出した土坑である。西壁断面での検出なので、土坑の全体は不明である。土坑は、第4層（灰褐色粘質土）



第19図 中世土坑 断面図

から第5層（灰黒色粘質土）を切り込んだV字状の土坑である。土坑径1.7m、深さ0.8mを計る。埋土は、黄灰色砂質粘土、青灰色粘質土、暗青灰色粘質土層である。遺物は、土師器片、木片などが含まれていたが、時期決定は定かにしがたい。

河川1-3 A-4~D-4地区で検出した弥生時代中期の河川である。河川は、第5層（灰黒色粘質土）から第6層（青灰色粘質土）を切り込んでおり、第5層で埋没する。河川幅15m、深さ1.8mを計る。両岸は、対称的ではなく、南岸は急傾斜で、北岸は緩傾斜を呈して、底

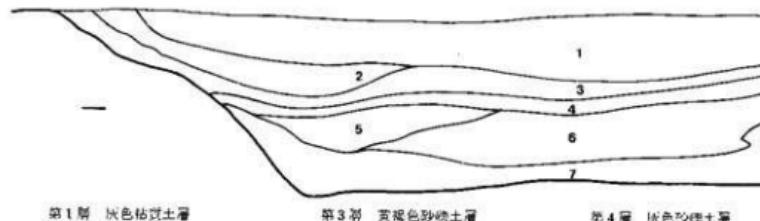


第20図 第3調査区 全体図

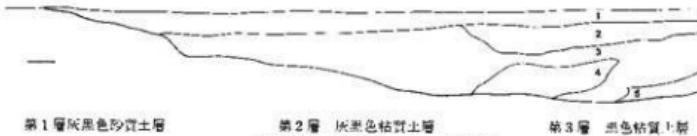
面は平坦である。堆積土は、粘質土、砂質土、砂礫土層による互層である。遺物は、弥生時代中期の壺形土器が出土した。

河川 1-5 A-8 ~ F-8 地区で検出した河川で、A-1 ~ 4 地区から E-1 ~ 4 地区で検出した河川が南東方向に続行してくるものである。河川は、第 5 層(灰黒色粘質土)から第 6 層(青灰色粘質土)を切り込んで、底面の砂礫層まで及んでいる。河川は第 5 層で埋没する。河川幅 24m、深さ 1.6m を計る。河川の両岸は、緩傾斜を呈して、底面は平坦である。河川には、板杭の施設が認められ、杭は河川が埋没した後に打ち込まれたものとは考えられず、河川内に土砂が徐々に堆積していく過程において、打ちこまれた可能性が高い。堆積土は、灰黒色砂質土、黑色粘質土、黑色有機質粘土、シミ状鉄分沈殿層による互層である。遺物は、堆積土上層より弥生時代中期の壺形土器、サヌカイト剝片などが出土した。

河川 1-6 B-10 ~ H-10, 11 地区で検出した河川で、河川 1-5 が直行する。第 5 層(灰黒色粘質土)から第 6 層(青灰色粘質土)を切り込んでおり、河川は第 5 層で埋没する。河川幅 26.7m、深さ 1.8m を計る。両岸は、階段状の緩傾斜を呈す。



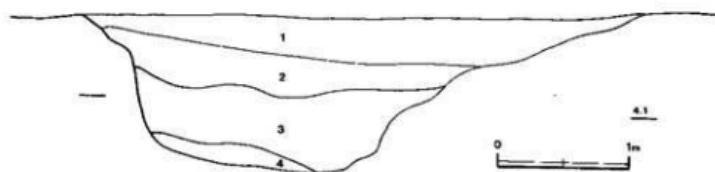
第21図 河川 1-3 断面図



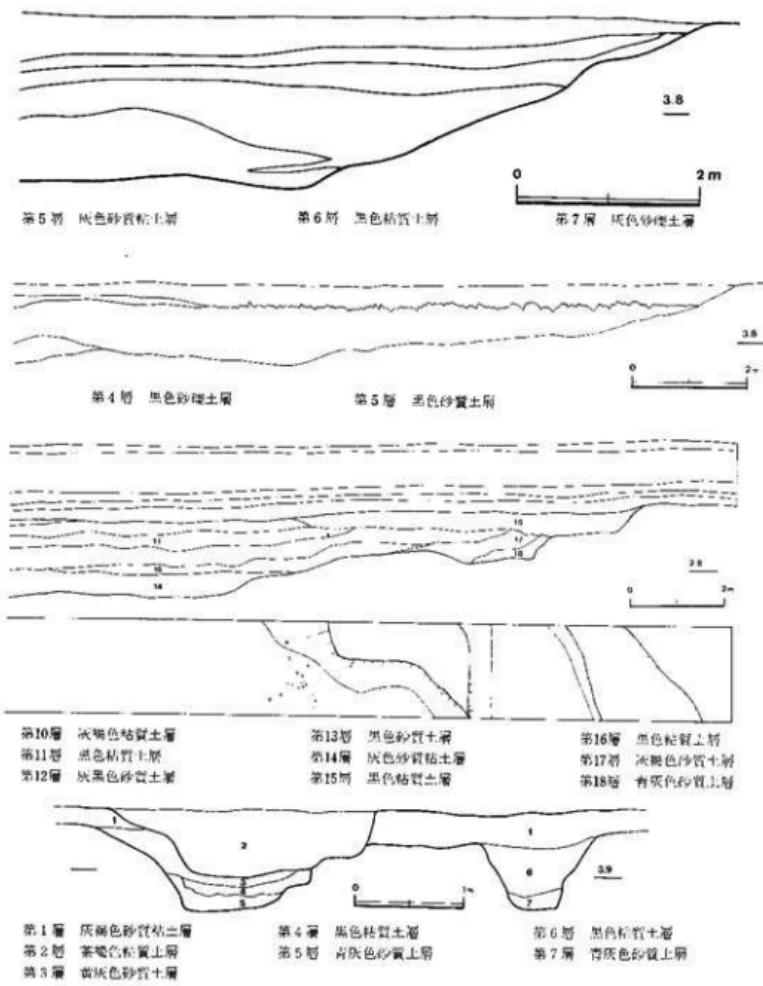
第22図 河川 1-5 断面図



第23図 河川 1-6・溝 5 平面図 断面図



第24図 溝 2 断面図



第25圖 溝3·4 斷面圖



第26圖 溝6 平面圖

して、底面は平坦である。北岸の斜面には、第6層から溝が切り込まれている。北岸には、10本前後の削杭が一列方向に打ち込まれていた。河川の堆積土は、黒色粘質土、有機質粘土、砂礫土層による互層である。遺物は、堆積土上層に比較的多く含んでおり、弥生時代中期の壺形土器、甕形土器、石包丁などが出上した。

溝2 D-1～E-1地区で検出した弥生時代中期の溝である。溝は、第5層（灰黒色粘質土）上層から第6層（青灰色粘質土）まで切り込まれていて、第5層上面で埋没する。溝幅4.2m、深さ1.15mを計る。両岸は、第5層から緩傾斜を呈して、第6層で直角に切り込まれている。堆積土は、砂質土、粘質土層による互層である。

溝3 F-3～G-3地区で検出した中世、弥生時代中期の溝が重複している。中世の溝は第4層（灰褐色粘質土）から第5層（灰黒色粘質土）を切り込んでおり、溝幅2.4m、深さ0.6mを計る。南岸は緩傾斜しており、北岸は急傾斜を呈して、底面は平坦である。弥生時代中期の溝は、第5層から第6層（青灰色粘質土）を切り込んでおり、溝幅2.5m、深さ0.7mを計る。両岸は緩傾斜を呈して、底面は平坦である。堆積土は、砂質土、粘質土層による互層である。遺物は、壺形土器が出上した。

溝4 溝3の南側で検出した弥生時代中期の溝である。溝は、第5層（灰黒色粘質土）から第6層（青灰色粘質土）を切り込んでいる。溝8、9は、第5層上面で埋没する。溝幅1.05m、深さ0.55mを計る。両岸は急傾斜を呈して、底面は平坦である。堆積土は、砂質粘土、砂質土層による互層である。

溝5 H-10・11～I-10・11地区で検出した弥生時代中期の不定形な枝状溝である。溝は、第6層（青灰色粘質土）から切り込まれて、第5層（灰黒色粘質土）で埋没する。溝幅0.35m、深さ0.2mを計る。溝の両岸は、急傾斜を呈しているが、底面は平坦である。堆積土は黒色粘質土が堆積している浅い溝で、北側の河川1-6に直行する。

溝6 C-D-23・24地区で検出した弥生時代中期の溝である。溝は、第5層（灰黒色粘質土）から第6層（青灰色粘質土）まで切り込まれていて、第5層上面で埋没する。溝幅2.3m、深さ0.5mを計る。両岸は緩傾斜を呈して、底面まで及んでいる。堆積土は、砂質土、砂層による互層である。

流路について 第3調査区の河川は、A-0～10地区からI-0～10地区で検出した。兵庫県側で検出しているシカラミ状遺構の河川が、本調査区の河川1-1に続行する。河川1-6付近に位置している（財）大阪文化財センター第20トレンチで検出している河川岸が、河川1-3に直行する。流路方向は、第20図に示すように河川は1-6にゆくにつれて、底面は低くなり、流路は蛇行しながら北西から南東方向に、流れていたと考えられる。

河川の岸には、護岸施設と考えられる杭群が認められた。河川1-4～6には、河川堆積土

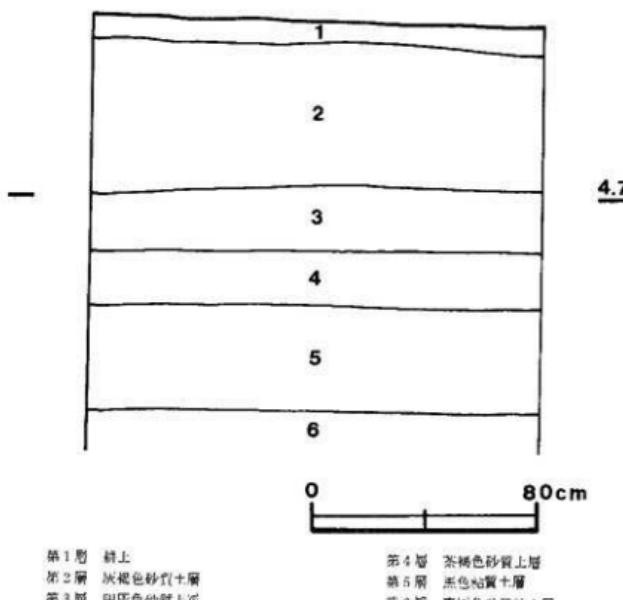
内には杭列を有している。これらの杭は、河川が徐々に堆積する段階に打ち込まれている。河川1-5・6の北岸には、円形、溝状の掘り込みの形跡が認められた。これらは、水の浸蝕作用によって形成されたとは考えられず、人為的な護岸を目的とした施設の可能性が強い。

河川の付近には、河川の付属施設と考えられる溝群が分布している。第20図に示すように数条の溝が枝状に分流しながら本河川に合流するものと思われる。

(4) 第4調査区

第4調査区は、第5調査区の東側に位置しており、大同圧延工業の進入道路と大同圧延工業内の東地域にあたる。

第4調査区では、近世の条里遺構を除いては、遺構は検出されなかった。遺物では、縄文地積層より縄文時代中期の土器が出土した。



第27図 第4調査区 基本土層図

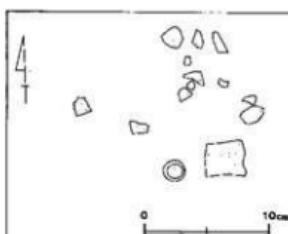
基本土層 第4調査区の基本的な層序は、6層に区分できる。A-27地区は、第1層から第2層まで基本層序で第3層からは若干異なり、9層に区分できる。A-24-27地区的第5層まで水平な堆積状態を示すが、第6層より南西にかけて、ゆるやかに傾斜している。A-25-26

地区的第3層は、江戸時代の水田開発による擾乱土である。

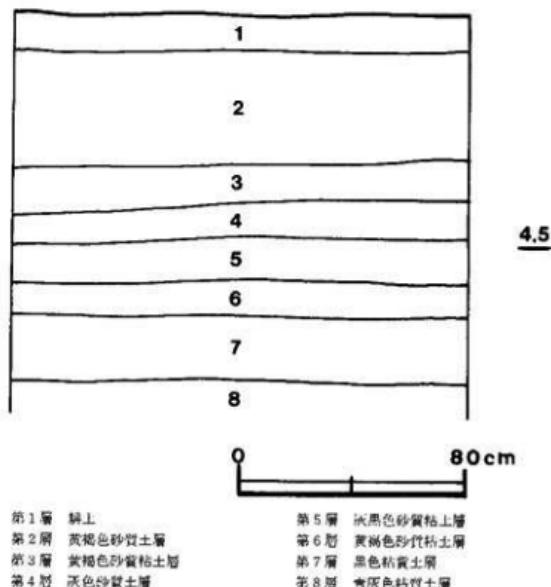
条里遺構 A-24~27地区にかけて検出した東西方向の溝である。溝の北岸は遺存していたが、南岸は大同庄延工業の工事で掘削され、溝幅は不明である。溝は、第5調査区で検出した条里遺構の東岸に本溝が直交する。溝は、第4層（茶褐色砂質土）から第5層（黒色粘質土）を切り込んでおり、北岸には護岸施設と考えられる丸杭が、岸辺に沿って打ち込まれている。堆積土は、青灰色砂質粘土が堆積している。遺物は、陶磁器が出土した。

(5) 第5調査区

第5調査区は、第1・2調査区の中間に位置している。第5調査区の調査目的は、兵庫県側地域、(財)大阪文化財センター第3トレンチ、兵庫県教育委員会と本調査団が共同調査を実施したA-1~3地区からD-1~3地区で検出された、平安時代後期に比定される掘立柱建



第28図 縄文土器 出土状態図



第29図 第5調査区 基本土層図

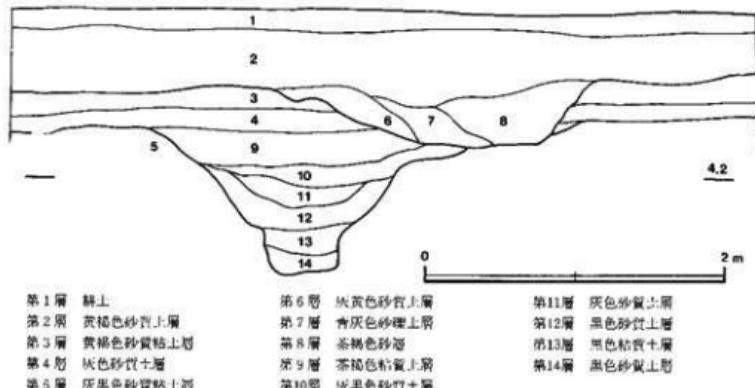
物址群の分布範囲の確認であった。しかし、第5調査区のA-8～F-8地区においては、掘立柱建物址群が存在しなかった。したがって、掘立柱建物址群の分布範囲は、兵庫県側地域と（財）大阪文化財センター第3トレチ付近に数棟存在していたと考えられる。

基本土層 第5調査区の基本的な層序は、8層に大別できる。第2・3層は江戸時代の堆積層であり、第4層は鎌倉時代、室町時代の遺物を含む包含層である。A-4～6地区からH-4～6地区にかけては、基本層序とは若干異なり砂層が多く堆積する。

条里遺構 A-7・8地区からH-7・8地区で検出した溝である。溝は、第1・2調査区で確認している南北方向の溝に直結する。南北方向に走行する1条の溝は、A-8地区の東岸よりT字状に分岐していき、第4調査区で検出している東西方向の溝に直行する。溝は、第3層（黄褐色砂質粘土）上面から第5層（灰黒色砂質粘土）を切り込んでおり、水路幅2.1m、深さ0.4mを計る。溝の両岸は対称的ではなく、西岸は急傾斜で、東岸は緩傾斜を呈して、底面には数本の竹杭、木杭が打ち込まれている。溝の堆積土上は、淡灰黄色土、淡灰茶色土、青灰褐色砂礫土、明青灰茶色土層による互層である。遺物は、土師器、陶磁器、瓦などが出土した。

河川 A-6～8地区からC-6～8地区で検出した弥生時代中期、古墳時代後期の重複する河川である。

河川は、南東から北西方向の流路で、第5層（灰黒色砂質粘土）から第8層（青灰色粘質土）を切り込んでいる。A-6～B-6地区の河川幅4.2m、深さ0.9mを計り、A-7・8地区からC-7・8地区では河川幅11.3m、深さ1.2mを計る。河川幅は、A-7・8地区からC-7・8地区付近で南東方向に広くなる。A-8地区的両岸は、緩傾斜を呈して底面まで及ぶ。南岸の傾斜面には、溝幅1.5mの人为的小溝が切り込まれており、岸には護岸施設と考えられる削杭



第30図 弥生時代溝・条里遺構 断面図



第31図 河川 断面図

が打ち込まれている。河川は、弥生時代中期になると除々に埋没してゆくが、古墳時代後期においても、溝としての機能を果たしていたと考えられる。古墳時代後期の堆積土は、茶褐色砂質土、灰色砂礫土、灰色砂質土層で、弥生時代中期の堆積土は、黒色粘質土、黒色砂質土、灰茶色砂質土層による互層である。遺物は、古墳時代後期の堆積土に須恵器の杯が含まれており、弥生時代中期の堆積土からは壺形土器、木製品などが出土した。

溝 F-8～G-8 地区で検出した南西～北東方向に走行する弥生中期の溝である。溝は、第5層（灰黒色砂質粘土）から第8層（青灰色粘土）を切り込んでおり、溝幅2.9m、深さ0.95mを計る。溝の両岸は、緩傾斜を呈しながら第8層で垂直に切り込まれており、底面は平坦である。溝の堆積土は、砂質粘土、粘質土層による互層であり、第5層上面で埋没する。遺物は壺形土器が出土した。

(6) 第6調査区

第6調査区は、第3調査区の南側、猪名川流域原田下水処理場敷地内に位置している。

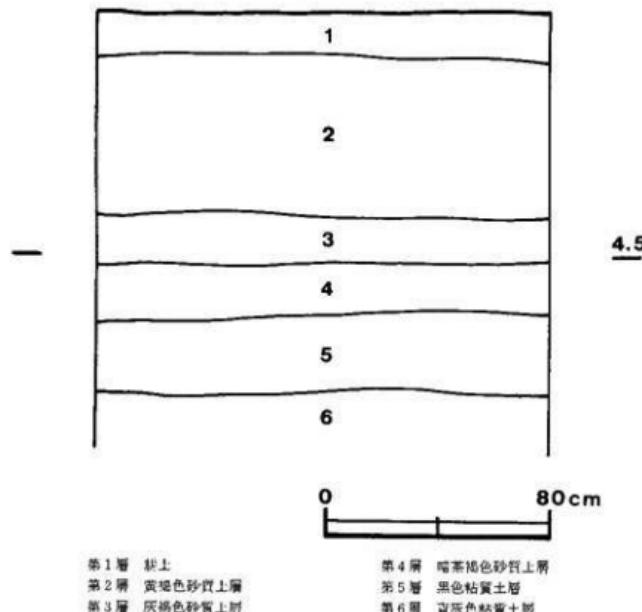
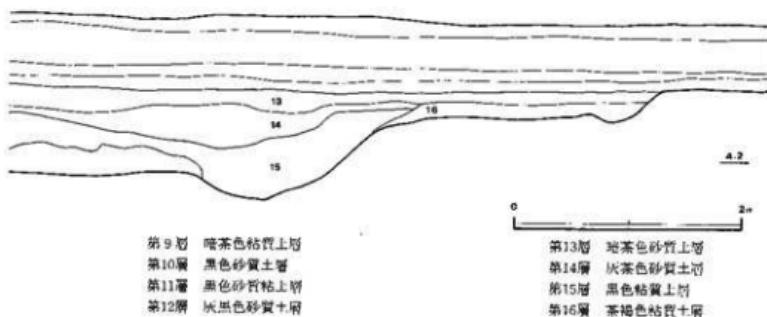
発堀調査を実施するにあたって、地層堆積状況を把握するため、調査区域内にボーリング調査を行ない、沖積層の土壤採取をした。土壤を精査した結果、第3調査区の地層堆積状況とは、なんら異なっていない。

調査区に長さ33m、幅6mのトレンチを南北方向に設定した。表土面から旧表土面（耕土）まで、約5mが盛土である。

基本土層 第6調査区の基本土層は、6層に大別できる。第2層から第5層上面までは、安定した堆積状況を示す。しかし、調査区の南端部付近から、第6層は傾斜する。

排水溝 第6調査区で検出した造構は、弥生時代中期の排水溝である。

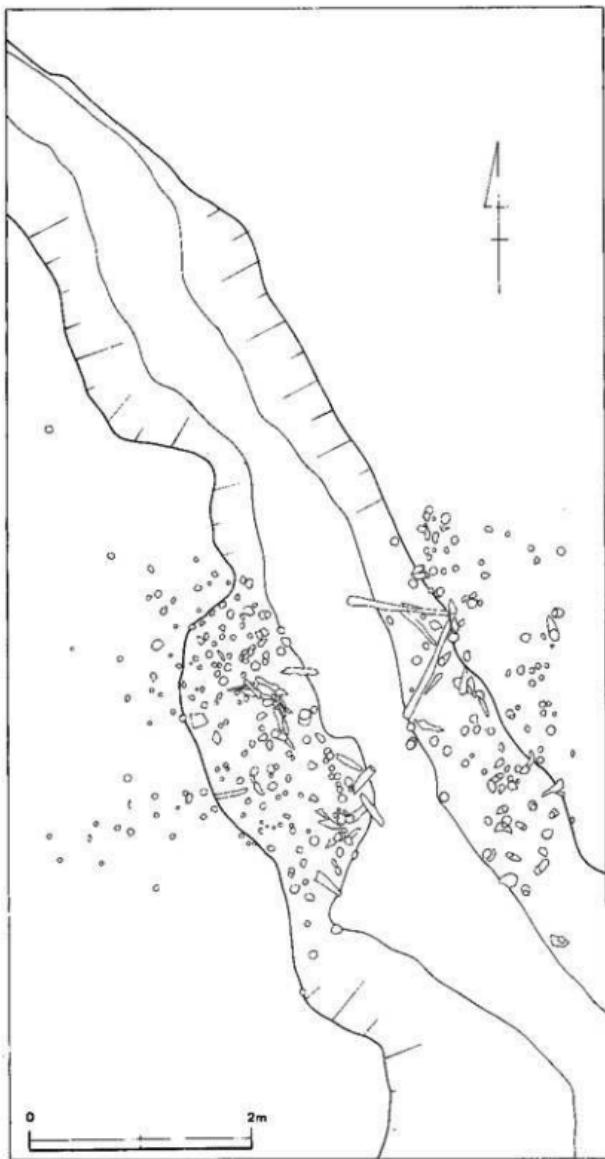
調査区の南端部で検出した溝は、北西～南東方向に傾斜しながら走行する。溝は、第5層（黒色粘質土）から第6層（青灰色粘土）を切り込んでおり、溝幅1.5mを計る。両岸には、1～5cmの削杭、角杭、丸杭などが270本前後垂直に打ち込まれており、これは護岸を目的とした



第32図 第6調査区 基本土層図

施設であると思われる。堆積土は、黒色砂質粘土層が堆積している。

遺物は、第3様式の壺形土器、サヌカイト剝片が出土した。 (橋本)



第33図 排水溝 平面図

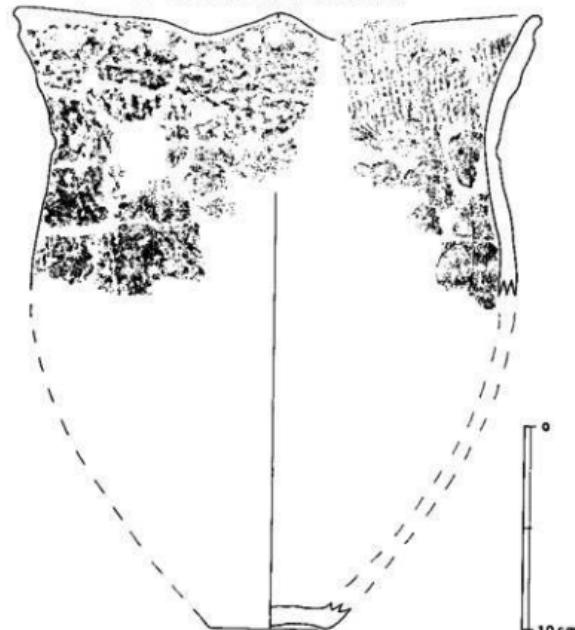
第V章 出土遺物

縄文土器（第34図、図版11-1）

第4調査区A-27地区の第6層より単独で出土している。

縄文時代中期に所属する船元式のI類に比定される深鉢土器である。^{註1}

上器の器形は、ゆるやかな波状口縁を有して、胴部は若干外反しており、底部は浅い凹状を呈する。口縁部外面には貼付突帶文を、口縁部下半から底部上方までは、縄文原体RLの縱走する縄文を、地文として施している。波状口縁部から頭部にかけては、1条の貝殻腹背圧痕文、およびD字状の瓜形刺突文が、口縁部に平行して施されている。波状口縁部の内面には、RLの斜状縄文が縱走している。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。



第34図 縄文土器 拓影図

I器の復原値は、器高30cm、口径26cm、胴径24cm、底径6cm、器厚1cmを計る。

縄文土器の出土層序について記述すると、土器の出土したA-27地区の第6層（青灰色砂質粘土層）と、（財）大阪文化財センターによって実施された第12トレンチの第9層（青灰色粘土層）とは、堆積レベルに差異はないため、両層の南北ラインまではプライマリ…な層序を形成していたと考えられる。しかしながら、A-26地区より第6層は、南西部にかけて傾斜する状況を示し、上器の出土したA-27地区と、A-26地区とのレベル差は、50cm前後を計る。したがって上器が原位置から遊離した可能性が強い。

（橋本）

弥生土器（第35図～第38図、図版11-2～図版12）

第35図1～第36図8は、第1調査区南東部、第4層および第5層上面で出土した遺物である。第35図1は外斜状の長い頸部を有し、口縁部で水平方向に外反し、端部は上方にやや肥厚する。調整は全面ハケで、下半部のみその後に縱方向のヘラミガキを行なう。3も同様である。2は、口縁端部を下方に若干拡張させる。第3様式の土器である。

4は有段の台付鉢で、2条のくずれた波状文を有する。鉢部は内外面ともヘラミガキ、脚部外面は縱方向のヘラミガキ、内面は中程でしばり痕を残し、下方はナデ仕上げである。第3様式の新段階のものと思われる。5～14は第4層中から出土した底部である。5～6は壺で、外面わずかに叩き目の痕跡を残し、内底面はカキ上げとくもの巣状のハケメ調整をする。7は壺の底部で第5様式の土器である。

第36図1と2はT-20地区の土坑で、2は上面、1は坑内より出土したものである。2は外斜状にのびる長い頸部を有し、口縁部で水平方向に外反する。頸部から胴上半部にかけて、横描直線文と波状文を組み合わせ、施文は簡略に行なっている。底部は欠損している。下半部は縱方向のヘラミガキ、内面下半はハケメ調整、上半部はナデ仕上げである。1は口頭部だけを有し、下部は欠損する。口縁部の形態は他の壺と同様、外面に縱方向のヘラミガキ痕がみられる。内面はナデ仕上げだが、風化が激しい。第3様式の上器である。

5は小溝Cから出土したもので、壺の口頭部で下部は欠損している。外斜状にのびた頸部が口縁部で大きく外反し、端部で下方に拡張させ文様帶をつくる。頸部外面には現存で3条の断面三角形の貼り付け凸帯文を有する。拡張した口縁外端面には波状文を施し、その上に二段の円形浮文を貼り付ける。内面上端にも二段の横描列点文を有し、その上に長さ約1cmの棒状浮文を全周させる。加飾された壺で、第3様式の上器である。

5～8は第1調査区溝2から出土したものである。5は壺の口縁部で、外斜状にのびてきた頸部から大きく水平方向に外反する。端部は上方に若干肥厚させる。4は壺の口頭部で、くの字状に外反するものである。外面は風化が激しく表面剥離しているが、わずかにハケメの痕跡がみられる。内面は横方向の荒いハケメ仕上げである。6から8は壺の底部である。これらは第3様式の上器と思われる。

第36図9～第38図5は、昭和54年度の調査で、第3区の河川状遺構内から出土したものである。

第36図9は短く外反する頸部を有し、口縁部で大きく水平方向に開く。最大径を胴の中位に有するが、それよりも器高が勝る壺である。第36図10、11は、おそらく同一個体のものと思われる。ゆるく外反する頸部は、口縁部で水平方向に短く開く。口縁端部を上下に若干拡張させ、文様帶をつくり、外端面に4条の横描直線文を、内面上に列点文を施す。頸部より胴部上半まで波状文と直線文を交互に組み合わす。第3様式の上器である。

第37図1は短く大きく外反する口縁部を有し、口縁部はそのまま丸く終わらせる大型の壺である。胴上半部は横方向のヘラミカキ、口縁部はヨコナデ調整で内面は風化のため不明である。第1様式新段階の土器か。2は外斜状に長くのびた頭部が、口縁部で水平方向に大きく開く並である。口縁径と胴最大径がほぼ等しい。口縁部上端に刻み目、下端にも部分的に刻み目が認められる。頭部より胴部上半にかけて5条の直線文を有する。調整は外面にハケメ、その後下半だけ縦方向のヘラミカキ、内面はナデ、頭部にしばり痕を残す。第3様式の土器である。3は高杯形土器の杯部である。内外面とも縦方向のヘラミカキ、口縁端部はヨコナデを施す。4～6は甕形土器で、4と5は外反させただけの短い口縁部で、4は端面に刻み目を有する。外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。5も外面は同様であるが、内面にハケメが残る。6はくの字状に外折する口縁部で、端部を上下に若干拡張させる。内外面はハケメ調整、口縁部はヨコナデを施す。すべて第3様式の土器である。7は鉢形土器で、底部はくぼみ底に仕上げ、外面に指頭圧痕を残す。外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。第2様式の土器か。

第37図8～第38図5までは胴部より底部のものである。第38図1は第3調査区第6層の暗灰色粘土、3は第4調査区第3層上面、4は第6調査区溝上面より出土したものである。1は底部下半に直径約2cmの焼成後の穿孔を有する。おそらく竪棺として使用されたものと思われる。内外面とも風化が著しい。ほとんど中期のものと思われるが、4は前期のものかもしれない。

(柳木)

須恵器（第38図6～20、第39図1～26）

須恵器は、原形を留めるものを数点出土しているが、他はいずれも細片に近いものばかりである。そのほとんどは杯で、わずかに壺の口縁部や高杯の脚部も含まれる。また、出土地点としては、第1区の第4層を中心として上下の層が大多数を占め、その他、第2、3、5地区にも各々少量の出土がみられる。

第38図6～19は杯蓋である。6は今回出土した杯蓋の中では、天井部と口縁部を分ける棱が、最も明瞭に残るものである。口縁部はやや幅広がりに下がり、端部は薄く鋭い。残存している天井部には、左方向に回転ヘラ削りが廻る。口縁部と内面には、回転ナデ調整が認められる。7、8は大井部から口縁部にかけて丸くドーム形を呈する。口縁端部は内面に段を有し、大井部と口縁部を分ける棱はわずかに突出する。両者の形態は類似するが、8の復原口径は14.6cmと大型化を示す。4の棱はさらに鈍くわずかに認められる程度であるが、幅広がりの口縁部は依然として長く、内面に段を有する。胎土にはやや大きめの砂粒を含み、焼成不良で灰白色を呈する。10はほぼ垂直に下がる口縁部をもち、口縁端部外面はヘラ調整された肥厚面を有する。天井部と口縁部を分ける棱は、ほとんど消失し1条の凹線が廻る。11は口縁部の高さが短くなる傾向を見せる。12は復原口径が11.2cmを計り、その形態は小型化を示す。天井部と口縁部の境

は後に代わって、深い凹線が廻る。口縁端部はわずかに開き、内面は段を有する。天井部には左回りのヘラ削りが廻る。その他全面に回転ナデ調整を行なう。6～12は第1区より出土している。13は12と類似した形態をもつが、核に代わる凹線は浅く、口縁部の長さはさらに短く、端部内面の段も浅くなる。13、15は第3区より出土している。16、17は復原口径15cmを計り、大型のものに分類できる。口縁部は裾開きで、端部内面の段も明瞭ではない。19は天井部と口縁部の境の核や凹線が、消失した段階のものである。口縁部は天井から裾開きには直線的に下がり、端部内面の段も認められない。20は高杯の蓋である。口縁部が欠損している。天井部外面には幅広く左回りのヘラ削りが行なわれ、その中央にしっかりした中空みのつまみが付く。内面には同心円文が残り、その上から回転ナデ調整が施されている。第39図1～10は杯身である。1のたちあがりは、わずかに内傾しながら長く立ち上がる。端部内面に段を有する。受部はやや特異な形をしており、上外方に伸び端部で肥厚し平面をなす。2、3のたちあがりは、肥厚しながら内傾気味に長く立ち上がる。受部は外上方に伸び、端部は口縁部とともに丸く調整されている。底部の成形は難で、内面には枯土紐巻き上げ痕が残り、外面にはほぼ全面に粗く左回りのヘラ削りを行なう。他は全面回転ナデ調整を施す。重ね焼きのため受部以下は色調が、たちあがりや内面に比して濃く、自然釉の付着もみられる。受部には、重ねて焼いた他の器の一部が付着している。4は、たちあがりの内傾度がやや大きくなり、端部の段は浅い。底部外面に「V」のヘラ記号の一部が認められる。5は器壁が全体に薄く、たちあがりの端部はやや鋭く上方に伸びる。受部付近まで回転ヘラ削りを行なう。第3区第4層より出土している。6、7の器壁はさらに薄くなる。たちあがりと受部の端部は鋭く伸びる。底部外面のヘラ削りの範囲は狭くなり、%に左回りに行なう。8は完形である。たちあがりはやや短くなり内傾した後、中位から上方に伸びる。端部は内側へ傾斜し面をなす。受部は丸く、たちあがりとの間に溝を有する。底部には「X」のヘラ記号がある。底部外面の%弱に右回りのヘラ削りを、他面には回転ナデ調整を行なう。9も完形である。たちあがりは、受部から曲線を描きながら立ち上がり、底部の器壁は厚く、外面には左回りのヘラ削りが廻る。11と12はセットで第5区の溝から出土している。11の杯蓋は、天井部と口縁部の境に深い凹線が廻る。口縁部はやや裾広がりに下がり、端部付近で浅く窪む。端部は内面で段を有する。天井部外面には左回りのヘラ削りをほぼ全面に、内面には回転ナデとナデ調整を行なう。12の杯身のたちあがりは、直線的に内傾し、受部も上方気味に伸びる。調整は26と同様に底部外面のほぼ全面に粗く左回りのヘラ削りを行ない、その他は回転ナデ調整と底部中央にナデ調整を行なう。11、12ともに胎土には、0.1～0.3cmの砂粒を多く含み、ヘラ削りによって砂粒が大きく移動している。14～16では口径が小型化しているが、たちあがりの長さや内傾度に大きな変化は認められない。17はたちあがりと受部がともに短くなる。19、20はたちあがりがさらに短くなり内傾する。底部のヘ

ラ削りの範囲は狭くなり、回転ナデ調整も難になる。21の杯身はたちあがりが頗く内傾し、端部は薄く鋭い。受部はたちあがりよりやや低く上外方に伸びる。ヘラ削りは底部の劣弱に施され、他面には回転ナデと静止ナデが行なわれ、調整は比較的丁寧である。外面には部分的に自然釉がかかる。22も杯身である。底部は平らで、底部端に貼付高台がつく。23は台付壺の脚部と思われる。透しの痕跡がわずかに残る。25、26は壺の口縁である。外反して伸びた口縁端部は玉縁状に肥厚する。25の外面は縱方向に刷毛目が走る。

須恵器は6点を除きすべて破片からの復原であるので、法量の大小から時期の判定は難しい。^{註2}しかしながら、杯の口縁部の形態からほぼ6世紀代のものと考えられ、泉北陶色の出土資料の幅年に照らし合わせると、I期末からII期前半期に位置付けすることができる。また、豊中市内^{註3}の古窯跡の資料に比較すると、調整や胎土、焼成から桜井谷窯跡群の2-2窯跡（下地巣岡窯跡）・2-23窯跡（永楽莊窯跡）の時期のものと考えられる。その他、7世紀から8世紀に降るものも若干含まれる。

須恵質土器（第39図27-29）

14世紀末から15世紀初頭にかけての鉢が3点出土している。28の胎土は、兵庫県魚住窯のものと非常に類似しているが、口縁内面に明瞭なくびれ線をもつ鉢は、現在までのところ魚住窯^{註4}からの出土例はみられない。

土師器・土師質土器（第40図1~22）

土師器はほとんどが皿で、一般に灯明皿といわれる口径が10cm以下のものが多い。量の多少はあるが、各地区から出土しており、その中でも第1区の第3、4層に多く出土している。

1~5は口径8cm以下で、器高も2cm前後のごく小型の皿である。底部からゆるく外上方に体部が伸び、口縁は端部を上方につまみ上げている。2は底部に小孔を穿っているが、用途は不明である。いずれも外面に手づくねの痕が残る。口縁部及び内面はナデ調整で仕上げている。6は、平らな底部から外上方に屈折した体部がつく。口縁部は体部からさらに外方に伸び端部は薄く仕上げ、内外面に手づくねの指圧痕が残る。7~9は、口径9cm弱に比して器高は1cm前後と浅くなる。体部は平坦な底部から短く上外方に伸びる。手づくねである。10は精製土を使い、器形のバランスのとれた小皿である。外面には手づくね痕が残るが、口縁部や内面はナデ調整を比較的丁寧に行なっている。11、12は口径が10cm弱とやや大きくなり、器高も深くなる。胎土は砂粒を含み、焼きは堅い。13~16は底部が欠損しているが、いわゆるヘソ皿といわれるものと思われる。底部から上外方に屈折した体部は、口縁部付近で肥厚し、口縁端部で再び薄く伸びる。胎土は比較的精製したもので、色調も明るい。17は口径12cm弱と大きくなる。体部は底部からゆるく外上方に向かい、口縁部は体部から屈折して外方に薄く伸びる。18は口径約10cmを計り、底部から口縁部のカーブは半楕円形を呈する。器壁は厚く、体部外面には指

頭压痕が残る。内面底部に不整方向ナデ、口縁部には横ナデを施す。口縁部内面に煤の付着がみられる。20、21は、口径15cm前後の土師器の皿の中では大型のものである。底部から屈折した体部に先細りの口縁部がつく。胎土には細かい砂粒を多く含み色調も濃い。22は、器壁が厚く中深みの底をもつ壺蓋と思われる。

出土した土師器はほとんどが小片であるが、小皿の占める量の割合が大きいようである。一般的に灯明皿といわれるものでも、口縁部内面に炭素の吸着が認められるのは、ほんのわずかであり、その多くは食器、酒器に使用されたものであろう。時期については、その形態や瓦器塊との共伴関係より、13世紀中葉以降のものであると考えられるが、その下限については今のところ判然としない。

瓦器（第40図23～46）

瓦器は皿と法量の小さな浅い壺、そして口径が大きく深い壺のタイプに分けられる。これらは各々地区や層位に関係なく出土している。

23、24は口径約9.5cmを計る小皿である。比較的平たい体・底部から屈折して上外方に伸びる口縁がつく。外側には手づくねの痕跡がみられるが、横ナデ等の調整は風化のため不明である。25、26は、丸くてやや深い底部から端部の丸くおさめられた口縁部がつく。27は、薄い体部から段をもち口縁部がのびる。端部は上方につまみ上げている。口縁部内外面に横ナデ調整を行ない、体部内面にはわずかに暗文が残る。29は、手づくねによる凹凸の著しい体部から先細りの口縁部がつく。横ナデ調整は風化のため不明であるが内面に暗文がみられる。31は底部からゆるやかに内窪し、外反する口縁部をもつ。内面全面と口縁部外面に炭素を吸着させている。内面は口縁部付近に横ナデ調整がかすかに残るが、暗文は不明である。32、33は口縁部と体部の境がわずかに深む形態でつくりも薄い。34は大ぶりであるが、口縁の形態や炭素の吸着状態も類似している。37は深い体部から外側をやや薄くした口縁部がつく。外側には手づくねの痕が残り、口縁部付近のみ窪で調整している。内面は縦、横に暗文がつけられている。38は口径に比して器高が浅い形態である。内面にのみ横方向に暗文が走る。39は底部からゆるく内窪気味に立ち上がった体部が口縁部までつづく。外側には手づくねの痕が顕著に残る。口縁部は重み、底部中央には小さく、低くくずれた高台を貼り付けている。口縁部付近を横ナデ調整しているが暗文は表面風化のため見られない。40は内面全面と口縁部外面に炭素を吸着させている。内面には不整方向に暗文を描いている。41～46は底部の破片である。41、42は端部を外方につまみ上げた高台がつく。43の高台は断面三角形を呈する。46では、高台は一応粘土紐を貼り付けているが、低平で高台というよりも底部を平底風に安定さすために貼り付けたといつても良い状態である。その他、瓦質土器として羽釜や三足釜の破片が少量出土している。瓦器は壺の外反する口縁や退化した高台の形態さらに暗文の状態から、13世紀中葉から14世紀末頃までのもの

と思われる。

陶器

陶器類は、鉢、壺、皿等を各地区の主として条里遺構より出土している。鉢類では、丹波、備前、信楽、常滑の窯の生産品と思われるものがあり、壺、皿類ではほとんどが施釉陶器で、唐津、瀬戸、美濃、京焼等が見られる。

陶器 1 (第41図)

1は片口の擂鉢である。口縁は端部で外反し上下に肥厚する。擂臼は7本単位の柳状施文具を密に移動させて施している。内面にのみ茶色の釉がかかっている。2、3は丹波焼と考えられる擂鉢で、2の体部は直線状に外上方に伸びる。口縁部は内面で肥厚し、口縁端上部中央を瘤ます。9本単位の擂臼をやや間隔を開けて施す。3は直線状に大きく外反する体部の先に、口縁端部内面に薄く粘土帯を貼り付け肥厚させている。擂臼は3本単位で太く深く施している。5は薄く凹凸をもった体部に内面を大きく肥厚させた口縁部がつく。9本単位の擂臼を浅く廻らす。胎土には大きめの砂粒を多く含んでいる。信楽焼か。6は体部から上方に長く直立した口縁部がつく。口縁外面には1条の凹線が、内面には断面三角形の凸帯が廻る。7は体部から上下に肥厚した口縁がつく。口縁外面には2本の凹線、内面には1条の凹線が各々廻る。口縁直下まではば等間隔の擂臼を入れ、その後、口縁部内外面に回転ナデ調整を行なう。6、7は備前焼である。8は薄い体部に厚く大きな口縁がつく。口縁外面には2条の凹線が廻り、端部は上方につまみ上げている。口縁直下まで7本単位の擂臼をばね隙間なく施す。口縁と内面に茶褐色の泥漿をかけている。信楽焼か。9は非常に大型の擂鉢で、11本単位のごく細い擂臼が、口縁部内面の凸部の付近まで入る。器壁の内部は赤褐色で、表面は暗褐色を呈する。10は今回出土上の擂鉢の中で唯一一点、おおよその器高がつかめるものである。底部の整形は確で、貼付した粘土はほとんど未調整のままである。内面は使用度が著しく、器表は滑らかで、9本単位に間隔を開けて施している擂臼も相当磨り減っている。11は体部外面に粘土紐巻き上げ痕とともに指頭圧痕を残す。内面には7本単位の擂臼を底部にも密接に施す。体部下半に使用痕を残す。丹波焼の可能性がある。12は底部中央に左回転に尻すほみの凹孔を穿った鉢である。体部外面には、ヘラ當て痕と水引きの指痕が残る。内面はロクロ目が走り、焼成による器壁のふくらみがみられる。10、12は備前焼と思われる。15は信楽焼とみられる手付鉢である。ねじった把手がつく。胎土は砂粒を多く含み、口縁から体部上半部に泥漿をかけている。

備前焼と思われる擂鉢は、口縁の形態や擂臼の状態から古いもので16世紀末と思われるが、確証されない。その他は丹波焼も含めほとんどの擂鉢は、18世紀から19世紀初頭のものと考えられる。その他、14世紀のものと思われる巴の押印の入った甕の破片(図版14-1)も第3区・第4層より出土している。

陶器 2 (第42図)

1～14は唐津焼である。1は小皿で、三日月高台の内側は、兜巾と呼ばれる中央が突起状に削り取られている。体部は厚い底部から上外方に伸び、器壁は薄くなり、口縁部はさらに外方に伸びる。高台と高台脇は露胎で、釉は淡灰緑色である。見込みに4ヶ所の目跡が残る。2、3は1と同様の形態であるが、露胎部は明褐色を呈する。4、5は高台が低くなる。6は白濁した釉が三日月高台の疊付部まで厚くかかり、見込みには4ヶ所大きく目跡が残る。8は高台から体部までくびれ目がなく続く。高台内側は兜巾状を呈する。9は刷毛目唐津で、見込みに白泥を浸した刷毛で線状文を描いている。刷毛目の上には目跡が残る。外面体部にも白濁した釉がかかり、高台と体部の境に沈線が1本遡る。高台輪内は兜巾状に削り取られている。10は浅い皿で、厚く平たい底部から体部はゆるやかに外方に立ち上がる。口縁部は体部から直立し、端部は丸くおさめられている。低い高台は疊付部が広く、外面の施釉は一部高台内にまで至る。内面も全面施釉で、目跡はみられない。11は見込み部分に鉛彩料で釉下に絵付けした絵唐津である。絵付けは不整方向に走る筆線で暗灰色を呈する。底部はやや高い高台と兜巾状を呈し体部は高台脇を除き水引き調整の上から釉を施す。12、13も刷毛目唐津と思われるもので、12は茶褐色の素地土の上に白泥で内外面に平行線文を描いた境である。平坦な底部から体部と口縁部は内弯気味に上外方に伸びる。15は瓶子の底部である。底部は右糸切で内外面に釉がかかる。16、17は境の破片である。乳黄色の胎土に薄い釉がかかり、釉面には細かい貢入がみられる。18は断面台形のしっかりした高台のつく境の底部である。見込み部分には1.2cmの幅で重ね焼きのために釉を削った輪が廻る。外面は一部高台まで釉がかかる。19～21は京焼と総称される境の底部である。19は内面と高台脇まで、乳褐色で細かい貢入がみられる釉がかかり、外面の一部に上絵の痕跡がかすかに残る。高台輪内には地名もしくは製造者名と思われる刻印が一部残る。20は浅く削った高台輪内に刻印を残す。21は見込みに竿を持つ舟方が絵付けされているが、発色が悪く明確ではない。高台輪内に「清水」という銘が刻印されている。22は瀬戸焼系のものであろう。疊付部が平坦で、断面台形のしっかりした高台脇から口縁端部までゆるく曲線を描き立ち上がる。外面は口縁部にのみ薄く釉をかけているが、内面は見込み部分に露胎した円形の帯を除き、青緑色から暗緑色まで色調の変化を見せる釉が厚くかかる。25～27は瀬戸、美濃系の燒物である。25は水指で、口縁部と外面に釉色の釉薬がかかる。26、27は美濃焼大目境である。厚い輪高台で輪内は兜巾仕上げである。釉は茶色から黒褐色を呈する。28は見込みに陰刻文様の残る菊皿で、25と同程度の釉色の釉がかかる。

施釉陶器の境、皿類は、唐津焼で江戸時代前期から中期、瀬戸、美濃焼系のものは中期から後期、京焼は後期以降と、ほとんどすべて江戸時代に属するものと思われる。

磁器（第43図1～9）

磁器の出土量は極めて少量であるが、第4区を除き各地区から出土している。白磁・青磁の両方がみられ、中国製磁器も含まれる。

1～4は白磁碗である。1、3は口縁部を玉縁状にしたもので、口径約16cmを計る。釉はやや緑味を帯びた灰色で、2またはそれに類似した底部がつくと思われる。2は高台の骨付部の外側を面取りしたもので、外底部の削り出しが疊付部から1～2mmと極めて浅い。体部は厚い底部から外上方に伸びるが、底部からの移行点に小さな段が入る。内面の釉調は1、3とまったく同じである。5は中型の碗、もしくは鉢であろう。口縁は外反気味に立ち上がり、内面には箆で描かれた文様がある。6～9は青磁碗底部の破片である。6の高台は厚い底部の一部とともに貼り付けられたものである。8、9は高台が少し高く疊付部が細くなり、白色の磁胎に青味を帯びた釉がかかる。

1～3の白磁碗は中国製で、平安時代末のものと思われる。6は明の青磁で、室町時代前期に位置づけられる。その他、竜泉窯系の青磁碗の破片も出土している。

染付磁器（第43図10～24、第44図）

染付磁器は出土遺物の中では比較的多く、ほとんどが条里造構からの出土である。すべて国産品と目されている。

10は、底部から内反気味に立ち上った体部に上外方に伸びる口縁部をもつ。高台はやや高く疊付部は面取りをしている。内外面とも厚く釉がかかり、呉須で描かれた絵付は発色が悪く鈍い藍色を呈する。見込みには重ね焼きのための輪状の露胎部が残る。「くらわんか手」と思われる。11は体部からやや角度をもって立ち上がる口縁部をもつ。端部は薄くおさめられている。口縁部と高台付近の圓線の間に絵付けがされているが、外面の釉は厚く山渕しており、細部は不明である。内面にも上下に2本ずつ圓線が廻る。12は、厚い底部からほほ同じ厚さで、上外方に立ち上った体部と先細りの口縁部をもつ。面取りをして丸く仕上げている高台疊付部付近を除いて全面施釉されている。見込み中央の釉は厚く貢入がみられる。高台に2条の圓線、体部に草花文を絵付けしており、高台輪内に文字らしいものも描かれているが判読できない。14は小皿と思われるが、絵付けや釉調は12とよく似ている。15は、厚い底部から体部は内反気味に立ち上る。高台は細く高く直立つく砂高台である。絵付けの呉須は、くすんだ緑色と藍色の2色に発色している。16は高台に2条、輪内に1条、高台脇に1条の圓線と草花文の絵付けの上にやや厚く釉をかけている。見込みには釉を削った露胎部が輪状に残る。17は、体部から口縁部にかけて器號を大変薄く仕上げている。口縁部外面は少し肥厚し段を有する。高台脇に圓線を体部に草花文、見込みに一部露胎部が残る。16、17は「くらわんか手」か。19は器號が厚く、釉も厚くかかり内外面に貢入がみられる。20は、胎土も釉調も他のものとは異

なり薄く灰褐色がかかっている。高台に2条と輪内に1条、高台脇に1条廻る圓線と絵付けはいずれも暗灰緑色を呈する。見込みには、器底部はみられない。22は、費付部と口縁端部が細く仕上げられている。圓線や濃淡の絵付けは太く大らかに描かれている。重ね焼きの痕跡はみられない。23は、厚い底部に小さな高台と薄い体部に端部をやや丸く仕上げた口縁部をもつ。呉須は淡い藍色と灰緑色に発色している。24は、内面には非常に薄く施釉し、外面には垣と草花を描いた上にやや厚く細かい気泡を含んだ釉がかかり、ところどころ貫入がみられる。見込みに呉須の濃淡で絵付けをしている。第44図1~4は口徑約10cm、器高約5cmを計る碗で、面取りをした無釉の高台と内窓気味に立ち上がる体部と端部を丸くおさめた口縁をもつ。高台に2条、高台脇に1条の圓線を、外面には桐または菊の文様を絵付けしている。見込みに重ね焼きの痕跡はない。5~8は体部外面に網目文を絵付けしているが、器形や釉調などは異なる。5は、底部から上外方に曲線を描いて体部が立ち上がり、口縁部は内窓気味に直立する。体部外面には薄く発色の悪い呉須で上下の圓線の間に3段の網目文を描いている。7は内外面に面取りした高台をもつ碗で、暗灰色に発色した網目の上から白濁した釉が厚くかかる。8は、費付部が平扣で高い高台と高台輪内、高台脇の一部を除いて青白色の釉が厚くかかる。網目文は他に比べ小ぶりである。9は中型の皿で、高い高台をもつ。高台に細い圓線を2条、高台脇に太い圓線を2条と体部外面に、草花文を比較的純度の良い呉須で濃淡で描いている。見込みには、圓線と中央に五弁花を、高台輪内には圓線を「大」と「年」の2字をくずした文字で描いている。10は内外面に圓線と文様を絵付けし、見込み中央には9より小さめの五弁花を、高台輪内には「福」のくずし文字を描いている。11は小皿で、内面にのみ釉が厚いためであろうか非常に発色の悪い草花文が描かれている。釉は内外面とも厚く灰白色を呈する。12は、断面台形の低い高台と浅い体部をもつ。外面は薄くすんだ灰色で、内面は藍色の濃淡で文様を描いている。見込みに重ね焼きの痕跡が輪状に残る。14は発色の良い藍色で文様を描いている。釉も比較的薄く均一にかかる。15は厚い底部に薄く面取りした高台がつく。外面には高台に3条の圓線と体部に草花文らしい文様を、内面見込みには2条の圓線の中に白鳥に乗った仏が描かれている。呉須の発色は良く、釉薬も費付部を除き均一に施されている。16は染付青磁碗である。外面は絵釉がかかり、内面には呉須で圓線と幾何学文様を描いており、細かい貫入がみられる。17は、高台輪内に圓線と「福」の字を描いている。19は14角形の皿か鉢で、高台輪内に細い1条の圓線と「角摺」が、外面には円形の幾何学文様が染付けされている。釉は厚くたっぷりとかかっている。20は猪口で、藍色で圓線と草花文が描かれている。内面は見込みに2条の圓線と中央に五弁花を染付けている。21は、内面中央が突起した底部から体部は一旦段をもち、その後直線的に上外方に立ち上がる。体部外面には3本一組の綫長のヘラ削りの間に呉須で「寿」を描いている。内面と体部外面に、わずかに背味を帯びたガラス状の釉がかかる。22

は、わずかに外反する口縁部の先端には茶色の釉が施され、体部外面には藍色で文字らしきものを染付けている。23は盃で、薄い器壁に外面は高台を除き全面に、内面は口縁部と見込み中央に各々吳須で紺色に染付けている。24は口縁部に雷文を、高台脇に渦巻文を印判で染付けている。

染付の時期としては、伊万里系染付磁器で17世紀後半以降、器壁が厚く、釉調もくすんだものとなり、純度の低い吳須で「福」やくずれた五弁花や文様を絵付けしている「くらわんか手」の碗、皿類では18世紀後半から19世紀前半に、また印判による染付けがなされているものは、19世紀以降に、各々位置づけられる。

(厚美)

石器 (第45図1~8、図版16)

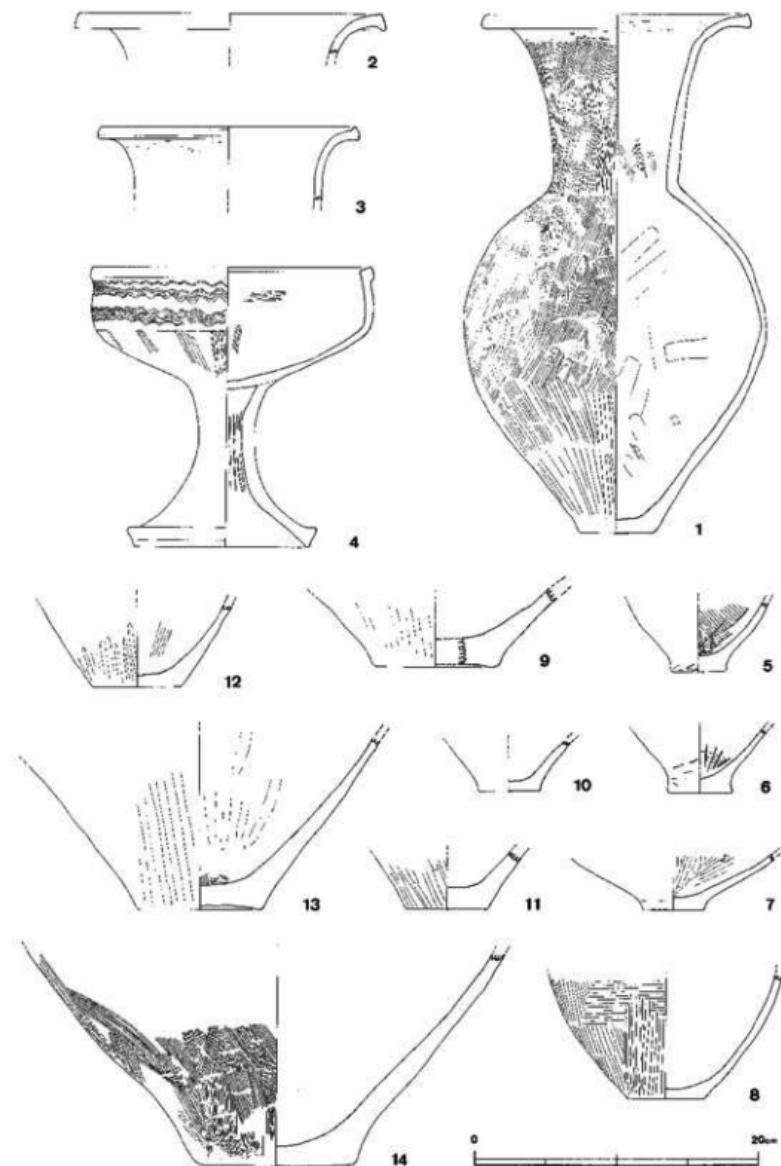
原田西跡より出土した石器類は、弥生時代中期に所属する石器である。遺構に伴う石器は一部で、他の石器、サヌカイト剝片は、中近世の堆積層より出土している。出土した石器は、石鎌5点、楔形石器1点、大型蛤刃石斧1点、石包丁2点である。

石鎌 石鎌の形態は、1・2・4は平基無基式、3は凹基無基式、5は凸基有基式に分類される。石鎌素材はサヌカイトの剝片素材である。1は、第1調査区C-B地区の溝2より出土した。石鎌両側縁辺部に第2次剥離調整面が施されて、片面の中央は主要剥離面が残る。最長3.4cm、最大幅1.3cm、最厚部0.5cm、重量2.4gを計る。2は、第1調査区K-13地区の溝1より出土した。石鎌先端部は折損しており、器面は第2次剥離調整によって整形している。最長1.9cm、最大幅1.3cm、最厚部0.4cm、重量0.6gを計る。3は、第1調査区D-5地区の第4層より出土した。石鎌両側縁辺部に第2次剥離調整を施し、基部は浅い抉りを形成しており、片面の中央に自然面を残している。最長2.5cm、最大幅1.8cm、最厚部0.5cm、重量1.4gを計る。4は、第3調査区E-8地区の第3層より出土した。石鎌両側縁辺部に第2次剥離調整を施し、器面中央に主要剥離面が残る。最長3.0cm、最大幅1.6cm、最厚部0.4cm、重量2.1gを計る。5は、第1調査区A-16地区の第4層より出土した。石鎌両側縁辺部に階段状剥離調整を施し、基部は浅い有基部を形成している。最長2.9cm、最大幅1.4cm、最厚部0.4cm、重量1.5gを計る。

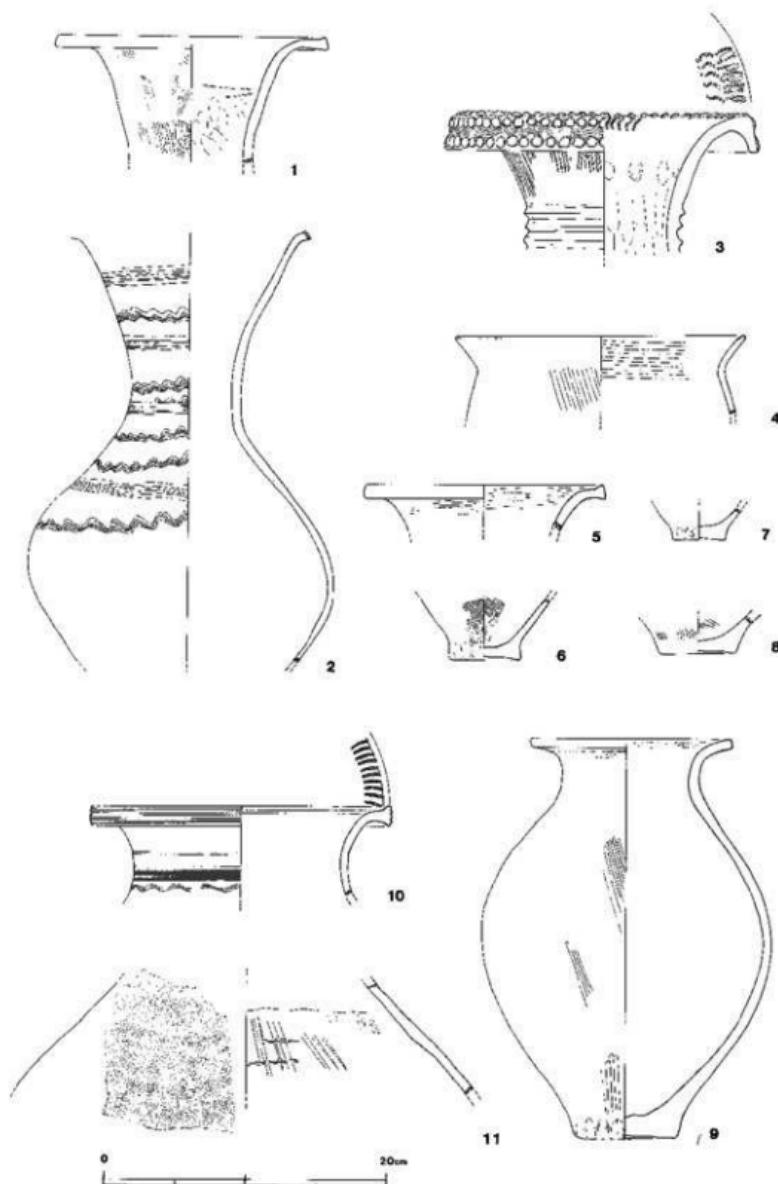
楔形石器 楔形石器6は、第2調査区A-9地区の条里遺構より出土した。截断面のない楔形石器から二次的に分離した削片である。サヌカイトの剝片素材を用いており、削片の一縁辺部に縱方向から加撃された截断面の形跡を有する。最長4.7cm、最大幅1.2cm、最厚部0.6cm、重量4.6gを計る。

大型蛤刃石斧7は、第3調査区B-1地区の河川1-2より出土した。大型蛤刃石斧の残片で玢岩を用材としており、片面全体的に入念に研磨調整を施している。器面の中央に顕著な敲打痕が認められる。最長10.2cm、最大幅6.4cm、最厚部2.8cm、重量230gを計る。

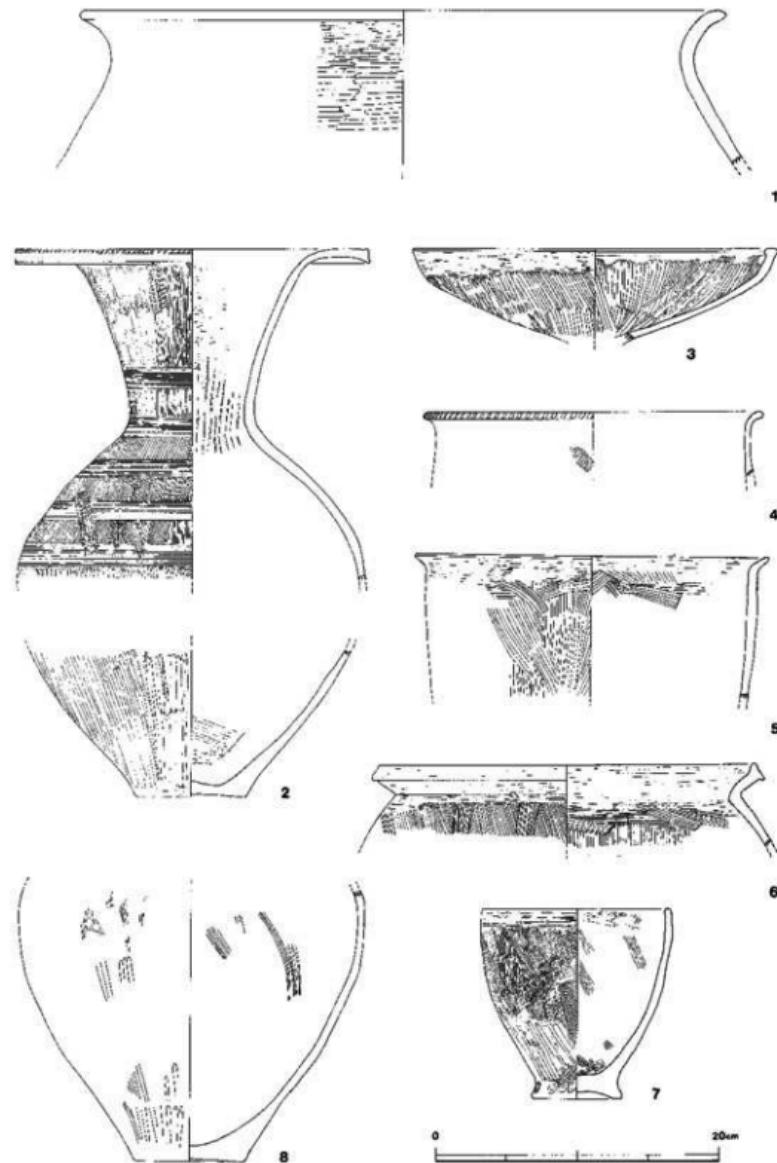
石包丁 石包丁8は、第3調査区B-10~II-10地区の河川1-6より出土した。石包丁は



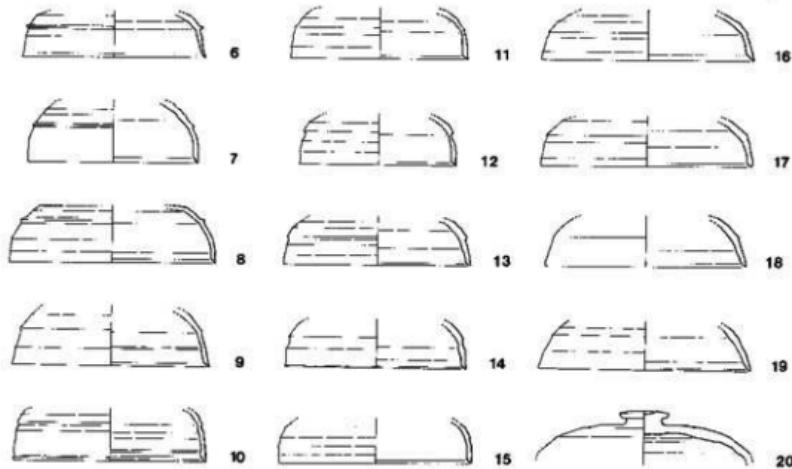
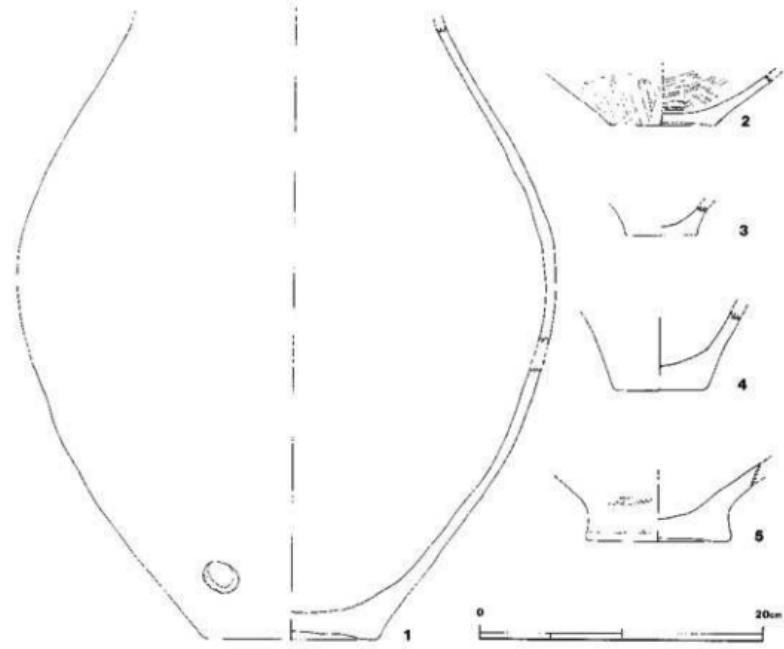
第35図 弥生土器 実測図



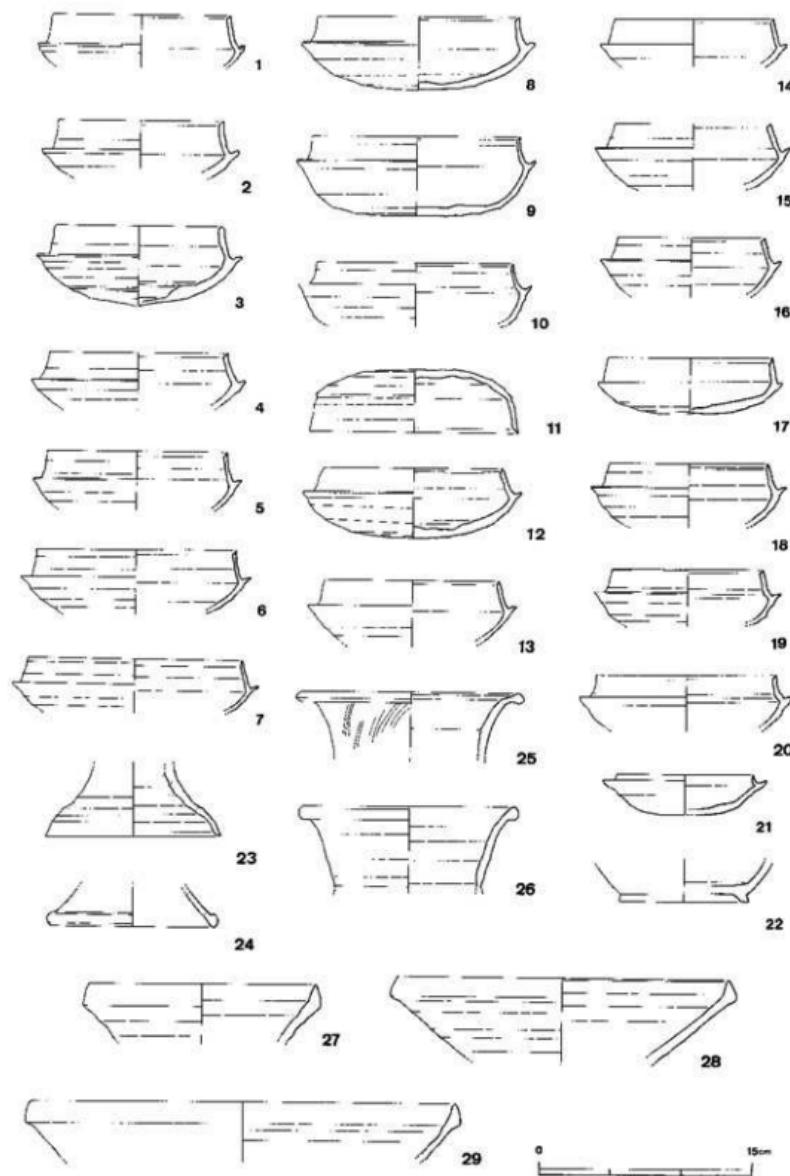
第36図 弥生土器 実測図



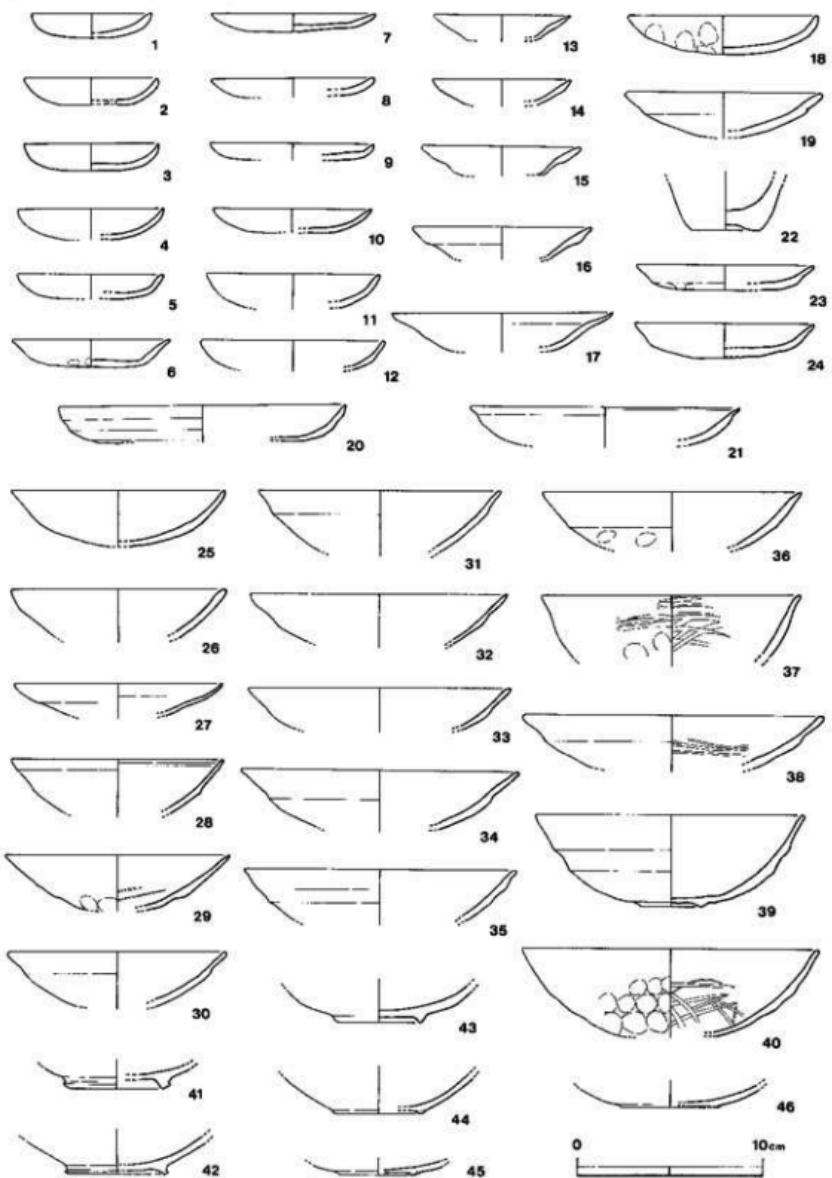
第37図 弥生土器 実測図



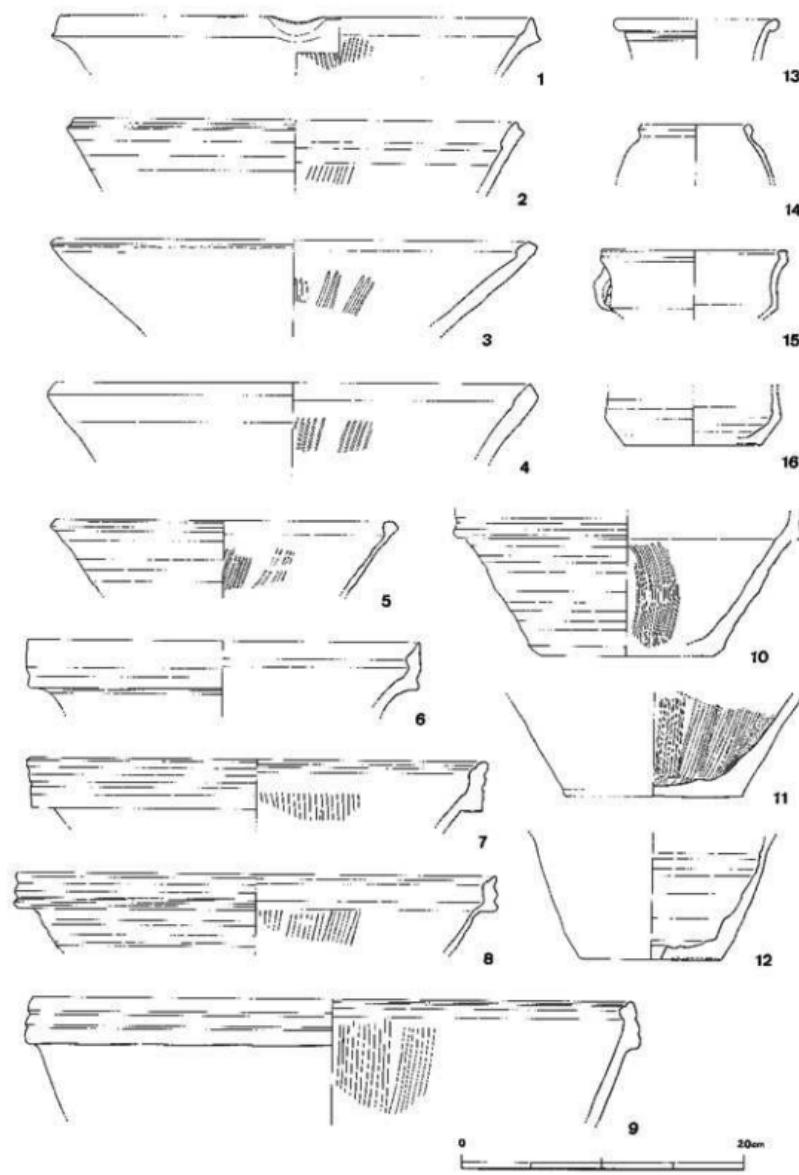
第38図 弥生土器・須恵器 実測図



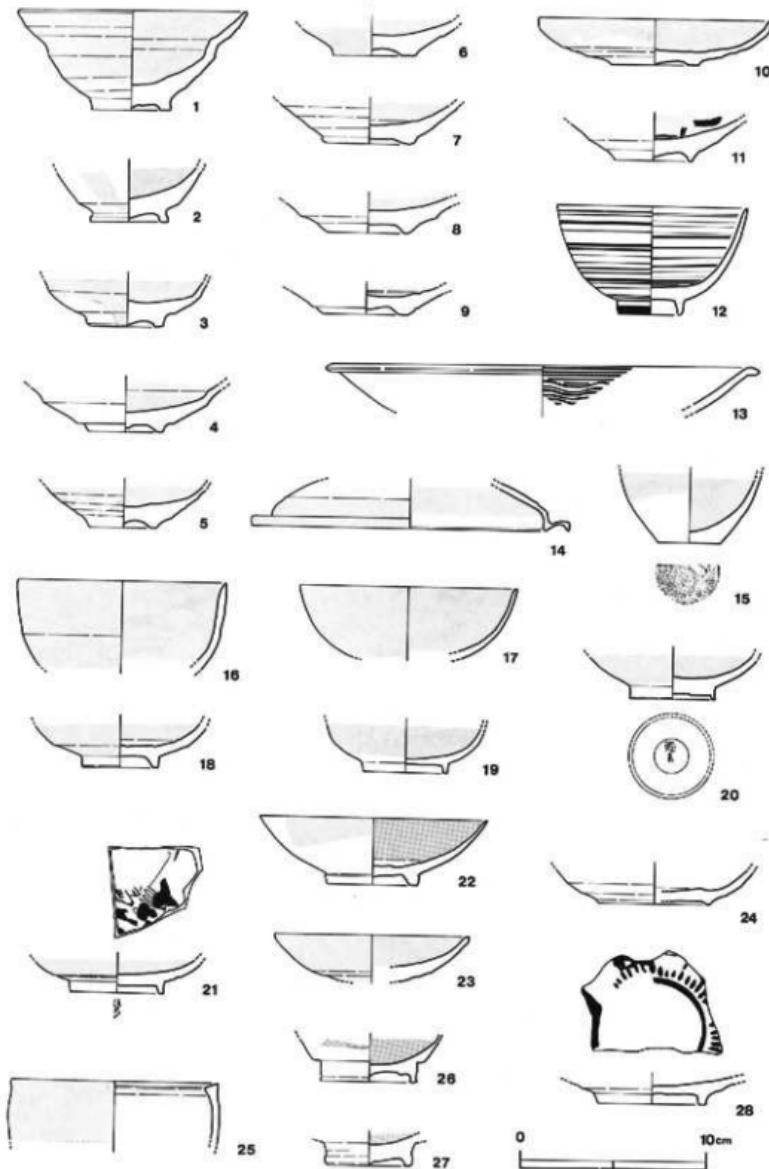
第39図 須恵器・須恵質土器 実測図



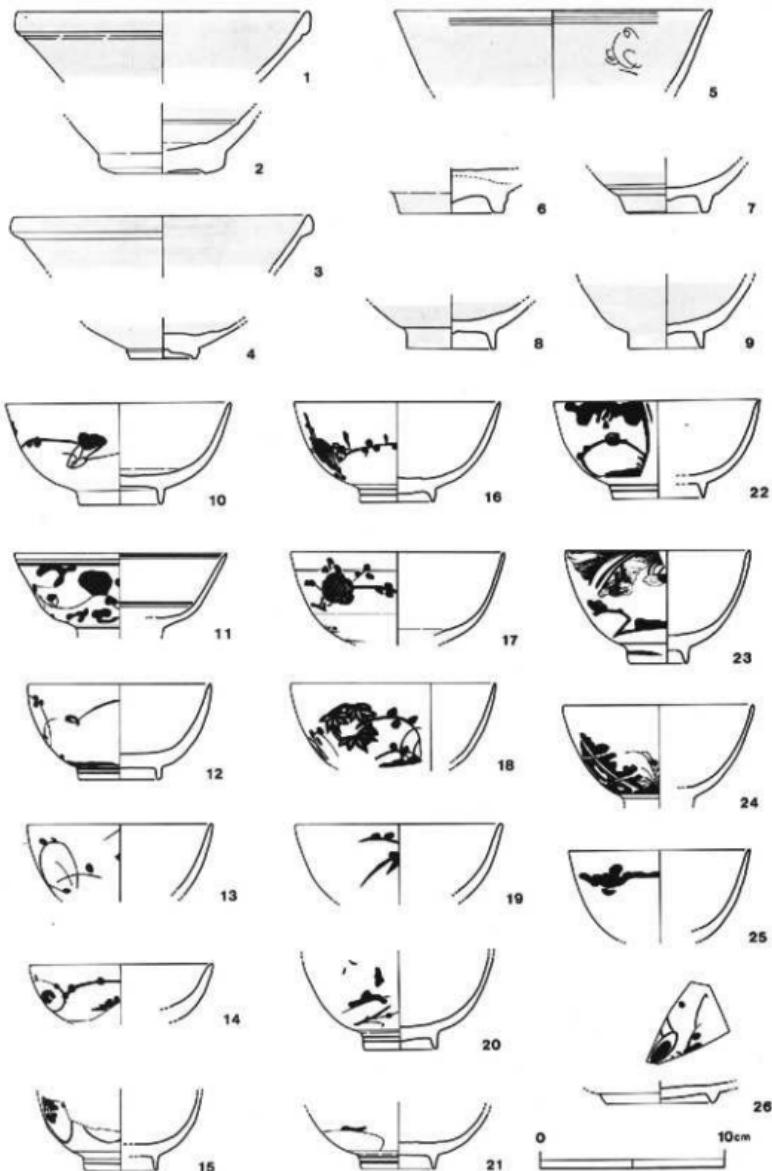
第40図 土師器・土師質土器・瓦器 実測図



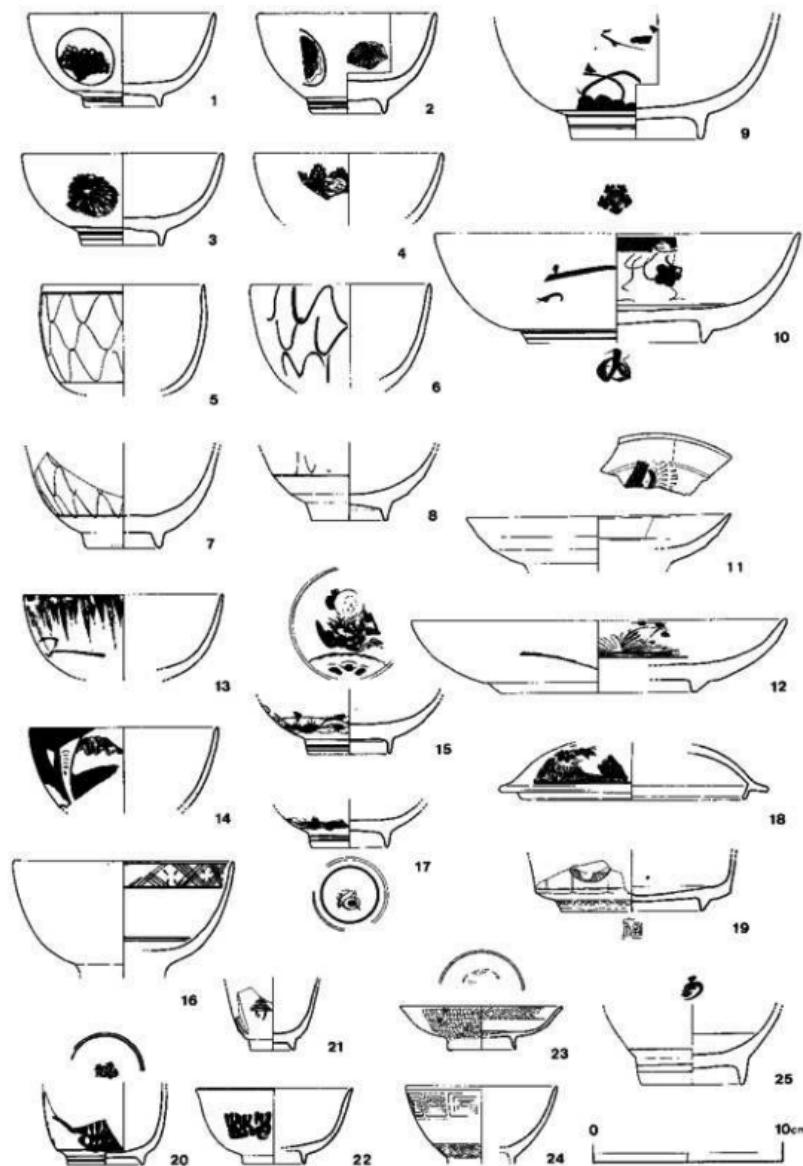
第41図 陶器 1 実測図



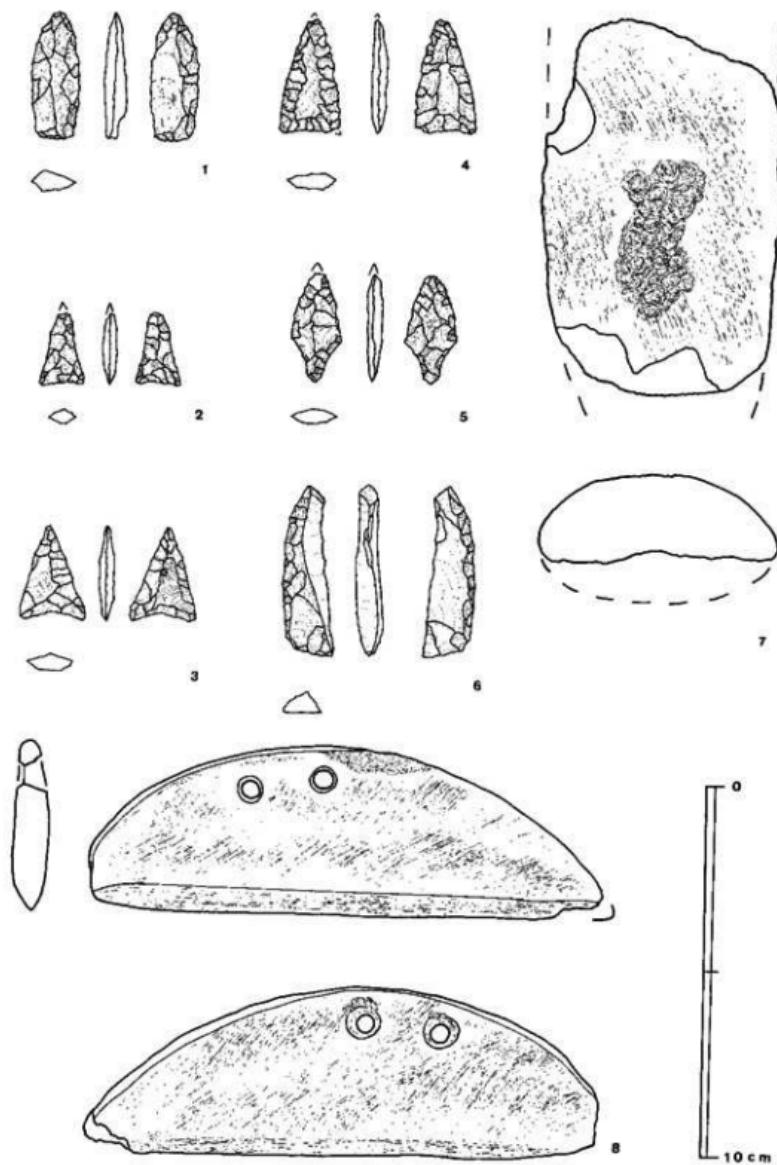
第42図 陶器2 実測図



第43図 磁器・染付磁器 実測図



第44図 染付磁器 実測図



第45図 石器 実測図

完形品で、流紋岩を用材とした直線刃半月形を有する。両面共に入念に研磨調整が施されている。刃縁部の稜線は刃縁に平行するように直線的であり、また使用の際に生じた摩滅痕が認められる。最長13.9cm、最大幅4.6cm、最厚部1.0cm、重量82.8gを計る。

木製品

ナスピ形着柄鋤(第46図、図版17)

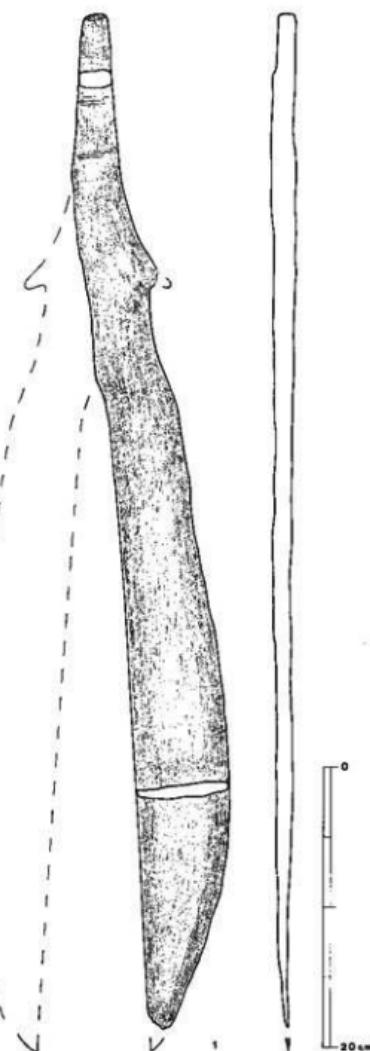
第1調査区L-14地区の溝1より単独で出土した。保存状態は良好で、偏平な板材を用材としており、右側の刃縁部は折損している。基部上部の外側縁辺部に指状突起を形成し、先端部にかけて丸味を有している。内側縁辺部は直線的で、基部の片面には着表した際に生じた線状の着表痕が認められる。全長74.5cm、最大幅(復原)19cm、最厚部1.0cmを計る。

既述しているように、ナスピ形着柄鋤の所属時期であるが溝の堆積土最下層に内包していた為ナスピ形着柄鋤は、共存関係も不明であるため時期的な位置づけは困難である。しかししながら、溝の時期は弥生時代中期に形成されており、ナスピ形着柄鋤も弥生時代中期に所属する可能性が高い。

尖頭状木製品(第47図、図版17)

第5調査区C-8地区の河川より

出土した弥生時代中期のものである



第46図 ナスピ形着柄鋤 実測図

第47図
尖頭状木製品
実測図



小枝の一端を用材としており、頂部は折損している。尖頭状木製品の縁辺部は、直線的で先端部にかけて尖る。使用目的については不明である。最長20cm、最大幅0.7cm、最厚部0.8cmを計る。

杭 (第49図、図版17)

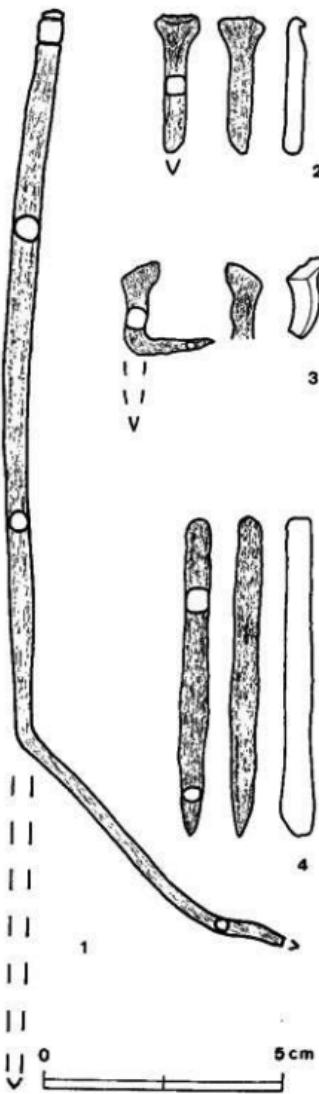
杭は、第5、6調査区において、弥生時代中期の河川、排水溝に護岸施設として使用した土木杭である。

1は、第5調査区C-8地区の河川南岸に打ち込まれた矢板状の立杭である。偏平な板材を用いており、先端部は数回の削り面を形成している。最長39.5cm、最大幅8.3cm、最厚部2.0cmを計る。2~4は、第6調査区の排水溝の両岸に打ち込まれていた。杭は、丸杭と割杭の2種類の立杭である。最長40cm、最大幅6.0cm、最厚部5.0cmを計る。3は、直線状の丸杭で、周辺部は樹皮面を剥ぎ取っており、先端部は数回の削り面を形成している。最長45cm、最大幅4.3cm、最厚部3.7cmを計る。4は、流木を用材とした割杭で、杭の先端部は数回の削り面で形成している。最長34cm、最大幅6.6cm、最厚部3.6cmを計る。

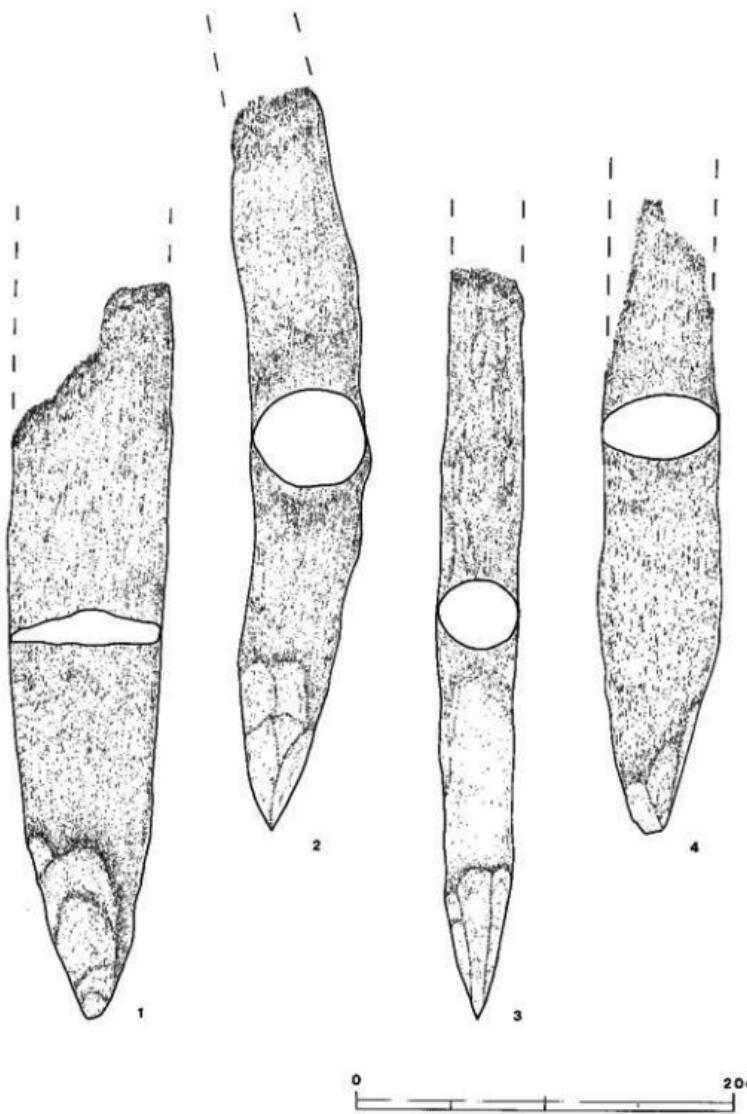
金属製品

青銅製火箸 (第48図1、図版18)

第1調査区F-8地区の条里構造より出土した



第48図 火箸、釘 実測図



第49図 抗 實測図

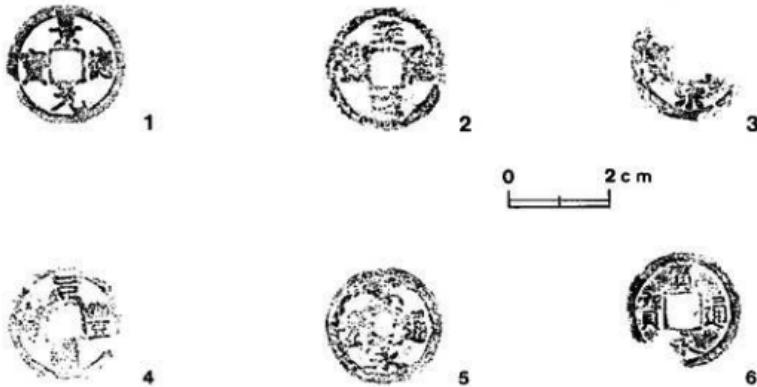
片寄である。細長い丸客で、頂部は丸味を帯びており、細い線状の切り込みが上下に2本施されている。先端部は屈曲しているが、使用によってかどうかは不明である。最長22.5cm、芯部幅0.6cm、重量23.9gを計る。

鉄釘 (第48図2～4、図版18)

江戸時代の堆積層より出土した。2は、第1調査区J-7地区より出土した。釘の先端部は折損している。最長3cm、頭部幅1cm、芯部幅0.5cm、重量1.6gを計る。3は、第3調査区A-7地区より出土した。釘の頭部は使用によって潰れており、芯部の中央で直角に折れ曲がっている。最長3.5cm、頭部幅0.8cm、芯部幅0.5cm、重量1.1gを計る。4は、第5調査区E-8地区より出土した。釘の頭部は折損しており、芯部は直線的である。最長6.7cm、芯部幅0.6cm、重量4.8gを計る。

古銭 (第50図1～6、図版18)

6点出土している。輸入銭(北宋銭)と日本銭(ビタ銭)の二種類に分類できる。4のみが、



第50図 古銭 拓影図

番号	銭銘	鑄造年代	調査地区	層位	外径	穿幅	輪表裏幅	厚部	重量
1	景德元宝	景德元年 1004	III-F-3	第4層	2.4	0.6	0.2	0.1	2.5
2	大聖通宝	天聖元年 1023	I-I-7	第3層	2.45	0.6	0.2	0.1	2.2
3	皇宋通宝	寶元2年 1039	I-J-20	第4層	2.4	0.6	0.2	0.1	1.2
4	元豐通宝	元豐元年 1078	I-E-20	第4層	2.4	0.7	0.15	0.1	1.6
5	寛永通宝	寛永 1636	I-F-8	第3層	2.25	0.6	0.2	0.05	2.4
6	寛永通宝	寛永 1636	II-C-9	第3層	2.25	0.6	0.2	0.05	1.8

鉄銭であり、他の銭貨は銅銭である。輸入銭は、景德元宝、天聖通宝、皇宋通宝、元豐通宝で、日本銭は、寛永通宝である。輸入銭は中世の堆積層より出土し、日本銭は江戸時代の条里遺構より出土した。
(插本)

その他の遺物

埴輪（第51図）

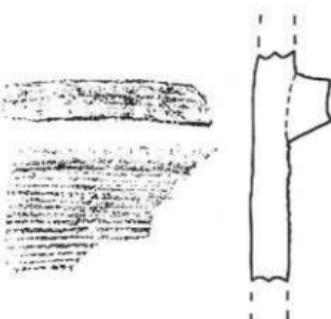
須恵質円筒埴輪片である。6×6 cm程度の小破片で、外面はやや粗い横刷毛、内面は横方向の指ナデ痕を残す。突帯は幅約1.7cm、厚さ1 cm程度のもので全面横ナデ調整である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色を呈する。第5区、第5層上面より出土している。時期は川西編年^{註5}の4期に相当する。

滑石製品（第52図）

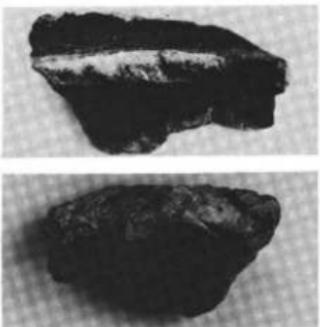
石鍋である。鍔部付近のみの出土で、口縁部及び底部の形状については明らかでない。鍔は短く、角の取れた断面三角形を呈する。鍔の上方は横方向に粗い削り痕があり、下方は縱方向に規則的な削り痕が残る。外面全面に媒が付着している。平滑に仕上げられた内面には使用痕が残る。第1区、第3層より出土している。時期としては室町時代後期が考えられる。
(厚美)

伏見人形（第53図）

伏見人形は、京都伏見の地で生産された型細工による素焼きの土人形である。江戸時代から明治時代初頭にかけて各地に分布しており、江戸時代後期（文化文政期）に盛行している。第1調査区F-8地区の条里遺構より出土した土人形は、行脚する法師で片手に編笠をもち、背中に風呂敷を背おっている。中



第51図 墓輪 拓影図



第52図 滑石製品



第53図 伏見人形

央で接合された型押し成型である。焼成は良好で、乳褐色を呈する。首は折損しており、残存高8.9cmを計る。

註1 間延忠彦・間延義子「草木只城」『倉敷考古研究報告7号』昭和46年

註2 中村浩「陶器II」大阪府文化財調査報告書 第29輯 昭和52年

註3 烏田義明「桜井谷窯跡群」豊中市教育委員会 昭和52年

註4 大村敬道氏より御教示いただいた。

註5 川西宏幸「円筒埴輪統論」『考古学雑誌』第64巻2号 昭和53年

参考文献

鶴本久和「中世日常雜器類の分析」『大阪文化誌』第7号 昭和52年

便屋忠彦・便屋義子「仙崎窯研究ノート」『倉敷考古研究報告第5号』昭和43年

鈴木重治・松藤和人「同志社キャンパス内山上の遺構と遺物」同志社大学校地学術課委員会昭和53年5月

図表表 須恵器・須恵質土器(第38図6~20、第39図)

図面番号	国版番号	器種	法量(cm)	胎	上	色	調	焼成	出土地区	層位
図38-6		杯蓋	復原口径 13.0 残存高 3.2	あおり口沿を含む		灰	白色	良好	第1区	第3、4層
7		杯蓋	復原口径 12.0 残存高 4.3	細筋紋を含む		灰	色	良好	第1区	第4層
8		杯蓋	復原口径 14.6 残存高 4.1	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	外側 内面	灰色から黒灰色 灰	色	良好	第1区	第3、4層
9		杯蓋	復原口径 14.0 残存高 3.9	0.1~0.6cmの砂粒を多く含む	外側 内面	灰色 灰白色	色	不良	第1区	第4層
10		杯蓋	復原口径 12.6 残存高 2.6	0.1cm前後の砂粒を含む	外側 内面	灰色 灰白色	色	良好	第1区	第5層
11		杯蓋	復原口径 12.6 残存高 2.5	0.1cm前後の砂粒を含む		灰	白色	やや不良	第1区	第4層
12		杯蓋	復原口径 11.2 残存高 3.5	0.1~0.2cmの砂粒を含む		灰	白色	良好	第1区	第4層
13		杯蓋	復原口径 13.4 残存高 3.2	細砂粒を含む		灰	白色	良好	第3区	第4層
14		杯蓋	復原口径 13.0 残存高 3.2	0.1~0.2cmの砂粒を含む	外側 内面	灰色 灰白色	色	良好	第1区	第3層
15		杯蓋	復原口径 13.6 残存高 3.0	0.1cm前後の砂粒を多く含む		灰	白色	良好	第3区	第4層
16		杯蓋	復原口径 13.0 残存高 3.4	0.1cm前後の砂粒を含む		灰	色	良好	第1区	第4層
17		杯蓋	復原口径 13.0 残存高 3.4	0.1~0.2cmの砂粒をやや多く含む		灰	白色	良好	第5区	第5層
18		杯蓋	復原口径 14.2 残存高 3.5	0.1cm前後の砂粒を含む		灰	白色	やや不良	第1区	第4層
19		杯蓋	復原口径 15.0 残存高 3.2	0.1cm前後の砂粒を含む		灰	白色	やや不良	第1区	第4層
20		高杯蓋	つまみ袋 残存高 3.1	0.1cm前後の砂粒を含む	外側 内面	灰色 灰白色	色	やや不良	第1区	第5層

国番号	国版番号	器種	法長(㎝)	胎土	色調	焼成	出土地区	層位
國39-1		杯身	復原口径 12.6 残存高 3.5 含む	0.1cm程度の砂粒を多く含む	暗灰色	良好	第1区	第5層
2		杯身	復原口径 11.8 残存高 4.0 含む	0.1cm程度の砂粒を多く含む	白褐色 灰褐色	良好	第1区	第5層
3		杯身	復原口径 11.8 残存高 5.8 含む	0.1cm程度の砂粒を多く含む	白褐色 灰褐色	良好	第1区	第4層
4		杯身	復原口径 12.7 残存高 3.8 含む	0.1cm程度の砂粒を少量含む	灰白色	良好	第1区	第4層
5		杯身	復原口径 12.8 残存高 3.9 含む	0.1cm前後の砂粒をやや多く含む	灰褐色 灰褐色	やや不良	第3区	第4層
6		杯身	復原口径 14.2 残存高 4.0 含む	砂粒をやや含む	灰白色	良好	第1区	第3層
7		杯身	復原口径 15.2 残存高 3.7 含む	砂粒をやや含む	暗灰色	良好	第1区	第5層
8	國33-3	杯身	口径 31.2 高さ 5.4 含む	0.1cm前後の砂粒を多く含む	灰褐色 灰褐色	良好	第5区	第4層
9	4	杯身	口径 31.7 高さ 5.7 含む	0.1cm前後の砂粒を多く含む	灰白色	良好		
10		杯身	復原口径 14.0 残存高 4.4 含む	砂粒を少々含む	灰白色	良好	第1区	第3層
11	1	杯身	口径 34.0 高さ 4.0 含む	0.1~0.3cmの砂粒を含む	灰色	やや不良	第5区	第5層溝
12	2	杯身	口径 32.6 高さ 5.1 含む	0.1~0.3cmの砂粒を含む	灰色	やや不良	第5区	第5層溝
13		杯身	復原口径 12.4 残存高 4.4 含む	0.1cm前後の砂粒を含む	灰色	良好	第1区	第4層
14		杯身	復原口径 11.5 残存高 3.5 含む	0.1cm前後の砂粒を含む	灰白色	良好	第1区	第4層
15		杯身	復原口径 10.9 残存高 4.6 含む	0.1cm前後の砂粒を含む	灰白色	良好	第1区	第4層
16		杯身	復原口径 10.4 残存高 4.1 含む	砂粒を少々含む	白褐色 灰褐色	良好	第1区	第4層
17		杯身	口径 31.0 高さ 4.1 含む	砂粒を少々含む	灰色	良好	第1区	第5層
18		杯身	復原口径 17.2 残存高 4.4 含む	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	灰白色	良好	第1区	第4層
19		杯身	復原口径 10.6 残存高 3.9 含む	0.1cm程度の砂粒を少し含む	灰色	良好	第1区	第4層
20		杯身	復原口径 17.8 残存高 3.8 含む	0.3cm程度の砂粒を少々含む	灰色	良好	第1区	第4層
21		杯身	復原口径 9.6 残存高 2.9 含む	0.1cm程度の砂粒を少々含む	灰白色	良好	第5区	第5層
22		杯身	口径 32.2 高さ 2.7 含む	—	暗灰色	良好	第1区	第4層
23		高杯	口径 32.4 残存高 4.8 含む	0.1cm程度の砂粒を少々含む	淡灰色	良好	第2区	第4層
24		高杯	復原口径 11.6 残存高 2.0 含む	砂粒はあまり含まず	暗灰色	良好	第3区	第3層
25		壺	口径 36.7 残存高 4.4 含む	0.1cm前後の砂粒を多く含む	灰白色	良好	第2区	

当面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区	層位
26		壺	口径 15.7 根元高 5.9 合計	0.1m前後の砂粒を多く含む	外面 黄白色 内面 灰褐色	良好	第1区	第3層
27		鉢	直径口径 16.0 根元高 4.0 合計	0.1m前後の砂粒を多く含む	灰白色	良好	第5区	第4層
28		鉢	直径口径 23.4 根元高 5.5 合計	0.1m前後の砂粒を多く含む	灰灰色	良好	第1区	第4層
29		鉢	直径口径 23.4 根元高 4.3 合計	0.1m前後の砂粒を多く含む	灰白色	良好	第1区	第3層

土師器・土師質土器(第40図1~22)

当面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区	層位
26	1	小皿	口径 6.4 根元高 1.4 合計	0.1m前後の砂粒を少し含む	黄褐色		第1区	第4層
2		小皿	口径 7.2 根元高 1.5 合計	粘土質	乳褐色		第1区	第4層
3		小皿	口径 7.2 根元高 1.5 合計	0.1m前後の砂粒を含む	淡褐色		第3区	
4		小皿	口径 7.8 根元高 1.7 合計	0.1m前後の砂粒を含む	淡茶褐色		第1区	第4層
5		小皿	口径 7.9 根元高 1.4 合計	粘土質	乳黄色		第1区	第4層
6		小皿	口径 8.5 根元高 1.5 合計	粘土質	外面 淡褐色 内面 乳褐色		第1区	第3層
7		小皿	口径 8.8 根元高 1.1 合計	0.1~0.4mmの砂粒を少量含む	暗茶褐色		第1区	第3層上
8		小皿	口径 8.8 根元高 1.1 合計	粘土質	黄褐色		第1区	第4層
9		小皿	口径 8.8 根元高 0.0 合計	粘土質	淡棕色		第1区	第4層
10		小皿	口径 8.5 根元高 1.3 合計	粘土質	乳灰色		第1区	第4層
11		小皿	口径 9.3 根元高 1.8 合計	砂粒を含む	乳黄灰色		第1区	第4層
12		小皿	口径 9.9 根元高 1.6 合計	粘土質を含む	乳褐色		第1区	第4層
13		小皿	口径 7.8 根元高 1.1 合計	粘土質	淡褐色		第1区	第3層
14		小皿	口径 7.4 根元高 1.4 合計	粘土質	淡褐色		第1区	第3層
15		小皿	口径 8.5 根元高 1.6 合計	粘土質	乳褐色		第1区	第3層
16		小皿	口径 9.6 根元高 1.8 合計	粘土質	淡褐色		第3区	第3層
17		皿	口径 11.6 根元高 2.1 合計	粘土質	乳赤褐色		第2区	第4層
18	図13-5	皿	口径 10.2 根元高 2.2 合計	0.1m前後の砂粒を含む	外面とらは淡褐色で内面は乳褐色を呈する		第1区 外裏造	
19		皿	口径 10.6 根元高 2.0 合計	0.1m前後の砂粒を含む	乳黄色		第3区	第3層上

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区	層位
図40-20		皿	復原口径 15.3 残存高 2.0	0.1~0.3mmの砂粒を多く含む	外面:灰褐色 内面:灰褐色		第1区	第3~4層
21		皿	復原口径 14.4 残存高 2.1	0.1~0.3mmの砂粒を多く含む	暗茶褐色		第1区	第4層
22		縁盤	残存高 3.8 残存径 2.7	0.1~0.3mmの砂粒を多く含む	乳白色		第1区	第5層

瓦器(第40図23~46)

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎上	色調	焼成	出土地区	層位
図40-23		皿	口径 9.5 残存高 1.4	細砂粒を含む	黒褐色		第1区	第4層
24		皿	口径 9.6 残存高 2.0	砂粒を含む	外面:灰褐色 内面:灰褐色		第3区	第3層
25	図13-6	皿	口径 11.4 残存高 3.0	0.1~0.3mmの砂粒を多く含む	外面:土褐色 内面:灰褐色		第1区 条里遺構	—
26		皿	口径 11.6 残存高 2.7	粗製土	黑色		第1区	第4層
27		皿	口径 11.1 残存高 1.8	粗製土	灰黑色		第3区	第3層
28		縁	復原口径 11.3 残存高 2.0	砂粒を含む	外面:灰褐色 内面:黑色		第2区	第5層
29		縁	復原口径 12.0 残存高 3.0	粗製土	外面:黑色 内面:灰褐色		第1区	第4層
30		縁	復原口径 11.8 残存高 3.0	0.1cm前後の砂粒を多く含む	黑色		第5区	第4層
31		縁	復原口径 12.9 残存高 3.2	0.1cm前後の砂粒を含む	外面:淡茶褐色 内面:黑色		第5区	第4層
32		縁	復原口径 13.8 残存高 2.7	細砂粒を含む	灰黑色		第2区 条里遺構	—
33		縁	復原口径 14.1 残存高 2.8	粗製土	黒褐色		第1区	第5層
34		縁	復原口径 14.9 残存高 3.2	粗砂粒を含む	外面:灰褐色 内面:灰褐色		第1区	第3~4層
35		縁	復原口径 14.5 残存高 2.7	細砂粒を含む	黒褐色		第2区	第4層
36		縁	復原口径 13.8 残存高 3.1	細砂粒を含む	灰黑色		第1区	第4層
37		縁	復原口径 13.8 残存高 3.4	細砂粒を含む	灰黑色		第1区	第3層
38		縁	復原口径 15.1 残存高 2.9	細砂粒を含む	黑色		第1区 条里遺構	—
39		縁	口径 15.2 残存高 3.0	砂粒を含む	黒褐色		第3区	第3層
40		縁	口径 15.6 残存高 4.7	砂粒を含む	外面:灰褐色 内面:黑色		第1区	第4層
41		縁	残存高 1.4 高さ 5.0	細砂粒を多く含む	黒褐色		第1区 条里遺構	—
42		縁	残存高 2.1 高さ 5.6	0.1cm前後の砂粒を含む 残存高 5.6	黒褐色		第1区	第4層

区画番号	回収番号	器種	法量(cm)	胎 土	色 調	焼 成	出土地区	層 位
西40-43		壺	底 口 高 3.1 身 口 径 4.7 身 高 6.4 合計 14.2	0.1~0.4cmの砂粒を多く含む	灰褐色		第1区	第4層
44		壺	底 口 高 3.9 身 口 径 4.8 身 高 6.4 合計 15.1	0.1cm前後の砂粒を多く含む	外壁 黒褐色 内面 黑 色		第1区	第1層
45		壺	底 口 高 3.2 身 口 径 3.8 身 高 5.8 合計 12.8	胎土上	灰黄色		第1区 条里遺構	
46		壺	底 口 高 3.0 身 口 径 4.0 身 高 6.4 合計 13.4	0.1cm前後の砂粒を含む	黑色		第1区 条里遺構	

陶器1(第41図)

区画番号	回収番号	器種	法量(cm)	胎 土	色 調	焼 成	出土地区	層 位
西41-1		壺 体	底 口 高 33.4 身 口 径 4.8 身 高 6.6 合計 44.8	0.1cm以上の砂粒を多く含む	外壁 灰褐色 内面 黑色		第5区	第4層
2		壺 体	底 口 高 31.4 身 口 径 4.9 身 高 6.6 合計 43.9	0.1cm前後の砂粒を多く含む	茶褐色		第5区 条里遺構	
3		壺 体	底 口 高 33.5 身 口 径 4.8 身 高 6.6 合計 44.9	0.1cm程度の砂粒を多く含む	外壁 黑褐色 内面 黑褐色		第1区 条里遺構	
4		壺 体	底 口 高 32.6 身 口 径 5.3 身 高 6.6 合計 44.5	0.1cm程度の砂粒を多く含む	灰 色		第1区 条里遺構	
5		壺 体	底 口 高 23.8 身 口 径 5.2 身 高 5.2 合計 34.2	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	灰褐色		第1区	第3層
6		壺 体	底 口 高 22.9 身 口 径 5.0 身 高 5.0 合計 33.9	砂粒をあまり含まない	赤褐色 以降外壁のみ灰色		第1区 条里遺構	
7 回13-7		壺 体	底 口 高 32.7 身 口 径 4.8 身 高 6.8 合計 44.3	砂粒をあまり含まない	赤褐色		第5区 条里遺構	
8	9	壺 体	底 口 高 32.6 身 口 径 5.5 身 高 6.5 合計 44.7	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	外壁 茶色 内壁 灰褐色		第1区 条里遺構	
9	8	壺 体	底 口 高 42.4 身 口 径 8.5 身 高 8.5 合計 51.4	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	灰暗褐色		第5区 条里遺構	
10		壺 体	底 口 高 24.6 身 口 径 12.2 身 高 12.2 合計 39.0	砂粒を少額含む	灰褐色		第1区 条里遺構	
11		壺 体	底 口 高 6.9 身 口 径 7.6 身 高 7.6 合計 22.1	0.1~0.4cmの砂粒を多く含む	茶褐色		第1区 条里遺構	
12		壺 体	底 口 高 8.9 身 口 径 10.0 身 高 10.0 合計 29.9	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	茶褐色		第1区 条里遺構	
13		壺	口 径 11.6 身 口 径 2.5 身 高 2.5 合計 14.6	砂粒を少額含む	灰褐色		第3区	第4層
14		壺	口 径 7.6 身 口 径 3.0 身 高 3.0 合計 13.6	0.1cm前後の砂粒を多く含む	深褐色 灰褐色		第4区	第3層
15	10	把手付鉢	口 径 13.2 身 口 径 4.6 身 高 4.6 合計 18.4	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	淡茶褐色		第1区 条里遺構	
16		鉢	底 口 高 8.8 身 口 径 9.7 身 高 9.7 合計 28.2	0.1~0.3cmの砂粒を多く含む	淡茶褐色		第1区	第2層

陶器2(第42図)

区画番号	回収番号	器種	法量(cm)	胎 土	色 調	焼 成	出土地区	層 位
西42-1	回14-5	皿	底 口 径 5.8 身 口 径 15.2 身 高 2.0 合計 23.0	0.1cm前後の砂粒を含む	輪廓部 淡灰色 底面部 淡褐色		第5区 条里遺構	
2		皿	底 口 径 2.9 身 口 径 6.2 身 高 2.0 合計 10.1	細砂粒を少量含む	輪廓部 淡灰色 底面部 淡褐色		第5区 条里遺構	

因面番号	因版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区	別位
國42-3	國14-5	刷	腹 高 2.6 高 宽 壁 4.2	黑褐和多含石	黒褐色 深褐色 深褐色	褐色 深褐色 深褐色	第1区	第3層
4	5	刷	縦 年 变 2.6 高 宽 迹 4.2	砂粒はあまり含まない	外輪部 内面	灰褐色 淡褐色	第5区 条里遺構	
5		刷	腹 高 2.2 高 宽 壁 3.6	砂粒はあまり含まない	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 淡灰褐色 淡褐色	第5区 条里遺構	
6	5	刷	腹 高 1.9 高 宽 壁 6.4	砂粒はあまり含まない	胎輪部 外輪部 内面	淡灰褐色 淡褐色 灰褐色	第1区	第3層
7		刷	腹 年 变 2.0 高 宽 壁 5.1	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	淡褐色 灰褐色 灰褐色	第1区 条里遺構	
8		直	腹 高 2.0 高 宽 壁 4.4	砂粒はあまり含まない	胎輪部 外輪部 内面	淡灰褐色 淡灰褐色 灰褐色	第5区 条里遺構	
9	5	直	腹 高 1.6 高 宽 壁 4.5	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	浅褐色 灰褐色 灰褐色	第5区 条里遺構	
10	2	刷	口 徑 12.4 高 宽 壁 2.5	0.1mm前後の砂粒を多く含む	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 淡褐色	第3区	第3層
11	5	缸	腹 高 2.1 高 宽 壁 4.2	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第5区 条里遺構	
12	3	罐	口 徑 10.2 高 宽 壁 5.8	砂粒上	胎輪部	灰褐色	第1区 条里遺構	
13	5	钵	口 徑 23.3 腹 高 2.5	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	灰色 白色 白色	第1区	第3層
14		器	口 徑 27.1 腹 高 2.5	砂粒はほとんど含まれない	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第2区 条里遺構	
15	瓶子	残 部	3.7	砂粒はほとんど含まれない	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第2区 条里遺構	
16		罐	口 径 11.2 高 宽 壁 4.7	砂粒上	胎輪部	灰褐色	第1区 条里遺構	
17	6	罐	口 径 11.7 高 宽 壁 3.9	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第1区 条里遺構	
18	6	罐	2.4 4.1	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第2区 条里遺構	
19	6	罐	2.5 4.6	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第1区 条里遺構	
20	6	罐	2.4 4.6	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第5区 条里遺構	
21	6	罐	2.9 5.0	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第1区 条里遺構	
22	4	直	口 径 12.2 高 宽 8.6	砂粒はほとんど含まれない	胎輪部 外輪部 内面	灰褐色 灰褐色 灰褐色	第1区 条里遺構	
23		直	口 径 20.5 高 宽 2.5	砂粒を少量含む	胎輪部 外輪部 内面	淡青褐色 淡青褐色 淡青褐色	第1区 条里遺構	
24		直	残 部 1.9 残 宽 6.0	砂粒はほとんどみられない	胎輪部 外輪部 内面	白色 白色 白色	第5区 条里遺構	
25		水指	口 径 12.0 腹 高 3.2	砂粒上	胎輪部 外輪部 内面	白色 白色 白色	第1区 条里遺構	
26	6	罐	残 部 2.3 残 宽 5.2	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	白色 白色 白色	第1区 条里遺構	
27		罐	残 宽 4.7 残 宽 6.7	砂粒を含む	胎輪部 外輪部 内面	黑色 黑色 黑色	第1区 条里遺構	
28	6	直	残 部 1.6 残 宽 5.8	砂粒はあまり含まない	胎輪部 外輪部 内面	白色 白色 白色	第3区 条里遺構	

磁器、染付磁器（第43図）

両面番号	両面番号	器種	法量(cm)	基土	色調	焼成	出土地区	層位
尾43-1	尾44-7	白磁碗	口 径 16.0 底 収 高 3.6	灰白色	淡灰白色の釉がかかる		第1区	第4層
			高 度 6.8 底 収 高 1.2	灰白色	淡灰白色の釉がかかる			
3	7	白磁碗	口 径 16.3 底 収 高 3.0	灰白色	淡灰白色の釉がかかる		第2区	第4層
			高 底 3.0 底 収 高 0.5	灰白色	淡灰白色の釉がかかる			
4	7	青磁碗	口 径 16.3 底 収 高 3.0	灰白色	淡灰白色の釉がかかる	第1区 条里遺構		
			高 底 3.0 底 収 高 0.5	灰白色	淡灰白色の釉がかかる			
5	7	青磁鉢	口 径 27.1 底 収 高 3.6	灰 色	淡灰褐色の釉がかかる		第3区	第3層
			高 底 5.6 底 収 高 1.0	淡褐色	淡灰褐色の釉が厚くかかる			
6	7	青磁碗	口 径 16.0 底 収 高 1.0	灰白色	淡灰褐色の釉が厚くかかる	第1区 条里遺構		
			高 底 4.5 底 収 高 1.0	灰白色	淡灰褐色の釉が厚くかかる			
7	7	青磁碗	口 径 16.0 底 収 高 1.0	灰白色	淡灰褐色の釉が厚くかかる	第1区 条里遺構		
			高 底 4.8 底 収 高 1.1	白 色	淡青褐色の釉が厚くかかる			
8	7	青磁碗	口 径 16.0 底 収 高 0.5	白 色	淡青褐色の釉が厚くかかる	第5区 条里遺構		
			高 底 5.0 底 収 高 0.5	白 色	淡青褐色の釉が厚くかかる			
9	7	青磁碗	口 径 16.0 底 収 高 0.5	白 色	淡青褐色の釉が厚くかかる	第5区 条里遺構		
			高 底 5.5 底 収 高 0.5	灰 色	淡灰褐色の釉が厚くかかる			
10	尾15-1	碗	口 径 22.0 底 収 高 5.5	灰 色	淡灰褐色の釉が厚くかかる 質入がある	第1区 条里遺構		
			口 径 11.4 底 収 高 1.5	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる			
11	7	碗	口 径 9.8 底 収 高 5.2	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 10.0 底 収 高 5.8	灰白色	淡青灰色の釉が厚くかかる			
12	7	碗	口 径 9.8 底 収 高 5.2	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 10.0 底 収 高 5.8	灰白色	淡青灰色の釉が厚くかかる			
13	7	碗	口 径 9.8 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 9.8 底 収 高 5.0	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる			
14	7	碗	口 径 9.8 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 10.0 底 収 高 6.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
15	7	碗	口 径 9.8 底 収 高 6.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 10.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
16	3	碗	口 径 12.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 12.5 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉がかかる			
17	7	碗	口 径 11.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 11.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
18	7	碗	口 径 11.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 11.2 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
19	7	碗	口 径 11.2 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第2区 条里遺構		
			口 径 11.2 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
20	7	碗	口 径 11.2 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 11.2 底 収 高 4.8	灰白色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
21	7	碗	口 径 11.2 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉が厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 11.2 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
22	4	碗	口 径 11.0 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 10.0 底 収 高 6.1	灰白色	淡青灰色の釉がかかる			
23	5	碗	口 径 10.2 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 10.2 底 収 高 5.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
24	7	碗	口 径 9.7 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 9.7 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
25	7	碗	口 径 9.7 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる	第1区 条里遺構		
			口 径 9.7 底 収 高 4.8	白 色	淡青灰色の釉がやや厚くかかる			
26	7	重	口 径 9.7 底 収 高 4.8	灰白色	青白色の釉が厚くかかる	第1区	第3層	
			口 径 9.7 底 収 高 4.8	灰白色	青白色の釉が厚くかかる			

染付磁器 (第44図)

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区	層位
図44-1	図15-6	碗	口 径 10.0 高さ 5.1	灰白色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第1区 条里遺構	
2	7	碗	口 径 9.6 高さ 5.5	淡灰褐色	白青色の釉が厚くかかる		第2区 条里遺構	
3	8	碗	口 径 10.0 高さ 4.9	淡灰色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第5区 条里遺構	
4		碗	口 径 10.0 高さ 3.6	淡灰色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第1区 条里遺構	
5		碗	口 径 9.6 高さ 5.9	灰白色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第5区 条里遺構	
6		碗	口 径 9.6 高さ 5.6	白灰色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第5区 第2層	
7		碗	高 口 径 4.0 高さ 6.8	灰白色	白灰色の釉が厚くかかる		第5区 条里遺構	
8		碗	高 口 径 4.0 高さ 1.0	灰白色	白青色の釉がかかる		第1区 条里遺構	
9		碗	高 口 径 7.1 高さ 1.3	灰白色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第1区 条里遺構	
10		豆	口 径 19.4 高さ 5.9	淡灰色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第1区 条里遺構	
11		皿	口 径 14.0 高さ 2.7	淡灰色	淡灰青色の釉が厚くかかる		第1区 条里遺構	
12		皿	口 径 20.0 高さ 8.9	白色	淡白青色の釉がかかる		第1区 第2層	
13		碗	口 径 10.6 高さ 4.5	白色	淡白青色の釉がかかる		第1区 条里遺構	
14		碗	口 径 10.0 高さ 4.3	白色	淡白青色の釉がかかる		第1区 条里遺構	
15		碗	高 口 径 4.5 高さ 6.8	白色	灰白色の釉がかかる		第1区 条里遺構	
16		碗	口 径 11.6 高さ 4.6	白灰色	外壁は淡緑色内面は白灰色の施物		第2区 条里遺構	
17		碗	高 口 径 4.0 高さ 6.7	白灰色	淡灰青色の釉がかかる		第1区 条里遺構	
18		盃	口 径 14.3 かえり径 11.6	白色	白色		第1区 条里遺構	
19		盃	高 口 径 7.6 高さ 6.6	白色	淡白青色の釉が厚くかかる		第2区 条里遺構	
20		猪口	高 口 径 4.2 高さ 6.5	白色	口青色の釉が外面に厚く内面にうすくかかる		第2区 条里遺構	
21			高 口 径 2.4 高さ 6.6	白色	淡白青色の釉がかかる		第2区 条里遺構	
22		盃	口 径 8.4 高さ 4.1	白灰色	淡灰青色の釉がかかる		第2区 条里遺構	
23		盃	口 径 8.7 高さ 2.4	白色	白灰色の釉がかかる		第1区	第3層
24		盃	口 径 6.1 高さ 4.7	白色	白色の釉がうすくかかる		第5区 条里遺構	
25		碗	高 口 径 5.4 高さ 1.4	灰褐色	淡灰青色の釉がかかる		第1区 条里遺構	

第VI章 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、第4章で述べたごとく、大小の河川とそれに付随する溝、掘立柱建物群、条里遺構等である。以下、遺構・遺物から考えられることを若干述べ、まとめとする。

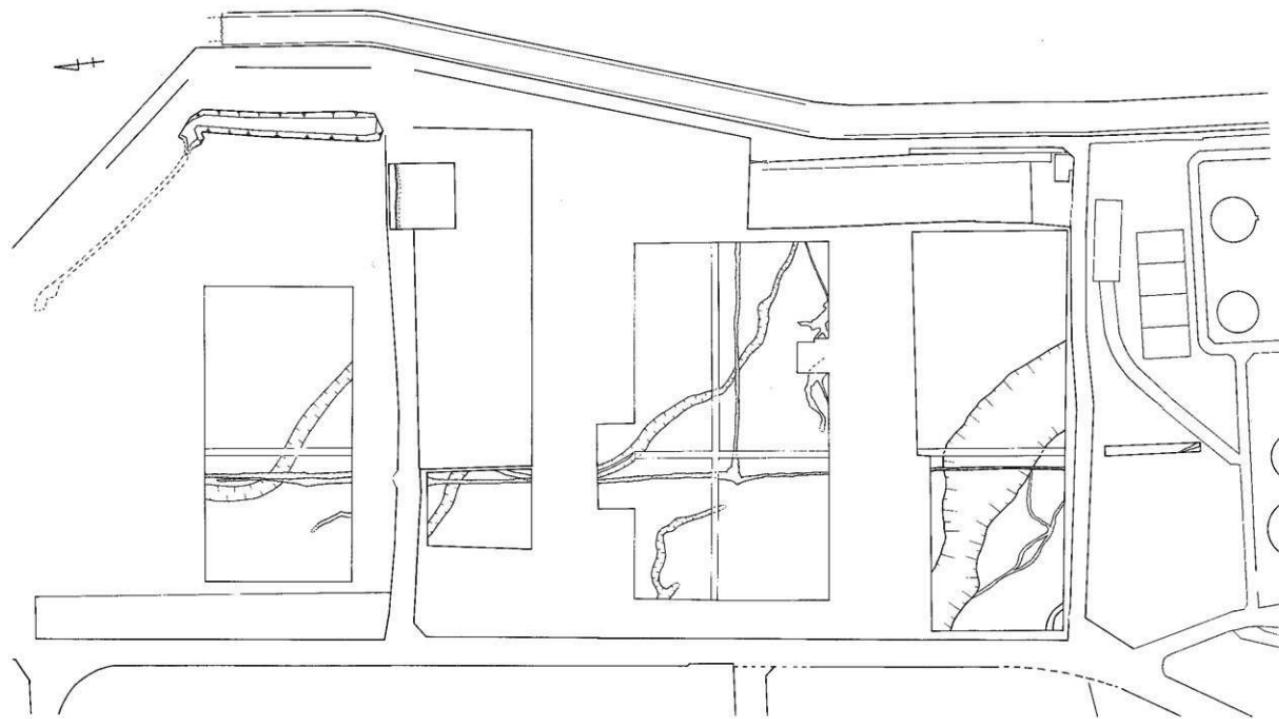
第4調査区において、第6層の青灰色微砂層より縄文時代中期の土器（船元II式）が出土した。その出土状況を見るかぎり、付近の生活地より流されてきた可能性が強い。北方、空港A遺跡でも同じく中期の土器（勝坂式）^{註1}が出土していることなどから、付近に縄文時代中期の遺跡が存在する可能性がある。

弥生時代の遺構は自然の河川と、それに付随する大小の溝である。そこには自然の流路を改修したものや、新たに掘削したものがあり、その目的を考えてみると、水田等の関係でとらえるのが妥当のようである。その中で、第1調査区の南東部では土器、若干の石器が包含層、ないし遺構内よりややまとまって出土した地域である。この地域は田能遺跡と勝部遺跡の中間地というよりは、勝部遺跡の延長としての生活範囲内であると考えられる。

古墳時代においても、弥生時代と同様、後期に至るまで暗灰色粘土の堆積が示すように湿地帯であったことが窺われる。後期に至って、この上に砂層が流れ込み、ほとんどの溝は埋没する。この砂層は北方の第2調査区西方で厚く、南方の第1調査区の中央付近で薄くなる。おそらく、北西方向からの氾濫を受けたものとみられる。

平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡を、第5調査区の西側で検出した。兵庫県側と大阪府側にまたがるもので、合同調査を行なった地域である。報告は兵庫県側の報告の際にに行なうもので、今回は割愛したが、大阪府側への広がりは昭和54年度の調査で、検出できなかったことにより（財）大阪文化財センターの試掘トレンチ No.3 が東限のようである。

条里遺構は第1調査区、第2調査区、第3調査区、第4調査区で検出したもので、すべて第3層上面より切り込まれている溝である。第3層は鎌倉時代より室町時代末までの遺物を含むことより、最も古く湧って考えてみても、近世初頭の時期である。したがって厳密にいうならば、条里遺構という呼称は正しくないと思われるが、今回そのまま用いた。というのは、現在の溝の直下にあたること、また詳細には検討していないが、豊島郡の条里制復原図の丘陵の区画線にあたることなどからである。条里制の問題は歴史地理の方面から種々論議され、律令制との関係で扱えられてきた。豊島の条里制も大化前代に遡る可能性のあることが指摘されている。^{註2}しかし、今回の地域にだけ限定すれば、大化前代に遡る可能性はなく、それどころか、近世初頭という非常に新しい時期のものである。また第4章で述べているごとく、第1調査区



第54図 造構換出全体図

で検出した交点が西側に延びないという特異なものである。このことは1町北側と南側の東西を区画する溝においても、西方には延びないということが確認されている。^{註3}したがってこの溝は、区画の西限を示しているものと考えられる。このようなことは、この地域が豊島郡と河辺郡の境にあたることなどにも関係しているものかもしれない。いずれにしても、いくつかの問題点が出てきたことは事実である。今後、歴史地理学の方面と共同で作業を進めていきたいと考えている。

出土遺物のうち、特に注目されるものにナスピ形着柄鋤がある。この遺物は第1調査区の弥生時代中期と考えられる溝1からの出土である。近年、このタイプの鋤が各地で出土し、その時期、用途について注目されている。時期は弥生時代後期から古墳時代後半期にかけての例がほとんどであり、弥生時代中期に漸るとされるものは筆者の狭い知見ではあるが、現在のところ知らない。また用途についても、鋤としながらも若干問題があるようである。というのは弥生時代から古墳時代にかけてのものは、そのほとんどが二叉に分かれ、長さも50cm前後で、薄いものである。これを農耕具としてみると、水田作業のどの段階で用いたものか、鋤として使用したとみても、このような長くて、薄いもので耐久が可能であろうか。今回出土のものも長さ74cmで、厚さ1cmほどしかなく、いくら湿田といても、これをそのまま使用して耕することは到底不可能なことである。それならば、弥生時代の水田経営において、堆肥をやるかどうか定かにし難いが、もし干糞のようなものを堆肥代わりに使ったとみた場合、そのような軽作業に用いたものとみることはできないであろうか。

以上、今回の調査地の状況、ならびに特定の遺物について述べてきたのであるが、古代から現代に至るまで、この地は居住地にはあまり適していなかったようである。そのことは堆積の状況が如実に示しているように、中世に至るまで幾多の氾濫を受けたことからも窺える。また水田地帯であったとみても、弥生時代から古墳時代は湿田、それ以後中世まで半湿田、近世に入ってやっと乾田経営ができるようになった地域である。

註1 佐原真「縄文時代」『考古学からみた伊丹地方』伊丹市史第1巻

註2 末中哲夫「縄文時代の豊中地方」『豊中市史』第1巻第1章第4節

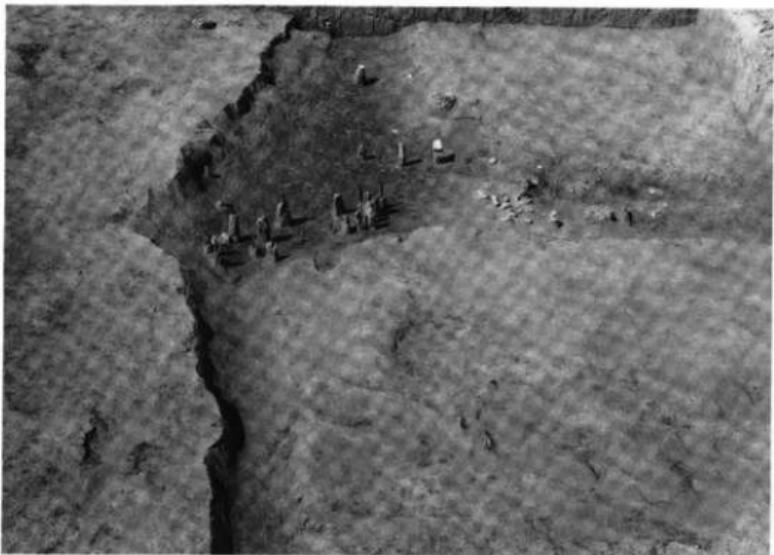
註3 兵庫県開拓担当者、小川良太氏より報告を受けた。

註4 名称は、黒崎直「古墳時代の農耕具」『研究論集III』奈良国立文化財研究所、1976年に従った。

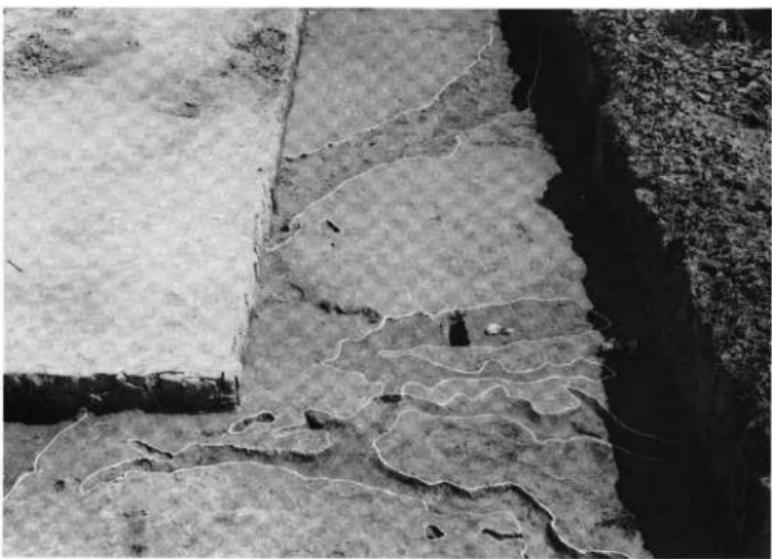
図版



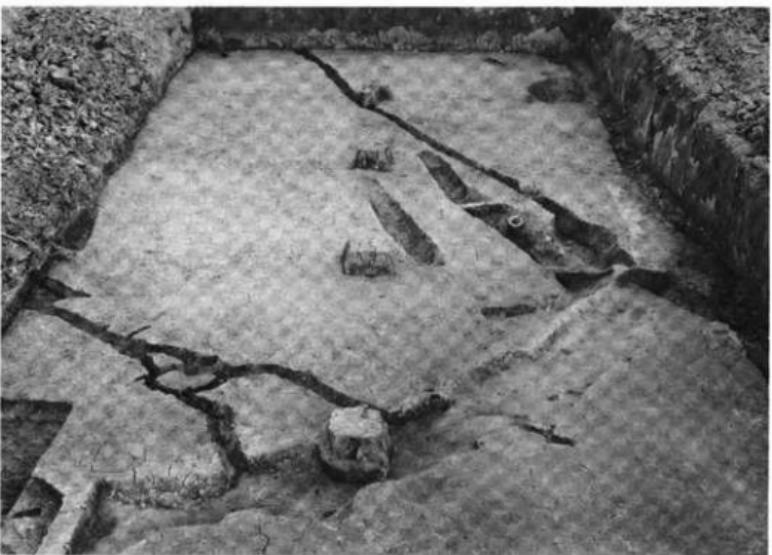
(1) 全景



(2) 条里遺構交点



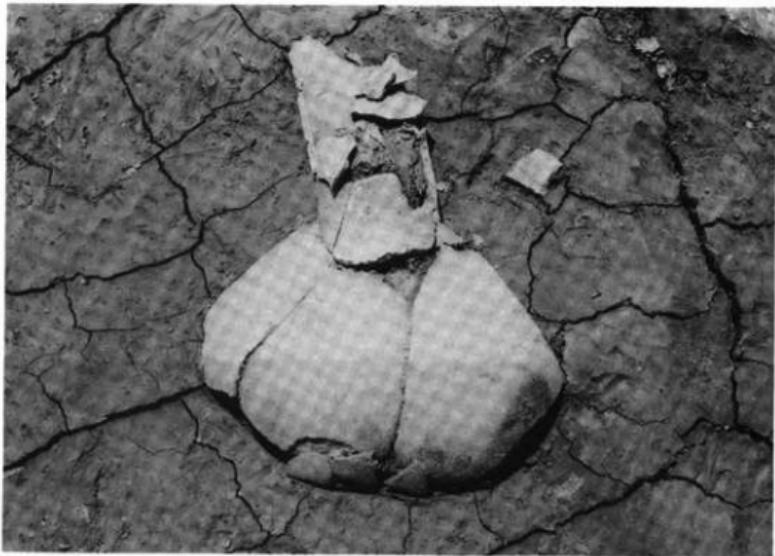
(1) 南東部 弥生時代



(2) 南東部 弥生時代



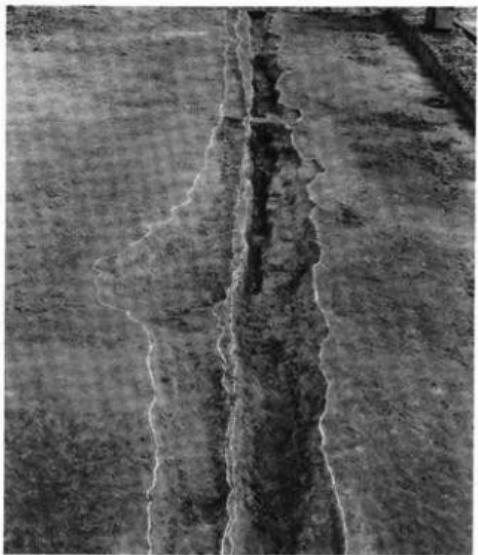
(1) ナビス形着柄鉈



(2) 甕生土器（壺）



(1) 全景



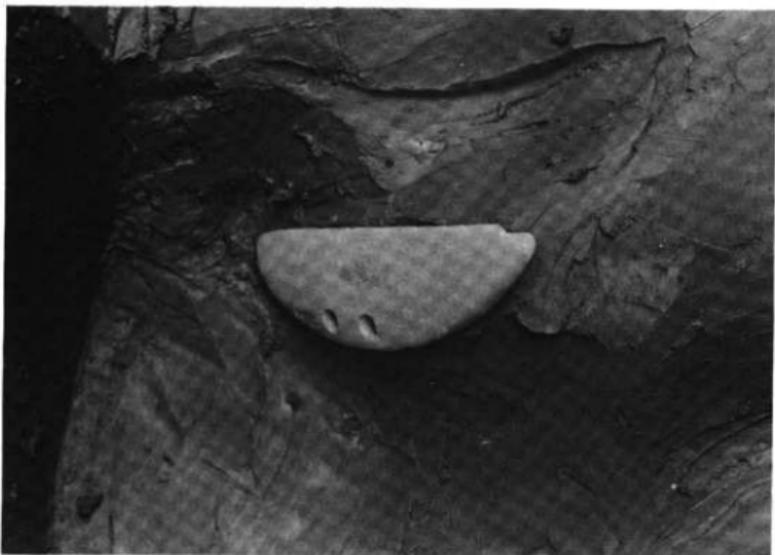
(2) 条里造構



(1) 第2調査区 条里遺構断面



(2) 第3調査区 西側部分



(1) 第3調査区 石包丁



(2) 第4調査区 繩文土器



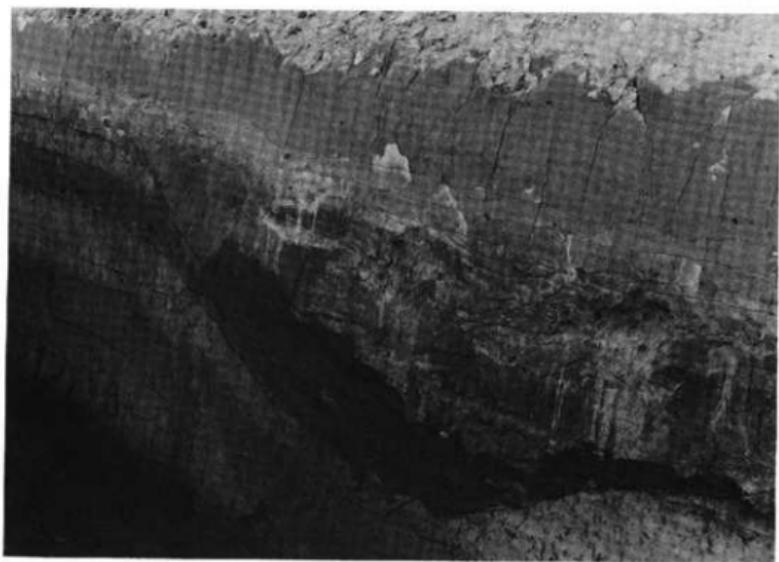
(1) 全景



(2) 河川



(1) 弥生時代 溝



(2) 古墳時代 溝断面



(1) 弥生時代 溝・条里遺構断面



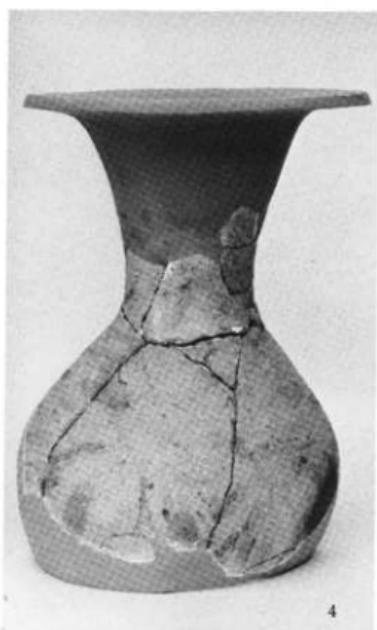
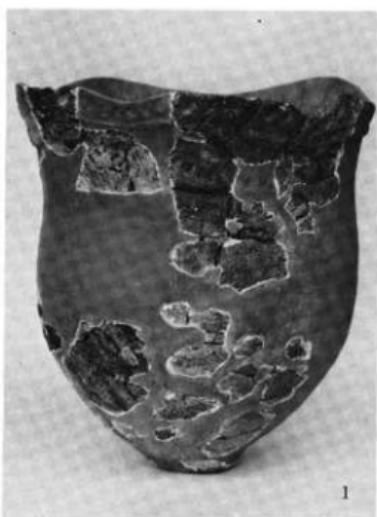
(2) 第6調査区 全景

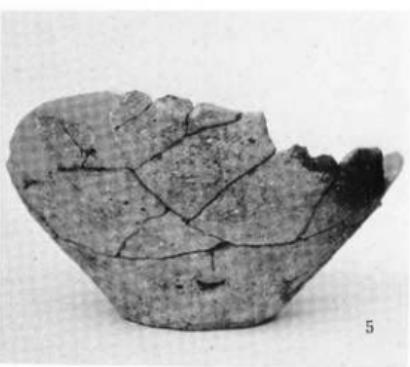


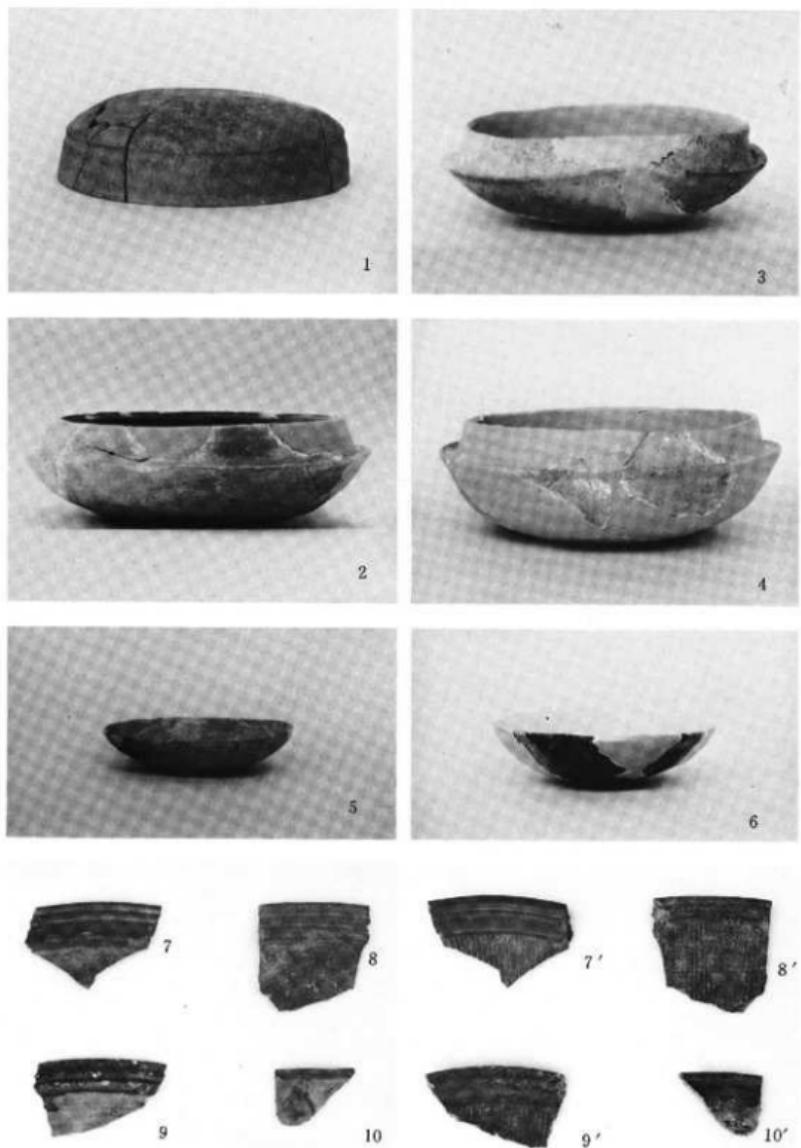
(1) 排水施設（上から）



(2) 排水施設（横から）







1~4・須恵器、5・土師器、6・瓦器、7~10・陶器



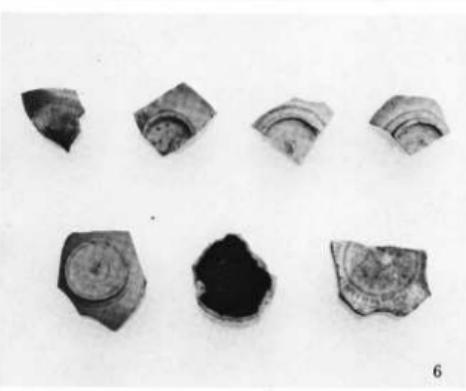
1



5



2



6



3



7



4



1



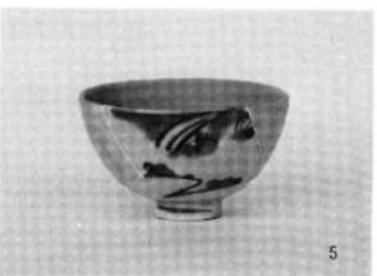
2



3



4



5



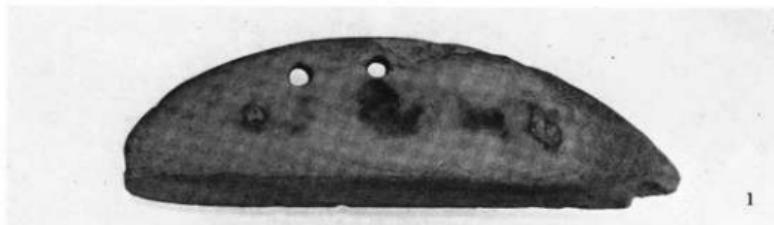
6



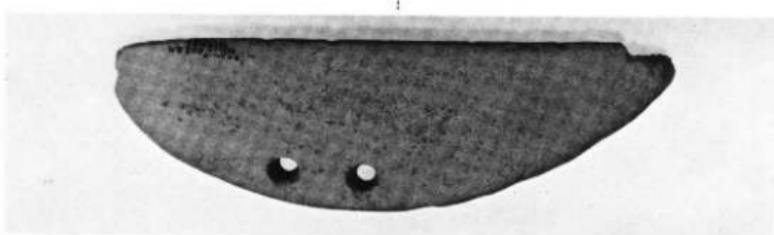
7



8



1



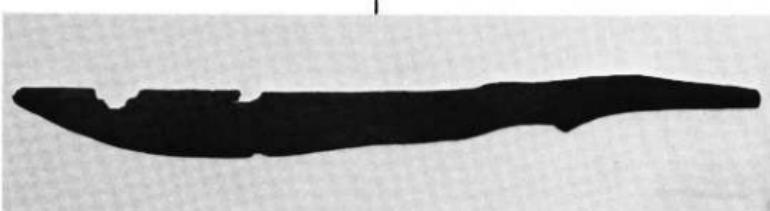
2



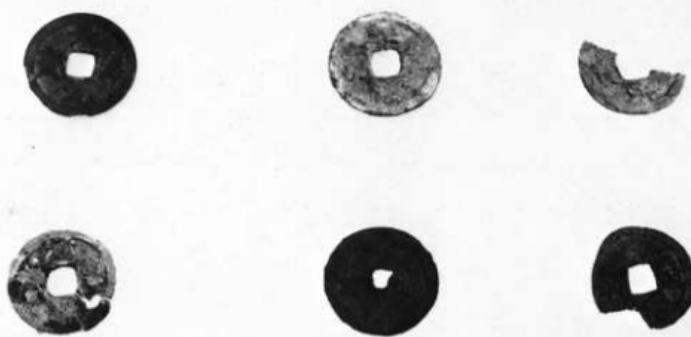
3



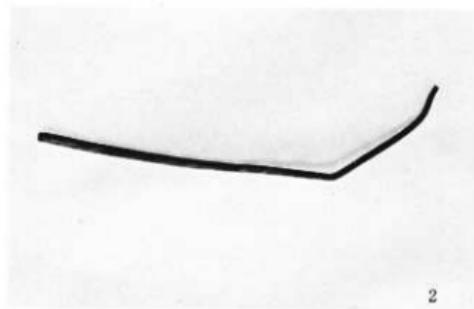
4



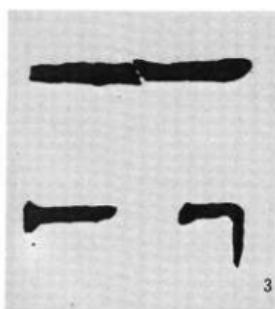
1・ナスビ形着柄鉤 2・尖頭状木製品 3・杭



1



2



3

豊中市文化財調査報告 第7集

原田西遺跡

1981年3月

発行 猪名川流域原田下水処理場遺跡調査団

編集 豊中市教育委員会社会教育課文化係

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所